

佐渡モッコ、中村木子の生涯と作品

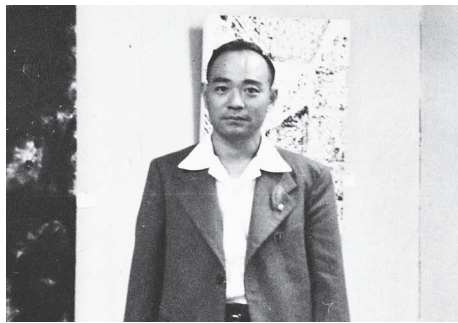
松矢 国憲

昨年度(平成二十六年)度、中村木子(図版1)の作品を五点、当館で受贈した。中村木子は、佐渡出身の書家であり、昭和二十七年(一九五二)、森田子龍、井上有一、江口草玄(本県現柏崎出身)、関谷義道の五人で墨人会を結成、既成の書壇と訣別し、モダンアートの長谷川三郎、津高一、須田剋太、吉原治良らと交流し、ゲンビ(現代美術懇談会)展(註1)やモダンアートフェア(註2)に参加する一方、京都大学教授・美学者井島勉の美学に影響を受け、独自の書を模索した一人である。

当館では、平成八年(一九九六)に「戦後の書・その一変相 江口草玄」を開催し、草玄の書とともに、その様相、時代性を示すため、木子の作品も三点紹介した。同展は当初、草玄と木子の二人を中心とした展示を構想していたものであったが、木子が結成後早くに家業のため離脱し、また亡くなるのも早く、作品の存在調査がなかなか進まなかったため、草玄一人に絞った展覧会となった。それから二十年近く経ち、昨年度木子の作品を収蔵する機会を得たことから、改めて中村木子について、その生涯と作品、そして資料について二十年來調査を進めていたことをまとめておきたい(以降、旧字体は新字体、変体仮名は現行の平仮名に改めて記す。また敬称は略させていただきます)。

一、生涯と年譜

まずここでは、中村木子の生涯を辿り、書については、「二、作品」で後述する(図○で示す)。散見する限り、中村木子について、師事していた上田桑鳩主宰、森田子龍編集の『書之美』誌(註3)、そして自身達が立ち上げた墨人会の機関誌『墨人』誌(註4)(図版2)を除いて、木子のことを公表、取り上げたものは、数多くない。それらの資料および、関係者からの聞き取りを加え、編集した年譜を次に記すことで生涯を辿るものとする。白抜き文字は典拠・出典(雑誌名の数字は元号1月)。



図版1 昭和二十九年第一回墨人展の中村木子。後ろは(図157、左図158)

中村木子 年譜
元号(西暦)

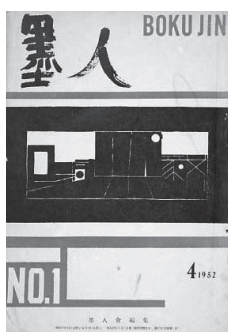
事項

大正五年
(一九一六)

二月中旬、佐渡、両津湊で父佐次平(さじべい)、妻ヨシの長男として生まれる。聞き取り・墨人四九・四・五／曾祖父に佐魂と命名される。墨人二八・一六／家は、父が起こした蒲鉾などの水産加工の(サ)ヤマサ(中村食品工業(株))。父は蒲鉾協会会長や町議会議員も務めた。聞き取り

大正十一年
(一九二二)

両津尋常小学校入学。墨人二八・一六／



(註3) 研精会発行、昭和二十三年(一九四八)四月二日創刊会
長・上田桑鳩で同人の森田子龍が編集。
(註4) 墨人会の機関誌。第三種郵便認可の関係から『書之美』
四十七号が改題第二号『墨人』創刊号となる。
図版2 『墨人』創刊号

(註1) 朝日新聞社美術記者村松寛の世話により吉原治良、
須田剋太、山崎隆夫、中村真、植木茂、田中健三が中心
になって、昭和二十七年(一九五二)十月に阪神地域の絵
画、彫刻、工芸、書生け花等の各界を網羅した前衛作
家達が集い、前衛美術展開催を計画した。その前段と
して毎月十三日に大阪朝日新聞社で研究課題を基に
自由に個人の立場からお互いに忌憚なく語り合うため
に懇談会を開いた。翌年から五回の展覧会「ゲンビ展」
も開催した。

(註2) ゲンビから派生して開催された展覧会。モダンアートが
あらゆる分野に浸透している点に目を向け、デザイン性
に優れた商工業製品を加えて実施された。ナショナル
等企業のデザイン製品を出品することで寄付を集め、
展覧会の規模拡大を図った。

昭和二年
(一九二七)

昭和四年
(一九二九)

昭和七、八年
(一九三二、三)

昭和十一年
(一九三六)

昭和十五年
(一九四〇)

昭和十六年
(一九四一)

昭和十八年
(一九四三)

昭和二十年
(一九四五)

昭和二十一年
(一九四六)

両津尋常小学校卒。両津高等小学校入学。聞き取り
小学生の時、習字の成績は六十〜七十点位。祖父から欧陽詢風な字の手習いを受けていた。墨人二八六

両津高等小学校卒。／佐渡では長男には家を継がせるため進学させない風習があった。聞き取り

十六、七歳頃、無理の勉強で一寸身体を悪くする。／この頃、北海道の従兄弟の後藤竹涯に『書鑑』を進められて書道誌に触れるようになる。その後、長野・横田祖岳『精肅』、高崎・友松龍堂『龍集』等の競書雑誌に出品。墨人二八六

戦前期、鈴木翠軒の佐渡講習の際、原田翠屋に師事、翠軒流を学ぶ。東京の原田、増山等の翠軒高弟の門をたたき、翠軒の巢鴨宅に尋ねることも一回あった。名古屋『復朴』誌を通じて今井矢江、伊東翠峯を知り、「香山」「翠江」「翠々庵」等の号で『風信』『復朴』『筆勝』の競書雑誌に出品。その間、群馬の米倉大謙註5(図版3)に長く師事。墨人二八六

孟法師碑の臨書(図1)を香山名で展覧会に出品する。現物

同郷の村田キヨと結婚。聞き取り／この頃、技術と、技術の惰性で字をかくことが書芸術かという疑問を持ち始め、一度書道藝術の添削券で上田桑鳩の添削を受ける。墨人二八六

六月十六日、長男紘一誕生。聞き取り

七月十八日、次男啓二誕生。聞き取り／

この頃、出征？又は一、二年、相川鉦山に徴用される。(註6) 聞き取り
昭和十四年五月以降、終戦までに『青少年学徒二賜ハリタル勅語』(図2)『教育勅語』(図3)を書く。現物

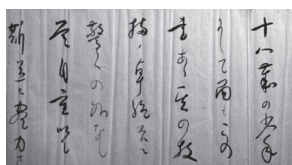
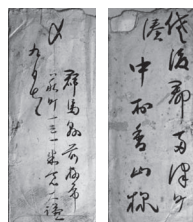
十二月二十日、長女恵子誕生。聞き取り

春、敗戦の復興のために芸術をとおして佐渡の文化振興、国家の再建に役立てようと、木子をはじめ、工芸家の佐々木象堂、二代宮田藍堂ら、書道、絵画、彫塑、工芸、詩歌の十九人で淡交社を結成する。無絃社の歩み
八月、十年筆をもたなかったが、千葉船橋布穀庵を尋ね、上田桑鳩に入門する。墨人二八六
十一月、淡交社の同人による展覧会を佐渡・畑野小学校礼法室で開催。以降、年一回同人展が開催される。

無絃社の歩み

(註5)

明治三十七年(一九〇四)平成六年(一九九四)、群馬県利根郡白沢村(現沼田市)生まれ。元群馬大学教授。書道の研究、普及活動のほか、小中学校用の教科書も手がけた。昭和八か九年九月七日付けの香山(木子)宛の手紙が残る。「十八歳の少年にして而もこの書あり其の技倆ノ卓絶スヘテノ驚クの外なしノ益々自重以テノ斯□々尽力サレんことを切望ノ致候ノ通信教授料□□□故致候ノ楷行草各々持□□かな日技ノ貴下ノ御好みによりて右変更スルも結構に候ノ月謝四五十銭ノ右回答申上候ノ米倉大謙(封書表・佐渡郡両津町・湊ノ中村香山様ノ封書裏・群馬県前橋市ノ荘町三三米倉大謙ノ九月七日)図版3 手紙は巻頭部分



(註6)

『墨人』第二十八号中で木子は出征したと記しているが、次男啓二氏によれば父佐次平が町議会議員でもあったので徴兵ではなく、相川鉦山に二年徴用されたと言う。

昭和二十二年
(一九四七)

一月、佐渡病院講堂で、前年の淡交社展の作品を移動展として開催。無絃社の歩み

昭和二十三年
(一九四八)

春、江口草玄と知り合う。以降二人で葛塚町(現新潟市)の弦巻松蔭(註7)を再々尋ねる。聞き取り

八月、『書的美』八月号、第五回競書成績で創作部人(位)九番目、一般規定部《節勁古松》六級二番目、一般随意部六級。書的美二三八

九月、『書的美』九月号、第六回競書成績で創作部《高臥》(図4)天(位)七番目、一般規定部《心安開放》四級、一般随意部四級に名が掲載され、《高臥》は、森田子龍に評される。書的美三一九

九月四日、上田桑鳩、宇野雪村、森田子龍による研精会『書的美』第一回推薦試験の審査会が神戸市熊内八幡神社で開かれ、三級に昇級。書的美三二一

十月、『書的美』十月号、第七回競書成績で条幅部人(位)五番目、創作部人(位)。書的美三三〇

十一月、『書的美』十一月号、第八回競書成績で規定部《張玄墓誌銘》三級に、「香山」名で掲載。書的美三三十一

十二月、『書的美』十二月号、第九回競書成績で創作部、随意部三級七番目に名が掲載される。また、研精会幹事(兼支部長)として掲載される(翌年十月号まで)。書的美三三十一

暮れ、井上有一が上田桑鳩宅で木子の「山名村碑」の臨書を見て木子の名と、そのうまさを記憶に残す。墨人四九一四五

昭和二十四年
(一九四九)

一月、『書的美』一月号、第十回競書成績で創作部《松風吹天簾》(図5)天(位)(宇野雪村審査評あり)、規定部三級四番目、随意部三級八番目、随意部は昇級。書的美四一

二月、『書的美』二月号、第十一回競書成績で創作部地(位)、規定部三級、随意部《臨高貞碑》(図6)三級二番目(岡村雄風評あり)、随意部は昇級。書的美四二

三月、『書的美』三月号、第十二回競書成績で条幅部、創作部地(位)六番目、規定部三級、随意部二級先頭で昇級。書的美四三

四月、『書的美』四月号に第二回研精会推薦試験成績が掲載され、一級に昇級。また、第十三回競書成績で、創作部地(位)、規定部《臨饗龍顔碑》(図7)三級二番目で昇級、随意部二級五番目。書的美四四

五月、『書的美』五月号第十四回競書成績で創作部《春秀》(図8)天(位)三番目(宇野雪村審査概評あり)、半紙規定部《臨王勃詩序》(図9)一級(註8)。書的美四一五

六月、『書的美』六月号第十五回競書成績で条幅随意部地(位)先頭、創作部、規定部《臨灌頂歷銘》(図10)一級二番目(上田桑鳩審査概評あり)、随意部一級七番目。書的美四一六

六月二十八日付け上田桑鳩手紙あり(図版4)、七月下旬に弦巻松蔭、木子のところへ行くので、江口草玄にも連絡を入れておくように依頼の内容。(註9)現物

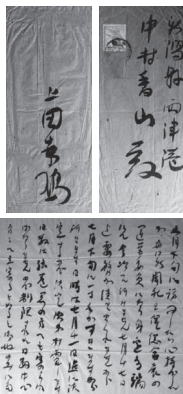
七月、『書的美』七月号第十六回競書成績で条幅創作部地(位)、条幅随意部天(位)四番目、創作部地(位)五番目、半紙規定部一級七番目。書的美四一七

八月、『書的美』八月号第十七回競書成績で条幅随意部《短歌》(図11)天(位)二番目(宇野雪村審査概評あり)、創作部《游魚動緑荷》(図12)天位四番目、半紙規定部一級、半紙随意部一級。宇野雪村に半紙創作部の審査概評で「数点あつ

(註7) 明治三十九年(一九〇六)―平成七年(二〇〇五)新潟県北蒲原郡葛塚町(現新潟市北区)生まれ。上田桑鳩に師事。奎星会創立に参画。戦火を避け郷里に疎開し、新発田に居を構える。松蔭書院、手毬会で後進を育てた。また日本書道院、毎日書道会などの全国組織の運営に携わった。

(註8) 「木子」が「木石」と誤植掲載されている。

図版4 手紙は巻頭部分



(註9) (句読点付す。六月下旬に訪問したい心持でした／が、毎日新聞社主催総合展の／運営委員になり身辺多端／にて今以つて行けません。七月十七日／迄要務が続き出られませんから／七月下旬に寸手がすぎますから／行きます。日時は七月十一日迄に決／定するので決定次第打電します。／日数は弦巻君の方へ寄らね／ばなりませんので制限された日数中で、方々へ立寄るとなると御地の方に多／くの日を費すわけにも行きませんから／正味三日間として下さい(行つた日を除いて)／観光ばかりでなく、話をしたり書いた／りもしたいから観光は代表的のところ／三にして下さい。弦巻、江口君へも／私からも云つてやりますが君からも／連絡願います。／書きものがあつたら御世話願います。近頃交際費に莫大な出費を／して居りますので出来るだけ頼／みます。先ハ遅延御返答迄／草々／六月二十八日／上田生／香山楼

た中からこの作品を取り出した、一番まとまっていたからである。意匠といひ、線の味といい一と頃の桑鳩先生のものである。君としての意匠をとり出してほしい。そして渋さの中に光りを求めて行けばもつと力強いものが生れるだろう。」と評される。【書的美二四一八】

八月十三日から二十日まで東京都美術館で、第二回毎日展（正式名称：日本総合書芸展）が開催され、《臨多胡郡碑》（図13）が褒状受賞し展示される。また江口草玄と毎日展を見に上京する。【書的美二四一九】

九月、『書的美』九月号に毎日展出品の《臨多胡郡碑》図版掲載（森田子龍評あり）。第十八回競書成績で条幅部創作部《蒲深柳蜜》（図14）天（位）二番目（宇野雪村審査概評あり）と五番目、創作部《臨野水看浮雲》（図15）二番目（森田子龍審査概評あり）、半紙規定部一級三番目、半紙随意部一級四番目。【書的美二四一九】

九月二十五日付け上田桑鳩手紙あり（図版5）。病氣見舞いや送金の御礼、来年の芸術院展に精進するように、また十二月の芸術院の少年展の審査員に推薦した等の内容。【註10 現物】

十月、『書的美』十月号に研精会第三回推薦試験成績表が掲載され、準会友とされる。また、第十九回競書成績で条幅創作部天（位）、創作部《追涼風》（図16）天（位）四番目（宇野雪村審査概評あり）、半紙規定部一級五番目、半紙随意部一級三番目（註11）。【書的美二四一十】

十一月、『書的美』十一月号の同人・準会友欄に名が掲載される（二十六年二月号まで）。また、上田桑鳩に同人作品評・準会友習作で「六朝ものらしいが清純の気が乏しい。」と評される。【書的美二四一十一】

十二月、『書的美』十二月号で上田桑鳩に同人作品評・準会友習作を「前半はよい、後半に上滑った線が目立つて、時代が下る。」と評される。【書的美二四一二】

昭和二十五年
（一九五〇）

一月、『書的美』一月号で上田桑鳩に同人作品評・準会友習作で「硬い、そして筆先がききすぎる。これは手に力を入れすぎるからである。もつと原本の味を見なければ、感覚が硬化するだらう。原帖の字底を流れる筆脈を見るべきでもある。」と評される。【書的美二五一】

一月十五日、井上有一が第三回書道芸術院展出品作の草稿を上田桑鳩に見せに行った際、木子と草玄のものを見せられ、自信喪失する。【註12 書の解放とは】

二月、『書的美』二月号の習作集に《臨鄭文公下碑》（図17）が掲載（上田桑鳩評あり）、河田一丘の「在京二箇月」の記事の中で木子が上田桑鳩に贈った石地蔵のことが触れられる。【註13 図版6】 【書的美二五一】

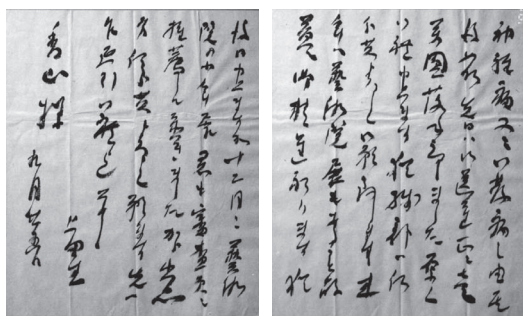
二月一日から六日まで、上野の第三回書道芸術院展に《臨山名村碑》（図18）出品、佳作賞受賞。【書的美二五一三】

同月、『平原の歌中より』（図19）を揮毫。【現物】

三月、『書的美』三月号の作因集に第三回書道芸術院展出品《臨山名村碑》（図18）について寄稿。また、宇野雪村「同志同行の立場から―第三回書道芸術院展記―」で評される。【書的美二五一三】

四月、『書的美』四月号で上田桑鳩に「同人作品評」準会友創作《太上隱者「答人」》（図20）、また、準会友習作《臨出

図版5



（註10）

（句説点付す。）神経痛又々発病之由具／後如何。先日ハ御送金正二巻／万四落手致しました。厚く／御礼申上ます。猶殘□□／下共よろしく御願致します。来／年ハ芸術院展もあること故／益々御精進祈ります。猶／後日申上ますが、十一月二芸術／院の少年展君も審査員／推薦して置きましたから出品／方何分よろしく願います。先ハ／年□□御礼迄。草々／上田生／香山様／九月二十五日

（註11）

木子が「中村李」と誤植掲載されている。

（註12）

「（前略）泣きつ面で先生を尋ねたのは十五日であつた。先生三見いやな顔をして「感激がない。もと感激に溢れたものを作れ。皆はりきつているぞ」といわれる。地方からたくさん作品が届いている。江口草玄や中村木子等素晴らしい。すっかり自信を失ってしまった。」

（註13）

「十月十二日、早朝荷造りする。今夜離京するのだ。石地蔵様が二つ。これは佐渡の中村木子氏が先生へたくさん届けられたものを先生から皆さんへ頒けられたもの。五牛のと私のとを行李に入れた。奥様が「河田さん石地蔵い、ですね」と。富士石は富士川で拾ったのが家にある。富士石と地蔵様は今私の家の床に上げられている。」

図版6 木子が草玄に贈った地蔵。こうした佐渡の石仏が贈られたのだらう。



師頌》(図21)でも評される。【書之美二五十四】

五月、『書之美』五月号で森田子龍に「同人作品評 会友創作」で「課題の「蘭秀芝英」は純な瑞々しいもので愛すべき小品。甘いといへば甘いが、君の作にこの様な明快なものを余り見なかつたのと、それが君に加へたい一面だとかねがね思つてゐたので、この作を君のために喜んで拝見した。尚あまりに負担を感じることなく気軽にそして数多く作品し得るのは確かに君の長所だと思ふが、同時に君の大きな短所ともなつてゐる。腹の底に應へて来るやうな作、練つて練つて練り上げた作に接することの少いことがそれ。淡々と平常心で作品し得るといふ得難い長所を失ふことなく、更に一面、鍛刀のあの精錬の度をも学ばれたいと希ふのである。」と評され、《島崎藤村詩》(図22)についても評される。また、宇野雪村に「会友準会友習作雑感」で「木子君のは、ロマンチックで明るい。もつと厳しいものがほしいが、これはこれとして一つの甘い感触がある。」と一点評され、他一点《臨貫名松翁臨東方朔画賛》(図23)も評される。【書之美二五十五】

七月、『書之美』六・七月合併号で第一回書之美公募展(以降全国各地に巡回で出品目録に二点記される(図24)。【書之美二五六七】また、上田桑鳩に競書審査評・準会友条幅《竹外茶烟静籬間鳥声聞》(図25)が評される。【書之美二五六七】八月、『書之美』八月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題習作で《臨秋萩帖》(図26)、準会友随意習作で「もつと淡泊な味であつてほしい。胸に力もほしい。」と評される。【書之美二五十八】

九月、『書之美』九月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題条幅《風静書窓月滿樓》(図27)、準会友半紙習作で「太い六朝書の臨書は、手法を追うたもので、原本に直接するものでない。」と評され、同半紙習作の《臨貫名松翁私擬治河議》(図28)も評される。【書之美二五十九】

十月、『書之美』十月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題条幅《蒼嶂秋雲更白青林霜葉偏紅》(図29)、準会友随意条幅《夏木自新色泉声如旧時》(図30)、準会友課題習作《臨三十帖冊子橘逸勢部分》(図31)が評される。【書之美二六十一】十一月、『書之美』十一月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題条幅《臨喪乱帖》(図32)、準会友随意条幅《画中水嶂齋詩裏一江秋》(図33)、準会友課題習作《臨張遷碑》(図34)が評される。また、今号から始まった商業美術部に《茶房あかつき》のポスター試作(図35)も上田桑鳩に評される。【書之美二六十一】

十二月、『書之美』十二月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題創作で「情緒豊かだし、構想も面白いが、第二行の終り方が消散したのはおしい。」「準会友随意条幅で「水遠山長」四角の構成の中で、大きい空間と力とをつかんだ。それで、何かぼくぼくした脆い質があるが、がつちりした強いものが与えている。」「準会友課題習作で「木子の柔かく純化した気分は味なものだが、相当高く買つてよい。」と評される。また、先月号から始まったα部に出品した試作(図36)に対し、抽象画家の長谷川三郎が担当し、評される。【書之美二六十二】

同月上旬、書之美公募展が新潟に巡回し、江口草玄、弦巻松蔭、江川蒼竹らと集う。(図版7)【写真】

一月、『書之美』一月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題条幅で「軽快にして統一した完成品であるが、僕の真似で、自己表現になつていないから写真に出さない。」「準会友随意条幅《画屏無健筆爆竹有寒灰》(図40)、準会友課題習作で「自叙帖の一面を単化して、韻致あるものになっている。おしむらくは、得の右側の半円の線に立体性と、気力の貫通が乏しかつた。」「準会友随意習作《臨敦煌出土草書写経》(図41)が評される。また、α部(図42)と商業美術部《文化祭 佐渡俱樂部》(図43)を提出し、長谷川三郎からそれぞれ評され、商業美術部の他一点も「B之は関心出来ない。」



図版7
後列右から、中村木子、江口草玄
前列右から、江川蒼竹、弦巻松蔭

と評される。書的美二六一

同月、叔父（元岡津市長伊豆野宅郎の父）のために「聖徳太子」（図39）を揮毫し贈る。聞き取り・現物

一月二十八日から二月三日まで第四回書道芸術院展に二点出品（図48、49）（註14、推薦賞受賞。書的美二六一・二六一三）

二月、『書的美』二月号で上田桑鳩に競書審査評・準会友課題条幅で「筆はよく働いているが、鑑賞が上滑っているために、観念的である。」、準会友随意部条幅《冬心》（図44）、準会友課題習作《臨鄭長猷造像記》（図45）と評される。また、α部に三点（図46）、商業美術部《開店のんべ》（図47）を含む四点に対し、長谷川三郎から評され、α部他二点には「B、一本ずつの線は大変流動的であるが、その集まりには動きもなく、又、量感も不足している。C、点が殆ど働いていない。」、商業美術部他三点には「B達者過ぎて軽くなつたきらいがある。もう少し、内にこもるものがほしい。C、面白味は十分だが、字の大きさがやや揃い過ぎたのと、点を打つ楽しさにふけり過ぎて静寂さがうすらぎ題材とピツタリしない感がある。D、大字の構成のうまさに比して全体の構成が劣る。」と評される。書的美二六一二

三月、『書的美』三月号に第四回書道芸術院展成績が掲載され、推薦受賞のため会友に推薦される。上田桑鳩「第四回書道芸術院展より」で評される。（図48）（註15、書的美二六一三）

四月、『書的美』四月号で上田桑鳩に競書審査評・会友課題条幅《臨姨母帖》（図50）、会友随意習作（註16）、会友課題習作（註17）、会友随意習作（註18）で評される。また、α部に出品し長谷川三郎から評される（註19）。書的美二六一四

五月、『書的美』五月号の第三十七回競書成績に会友課題条幅《心無累》（図51）、会友随意条幅、会友課題習作、および随意習作が掲載される。また、α部選評で長谷川三郎に評される（図52）。書的美二六一五

六月、『書的美』六月号で上田桑鳩による競書審査評、会友課題習作《臨木簡集英上》（図53）、会友随意習作《臨劉石庵書》（図54）で評される。書的美二六一六

六月十六日から二十一日まで京都・丸物百貨店五階で第二回書の美巡回展京都展（註20）が開かれ、《鐘の鳴る丘》（図55）《木簡》《如来神力品》《ピカソの言葉》を出品、A賞（創造力旺盛なるもの）受賞する。書的美二六一七

八月、『書的美』七・八月合併号に第二回書の美巡回展《鐘の鳴る丘》の図版および出品目録が掲載され、A賞特選の成績により、研精会二部会員に推薦される。同誌「応募作品評」で河田一丘、浅野五牛、関谷大年に評される※資料一。同「七点批評」で有田光甫、柴垣九江、安藤机賛、村上翠亭に評される※資料二。

また上田桑鳩に競書審査評・会友課題創作《琴韻基声》（図56）、会友随意創作で「一種放浪的な情緒を持った作品で、淋しさとはる苦い味を覚える。しかしこういつたものは、もう一時代前の流行歌あたりの持った情緒で、もう時代おくれではある。」、会友課題習作《臨澄清堂帖》（図57）と評される。会友課題創作も出品。書的美二六一七八

同月、第三回毎日展に《良寛詩夢中問答》（図60）出品。書的美二六一十・松陰展図録

九月、『書的美』九月号で上田桑鳩に同人作品評二部随意創作（図58）、二部随意習作《臨李柏文書》（図59）で評される。また、森田子龍の編集後記に次号の毎日展特集で井上有一と木子の処女評掲載の旨告知される。書的美二六一九

十月、『書的美』十月号に第三回毎日展入賞者、第三部（註21）秀作賞受賞が掲載。また上田桑鳩に「第三回毎日展評」の中で評され、この作品はアメリカ人の手に渡っていった（図60）※資料三。また井上有一「毎日展より―書的美会員作品雑感―」の中でも評される※資料四。木子も評を担当し「よしのずいから」として「天井どこるか雲の上を見上げる様なものと知つてはいるが、井上氏との初対面に二人で美術館地下食堂にて焼酎で気焔を挙げて会場へ上つたとたん、森田先生御夫妻からの御厳命、盲蛇のそしりを覚悟の上でペンを執る。」と文頭に書き、以降に会員の評を記す。

（註14）批評や図版から最低二点出品と考えられる。

（註15）『書的美』には、六曲屏風（図44）の掲載はなく二曲一隻（図版49）が掲載される。

（註16）

「清韻拘すべく情懷羨むべし。終りに至るほど澄んで軽いつくも気力充滿している。この細線の作にポリウムを覚える。よいかなの純な遊境地。」

（註17）

「なだらかに豎の線が並行して流れたのを中心として、線の爽かで淡い味とが、何か淋しくもうれしい感情をそとる。そして玉できつと引緊めたところなど、うまい習作であり作品ともいえる。」

（註18）

「詩情を階調ある構成により原本の清潤な味を美しく簡潔にいかしている。」

（註19）

「応募作品の数は飛躍的に増加した。それで、慎重に考慮の結果、此の際、思い切り厳選した。中村木子氏、他の氏名省略」等の夫々に見所のある出来栄え、或いは、積極性のある試みをも、取立てて割愛した。」

（註20）

九月二十三日―二十五日広島県熊野町／九月二十八日―三十日岡山市天満屋百貨店／十月十日愛媛県松柏中学校／十一月一日―四日新潟市／十月中旬青森県弘前市に巡回。

（註21）

第一部・漢字、第二部・仮名の他に、この回から漢字仮名を通じて、新しい傾向を帯びた作品を第三部として設けられる。

子龍の編集後記に上田桑鳩以下「書的美」関係者全員書道芸術院を脱退した旨、掲載あり。『書的美』六十一／奎星会（註22）

第一次発表で江口草玄とともに同人に推挙される。『書的美』六十一／十一月、『書的美』十一月号で上田桑鳩に同人作品評・二部課題創作《奇秀》（図61）、二部随意創作「これも深い考から出ず、即興的だ。それだけ気楽に見られるが、後に残らない。終りの甘いほぐれたところに情感を感じる。」

二部課題習作（図62）が評される。『書的美』六十一／

十一月十九日朝、江口草玄と茅ヶ崎の井上有一宅を始めて訪れ（京都墨美発行所での長谷川三郎の現代美術についての講習会の帰路）、夜通し懇談と制作をする。京都の様子や森田子龍の意見を伝え、作家のあり方について語り合う。二十日午前中三人でピカソ展鑑賞、午後上田桑鳩を訪問、その後、第七回日展鑑賞する。『書的美』六十一／

十一月二十一日付けで、子龍ほかに十九、二十日の有一宅での話し合い内容や上田桑鳩面会の内容等を伝える手紙を送る※資料五。また、同日付けの江口草玄からの手紙も送られる。『書的美』六十一／

十一月二十四日付けで井上有一から十九、二十日の木子と草玄と話し合いのことなどの手紙が子龍ほかに送られる。『書的美』六十一／

十二月、『書的美』十二月号で上田桑鳩による同人

作品評、二部課題創作《月至千家静》（図63）、二部

随意創作（図64）、二部課題習作《臨吐魯蕃写経》（図65）、二部随意習作「清らかに又和雅に澄んだ作品だ。古朴ななかに近代的な知性も明るさもある木子の故郷はこんなところにあるのだろう。」と評される。『書的美』六十一／

十二月三日付けで森田子龍から手紙が送られる（草玄、有一にも）（図版8）。『書的美』六十一／

十二月七日付けで森田子龍から手紙が送られ、前月二十一日送付の手紙への意見等が伝えられる（草玄、有一にも）。（註24）『書的美』六十一／

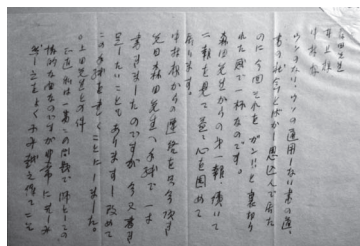
十二月十一日付けで江口草玄から手紙が送られる（子龍、有一にも）（図版9）。『書的美』六十一／

十二月二十五日付けで井上有一から手紙が送られる（草玄、子龍にも）（図版10）。『書的美』六十一／

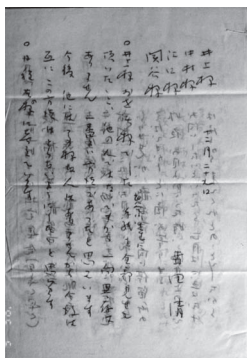
十二月二十九日付けで森田子龍から手紙が送られる（草玄、有一、大年にも）（図版11）。『書的美』六十一／

十二月三十日付けで井上有一から手紙が送られる

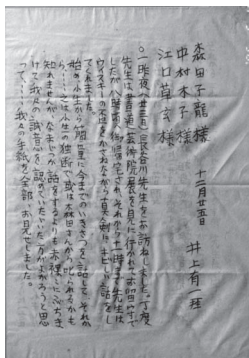
図版9



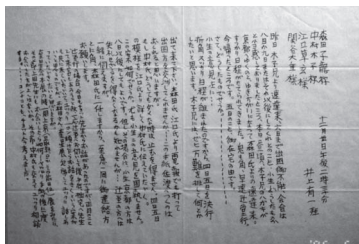
図版11



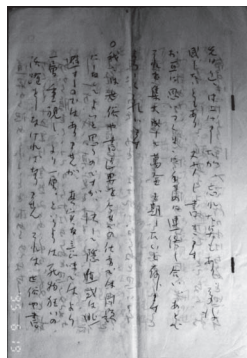
図版10



図版12



図版8



（註22）昭和十五年（一九四〇）に上田桑鳩を中心に芸術研究団体として発足していたが、戦後、上田を終身会長として宇野雪村、小川瓦木、清田岱石、森田子龍が発起人として再発足した。

（註23）図版掲載している8～12の書簡は、木子遺品。

（註24）（前略）中村様のお言葉にある上田先生の「日展の様子を尚二年見たい」とのお言葉ですが、これは、奎星会にとつてよい方に転換するかも知れないし、先ず不可能（悪い方かも知れない。しかしこれはどちらでもよい。どちらになつてもそこで「真実」が行われないというところだけは変りない確実なことです。我等の求めるものは、内に真実があるか否かが問題です。／次に日展落選作品の取扱ひの件ですが、今これが頭にあることはよく分ります。しかし我々のこれからしなければならぬことはもつと大きいのです。日展はその中のほんの一部に過ぎないことは前にも申し上げた通りです。封建性はまだ日本の社会の隅々までも充滿しています。書道界だけでなく、まして日展だけではありません人間として真に正しく自由に生き、真に自己の芸術をするためには、この束縛や歪みからでるだけ自由にならなければなりません。我々は広大なたかなければなりません。あくまで真実を以て真実を求めることだと思ひます。我々は今、全行程の覚悟をしなければならぬと誇りとを持つて、世のあらゆる不純にめげない覚悟で進まねばならぬと考えています。（後略）

昭和二十七年
(一九五二)

(草玄、有一、大年にも) (図版12) 現物

一月、『書之美』一月号で上田桑鳩に同人作品評・二部課題創作《凄闇》(図69)、二部課題習作《臨佐理書》(図70)、二部随意習作《臨筋切》(図71)が評される。書之美二七一

一月四日、京都竜安寺での墨人会結成の会合に急用のため不参加。墨人二七四

二月、『書之美』二月号で上田桑鳩に同人作品評・二部随意作品(図72)、二部課題習作《臨石鼓文》(図74)、二部随意習作《臨光明皇后臨樂毅論》(図75)が評される。書之美二七二

二月一日付けで上田桑鳩に「お願い」と題し、墨人会結成五人の連名で既成の書壇からの独立、そして墨人会結成の趣旨、奎星会退会の旨の手紙を送る。書之美二七三

二月十六日、墨人会結成の五人で上田桑鳩宅を訪れる。書之美二七三

二月二十七日、辻堂の長谷川三郎宅を訪ね新着のフランク・クラインの作品写真を見る。また、木子が一番に自分の作品を広げ、批評し合う。墨人二七四

三月、『書之美』終刊号に二月一日付けで上田桑鳩に五人連盟で送った「お願い」掲載。それに対する五人へ二月二十五日付けで送った桑鳩の手紙も掲載。上田桑鳩に同人作品評・二部課題創作《瑞》(図76)、二部随意創作《構成的な試みだけで、内容的なものがない。構成そのものにも内容がなくてはなるまい。》、二部課題習作《臨良寛書》(図77)、二部随意習作《臨貫名松翁書左繡叙》(図78)が評される。また、附録として三月十日付け、五人連名による「墨人会結成挨拶 機関誌『墨人』刊行について」(図版13)を付す。書之美二七三

三月二十三日、『墨人』五月号用の「昨夜のラジオから」執筆する。墨人二七五

四月、『書之美』を改題し『墨人』創刊号を発行、井上有一、江口草玄、関谷大年、中村木子、森田子龍の五名連記による「墨人会結成挨拶」(註25※資料六、墨人会結成までの「墨人会の動き」掲載。同誌「模索の跡 習作感」(図79)83)※資料七、併せて大年からの「木子への手紙」※資料八も掲載。同誌「作品互評」に「大年への返事」※資料九を掲載し、子龍「木子の作品」(図79)81)※資料十掲載される。また会員の「習作批評」五十名担当、評の後記も執筆する※資料十一。墨人創刊号二七四

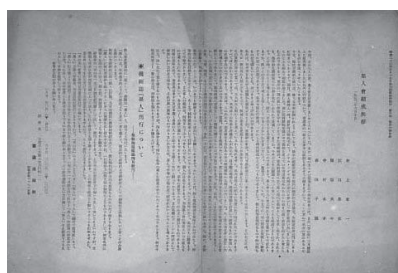
五月、『墨人』五月号に「墨人会の動き 往復文書公開」が掲載され、結成の経過を披露する。また、「昨夜のラジオから」※資料十二、「模索の跡」(図85)※資料十三、「木簡を習う」(図86)※資料十四、「古典研究 宇多天皇宸翰周易抄」(図87)※資料十五、「同習作批評 江口草玄」(註26、「フランク・クラインの作品に寄せて」※資料十六を執筆掲載。また井上有一から「作品批評」(図84)※資料十七、「古典研究 習作批評」(図86)※資料十八で評される。墨人二七五

五月三日、岐阜の関谷義道宅に墨人会同人が集まり、四日から七日まで京都森田子龍宅で第一回研究会が開かれたが、木子は都合で参加できず。四日の作品批評座談会では提出していた《天上大風》(図88)《さくら》(図89)が出席者によって評される。墨人二七六

六月、『墨人』六月号に前月の座談会掲載※資料十九。「古典研究 枯樹賦」(図90)掲載※資料二十、また、「習作批評」で武田茂則(図90)、大澤華空に評される(図91)。墨人二七六

七月、『墨人』七月号に「模索の跡」(図92、93)※資料二十一、「習後感」(図95)※資料二十二掲載、また、「作品互評」で井上有一(註27、小川一翠(註28)、坂部桃丘を担当し、自身は江口草玄※資料二十三に評される(図92、93)。また谷口舟山に

図版13



(註25)「書之美」終刊号の附録に付けたものの挨拶部分を再掲。

(註26)

周易抄、僕の最も苦手の周易抄と正面から四つにガツチリと取り組んだ態度に先ず好感もてる。全くこまごまで真卒に真正面から追求して行く事に敬服しますよ、それだけに兄の主観的なものは見失いさうだが、こういう地道な様な仕事ややはり一番大切な処と反省させられますよ。只達者さが災して平安のロマンな呉みややうすらいだのにはあるまいか。(中村木子)

(註27)

(表紙)実に感銘の言葉もない、特に人形の拓本がいいよ、象形文字少し甘くないか、最も近頃の僕が平素古文の拓本を見つけているせいかもしれないが、人形の方はすばらしい、本当の有だ、いさぎよくシャッポをぬぐよ、細字の方最後の名前のあたり、もつとモジャモジャしてはどうか、これではスーとしてしまふ。上部の平板なのはこのままだとやはり気になるね、やはり暖国の君は感情が豊かでうらやましいよ。家廟碑、剛毛でボカボカやつて人間有が画かれている。細い黒のハジキが美しく紙面に放つて全体を甘さから支えてくれ無心に押し進める剛毛は重厚な味を出しているがやリズムが速すぎた様だね、ゆういちりんは構成に考案しますまいか。

(註28)

以下、同人に対する木子の評は、重要と思われるもの以外は省略。

「習作批評」(図95)される。「習作互評・廣川王賀蘭汗造像記」では六名、「習作互評 随意習作」では六名を担当し、自身も谷口舟山に評される(図94)。**墨人七七**／

八月、『墨人』八月号に「模索の跡」掲載(図97、98)※資料二十四、「作品互評」で森田子龍※資料二十五と他四名を担当し、自身は関谷義道から評される※資料二十六。「習作互評・随意習作」で二名担当し、水本潤遊に《臨劉平国碑》(図99)※資料二十七、井上有一に《臨多胡郡碑》(図100)評される。また「作品互評 習作周易抄」で四名を担当する。**墨人七八**／

八月二日から木子宅にて墨人会十一名による研修会(第二回研究会)を開く。三日、神蔵翠甫も加わり習作互評会を開く。四日、両津から新潟に渡り、後、国上寺、乙子宮、五合庵など良寛遺蹟を巡り、柏崎の江口草玄宅に泊まる。五日、出雲崎良寛堂(図版14)、和島隆泉寺、木村家にて良寛遺墨を鑑賞し、その夜、柏崎洞雲寺で「良寛の遺蹟巡りを終えて」座談会に参加する※資料二十八。**墨人七九** 併せて「墨人のあり方」についても語られる※資料三十三。**墨人二七一十**／

九月、『墨人』九月号に先月参加した「良寛の遺蹟巡りを終えて」座談会および、その行程を記した「越後日記」が掲載、「模索の跡」(図103、104)※資料二十九掲載、「作品互評」で二名担当し(註29)、森田子龍に評される※資料三十。「習作互評」で十八人担当し(註30)、七名から《臨灌頂記》(図105)※資料三十一、六名から「随意習作」(図106)評される※資料三十二。**墨人二七一十**／

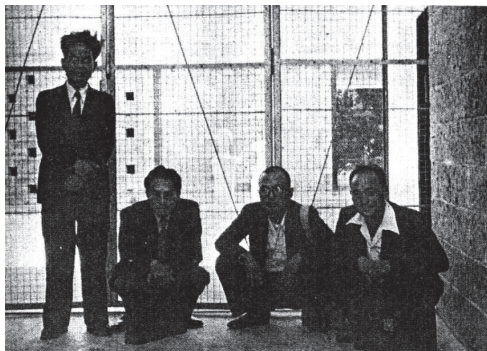
九月二十四日、江口草玄を除く同人四人で鎌倉でのイサム・ノグチ展を鑑賞(図版15)、二十五日、井上有一を除いた三人が上京しブラック展等を鑑賞する。**墨人二七一十一**／

十月、『墨人』十月号に研究部員のほか、須田剋太、吉原治良、阿部展也、高村光太郎、辻晋堂、瀧口修三、久松真一、井島勉、大澤雅休、金子鵬亭、村松寛らに「墨人」に対する意見・批判・要望」を掲載し、研究部員の長村修一に取り上げられる。(註31)併せて八月五日に柏崎洞雲寺で良寛の座談会をした折りの「墨人のあり方」についての座談会も掲載される※資料三十三。「模索の跡」(図107)※資料三十四、「作品互評」で江口草玄を担当し(註32)、また井上有一に評される(図107)※資料三十五。

「習作互評・光明皇后樂毅論習作」で江口草玄をはじめ七人を担当し(註33)、井上有一から評される(図108)。「習作互評・随意習作」で十名担当し、有一から《臨懷素自叙帖》を評される(図109)。**墨人二七一十**／

十一月、『墨人』十一月号に「イサム・ノグチ展より」※資料三十六、「組上一点 森田子竜作品」※資料三十七を掲載、「習作批評 多胡郡碑」で二十名を担当する(註34)。また、江口草玄に「作品互評」(図110)※資料三十八、「習作批評 張遷碑」(図112)で評される。**墨人二七一十一**／

十二月、『墨人』十二月号に「組上一点 関谷義道」※資料三十九を掲載、「作品互評」で五名担当し、関谷義道に評される(図113、114)。「習作選評 饒宝子碑」で関



図版15 右から木子、有一、義道、子龍



図版14 前列中央、木子、右隣義道／後列右から子龍、有一、左から三人目草玄。

(註29) 関谷義道 夢 昨年の毎日展に弦巻松蔭氏が夢一字をかかれていた。美しい絹地に氏独特の手堅い手法ではあつたが、墨がジケて柔く美しいものがあつた。義道のこの作これとい対称だ、弦巻氏のクラシックな手法に対してこれは又近代化された美しい構成だ、アスファルトとビルとダンスホールとストリップ、ジャズと電車と人の

の夢がかくもモダンな骨格の上に構成され、然もその生活から真実を求め苦悩する人間義道の息吹が全体ににじみ出ていてうれし。落款がやや常軌的であることが難と言へば難だ。紳冠の中間の白と四の中の左側の白の中に各々の黒点が心にいくまでよく書いてある。読ませる場合の書が新しい構成の下にえがかれる場合、文字と言う宿命の中での構成の方法として気のきいた方法のつだと思ふ。この道やの歌美しい叙情詩だ。やや常軌的な構成乍ら作品として充分に果める。道あたりのシミをもう少し強調して秋の暮の所で一寸細目にするとかとめる方がよくはなかつたか。／「このあたり」の歌は前のと反対に構成に随分苦んだ様だ、其処に苦悩の跡も見られるし又それだけに新鮮さが現れてうれし。この構成成功しているとは思われぬがみずみずしくうれしく感じられる。最後の行の「すずし」もこんなに下げない方がよくはないかこの処一寸常軌的で好感がもてない。／(他略)

(註30) 灌頂記習作・森田子龍〇百八十度の転換なんて不可能なことですね、然しここまで大きく転換(やはりそれを可能ならしめたことは、子竜なればこそですね)／江口草玄〇見なれたもの、手なれたものは第一回の潜在意識がぬけきれない、そしてそれから抜けようともが草玄の姿、井上有一〇ポカンとしたもの無技巧なものになりきれてない技巧的な作品乍らやはり有がにじみ出てうれし。／(他略)／随意習作／江口草玄〇「見甘い線な秋萩からここまで深く高い響をもたせたこと敬服。／井上有一〇淡々としている様でその実神経がよく行きといている。然し線が一寸もろいと思う。／森田子龍〇鋼鉄のような線と線との交響楽だ、深く深く喰いこんでキンと高く響いている。／(他略)

(註31) (前略)⑤私達は新分野を目ざして進む際、兎もすれば書として理解することの困難な位にまで行き過ぎることがありがちであると思ひます。読めないものは書ではないと思ひます。だから墨美の「部や近頃誌上に発表された中村木子氏や千葉青麦氏などの作品は書ではなくして書道の研究のための二つの手段又は一種の課程であつて、この様なことをすることによって新しい構成や線質を見出すことが出来ると思ひます。だから無駄ではないと思ひます。

昭和二十八年
(一九五三)

谷義道(図15)、「習作選評 随意習作」で井上有一に評される(図116)。

墨人二七一十二

一月、『墨人』一月号に「組上一点 井上有一」※資料四十、「習作批評 随意習作」二十名分を担当註35。「作品互評」で関谷義道を担当し(註36)、小川一翠、森田子龍から評される(図117)※資料四十一。また「習作批評 仮名習作」(図118)で森田子龍に評される※資料四十二。

墨人二八一

一月四日、岐阜市岐山荘で開かれた(墨人)誌上展作品批評座談会(第三回研究会)を欠席するが、三点の出品作(図119)が評される。※資料四十三。

墨人二八一三

二月十三日、現代美術懇談会(ゲンビ)の例会に墨人同人五名参加し「書とモダンアート」について討議し、木子の作品(図122)も取り上げられる※資料四十四。

墨人二八一四

三月、『墨人』三月号に墨人誌上展の三点(図119)掲載され、一月の批評会の記事掲載される※資料四十三。

墨人二八一三

四月、『墨人』四月号に現代美術懇談会二月例会「書とモダンアート」の記事が掲載される註37※資料四十四。

墨人二八一四

五月、『墨人』五月号で「作品互評」を四名担当し、森田子龍に《嗣替弁冤擗中天》(図124)《乱舞》(図125)評される※資料四十五。「習作批評 博」で二十名担当註38。「習作批評 随意」《臨劉懷民墓誌》(図126)で江口草玄に評される。

墨人二八一五

五月下旬、新潟市での新潟県美術館設立準備資金獲得のための美術展に作品を出品。

図版16 井上有一 画木子似顔絵

六月、『墨人』六月号に「模索の跡」《臨劉懷民墓誌》(図128)《良寛詩》(図129)※資料四十六、「自己紹介の頁 呆人木子の巻」(図版16)※資料四十七、「組上一点 江口草玄作品」※資料四十八を掲載。「作品互評」四名分担当し(註39)、岩佐麗堂、関谷義道から評される(図128、129)※資料四十九。大沢華空に四月号を読んだ「ゲンビ」を読んで

の中で木子の発言について触れられる※資料五十。「作品互評 随意習作」《臨鄭長猷造像記》で森田子龍に「甘い味を持たせている。鄭長猷にはたしかにそのような一面もある。これに逞ましい骨格を持つことが出来れば、味だけが浮き出ることになると思う。」と評される。

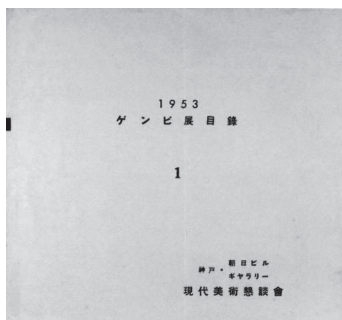
七月、『墨人』七月号に「創作批評」※資料五十一を掲載、「組上一点 中村木子作品」(図131)で同人四人に評される。※資料五十二また、「作品互評」で一名担当し、井上有一に評される(図130)。

墨人二八一六

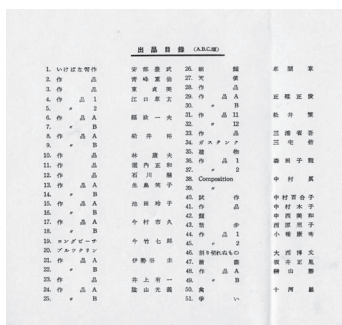
七月十九日から二十四日まで神戸朝日会館での

墨人二八一七

七月十九日から二十四日まで神戸朝日会館での



図版17 第一回ゲンビ展目録、41番に《作品》中村木子とある。



図版16 井上有一 画木子似顔絵

(註32) 江口草玄 これも良寛症第二期の症状なり、習作も随意が出来ぬし模索の跡もかけない処第二期に入りつつあり要注意注意、常々この人の作品について考えていることだし自分自身としてもそれを反省しつつあるにはあるんだが、我々も自分と自分の人間性に対しての自信を高めるべきではなからうか、君がよく口にする

だが自分が可愛い「自分がいい」と言うことは自分自身に対しての尊敬、自尊心が基礎とならなければならぬと思う、これは総体的な考え方からの自尊心では無論なく自分の人格上の絶対性であり自己の中に於ける、仏性の自覚である。良寛はよい、南天様はえらい。これ等にはとても足もとも及ばない自分である。しかし「自分は絶対の自分であつて良寛も南天様も自分のまねは出来ない」と言うことと彼等の持つていふ奥底の偉大さは同時に自分も持つては持つていふのだと言う自覚である。例えば大きい展覧会をやる、こんなものをかいては笑われはすまいかと、吾々は各方面から期待されているから変なことをやつたら書のはじになることを考へてこの足をふむ、ところが吾々は何もしないために書をするのでもなければはめられるためにやるでもない、自分自身の真実探求の行路でしかないのだから、死ぬまでこれだと言うことはいないのだ。だからその途中で人に見せて笑い度いものは笑えばよいし賞めたい人はほめればよい丈なのだ。と言つてみては僕自身もやはり駄目で第三期症状だが君もどうも第二期症状だ、作品は料紙に秋の虫の団扇を使つた理由が秋の作品に対して通俗的なものか或は月の句に対しての文学的意図が判らないうちの場合余り成功していない、特に真中の虫が目ざわりだ電に角とらわれが多い。

(註33)

①江口草玄 油い案綴をこまめ煮つめ整理したことに敬服する。特に不が僕はすきだ、この原本には自分もホトホト手を焼いていたがこれを見せつけられては全く参つた、只もう少し兄の体臭がしも底からひそやかに嗅つてくるものがほしい。(他、略)

(註34)

②井上有一 荒けずりな、むき出しな人間性がぐんとせまつてくる。だが見淡々としている様で案外淡々としていないのは必然性が乏しいからだ。そしてもと底からじつくりと光つてくる輝きと温かさが望めないだろうか。③江口草玄 古典に対して君の表現の幅を広げ線と大胆にこらみている、この様な態度も応納得出来るし悪いことでもない。特に羊字あたりは或程度成功もおさめている。それだけにハタリになり易い危険を多分に含んでいる。注意すべきかな。(他、略)

第一回現代美術懇談会展(ゲンビ展)(図版17)に『墨人』に掲載した旧作を出品(作品不明)。二十四日神戸に墨人同人六名集まる。二十六日、森田子龍宅で墨人会員六人による「作品批評会」(第四回研究会)に参加(図135、136 ※資料五十三)。

八月、『墨人』八月号に「組上一点 辻太作品」※資料五十四を掲載、「作品互評」(図132)で井上有一に評される※資料五十五。また、「習作選評 随意習作」で二十名分担当^(註40)し、「習作選評 古文習作」(図133)で江口草玄に評される。

九月、『墨人』八月号に「組上一点 辻太作品」※資料五十四を掲載、「作品互評」(図132)で井上有一に評される※資料五十五。また、「習作選評 随意習作」で二十名分担当^(註40)し、「習作選評 古文習作」(図133)で江口草玄に評される。

夏、佐渡・長谷寺に一ヶ月位籠もって作品作りをする。この頃、棕櫚の帯で大きな作品を書いたり、青墨を好み、硯海が小さいので、彫って大きくしたりしていたり、また、手首で筆を返す運動をいつもしていたと次男・啓二氏の記憶に残る。

九月、『墨人』九月号に七月の森田子龍宅での作品批評会および第一回現代美術懇談会展(ゲンビ展)に木子も出品の掲載あり。「作品互評」で四名担当する。^(註41)森田子龍に「習作選評 王羲之岡極帖」(図137)で評される。また、「随意習作」(図138)で関谷義道に評される。

九月十五日発行の両津小学校PTAだよりに「目のない人間からの」の原稿とともに『鐘の鳴る丘』(図55)の図版掲載される※資料五十六。

十月、『墨人』十月号に、吉原治良の「ゲンビ展の感想」が掲載され、木子も触れられる※資料五十七。森田子龍に「作品互評」(図139、140)で評される※資料五十八。大澤華空に「習作選評 西狭頌」(図141)で評される。

十一月、『墨人』十一月号に「習作十五番歌合 選評」を掲載。※資料五十九

十一月二十日発行の両津小学校PTAだより第四号に「展覧会雑見」が掲載される※資料六十。

十二月、『墨人』十二月号に「書作品選評」を掲載※資料六十一。

一月、『墨人』一月号で辻太に「基礎造形部 三本の曲線と二点による構成」(図150)で、また井上有一に「随意部選評」(図151)で評される。

二月、『墨人』二月号で江口草玄に「随意部選評」『臨宋伯望刻石』(図154)で評される。

四月、『墨人』四月号で「随意部選評」を掲載※資料六十二。

五月、『墨人』五月号で「基礎造形部 三つの三角形による構成・定規による」の選評を掲載する※資料六十三。

五月四日から九日まで、朝日新聞社主催、大阪心斎橋大丸での第一回モダンアートフェア(図版18)に『鳥飛兎走』(図155)を出品、また「モダンアートフェアを語る」座談会^(註42)にも同人六人で参加※資料六十四。

六月、『墨人』六・七月合併号に前月のモダンアートフェアの特集が組まれ、座談会での木子の発言も掲載される※資料六十四。

出品者		出品作品	
1	山田 光	山田 光	山田 光
2	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄
3	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄
4	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄
5	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄
6	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄
7	山口 文雄	山口 文雄	山口 文雄



図版18 第一回モダンアートフェア目録、書の七番目(最下段)に『鳥飛兎走 中村木子(新潟)』とある。

(註35)

②江口草玄 過庭千文 ああ油の強いものをよくこまで整理されたことに敬服、練りに練って練えた鋼鉄だ。②森田子龍 たくましく意欲的な仕事だが本人は割合に安易にかいている様ですね。部あたりが一番すきだ。③井上有一 線がもうい、うんと呼吸長く結つてほしい。(他略)

(註36)

○二点中内面の空虚云々が第二にすきですね、いやすきより何より義道がこの作品を見せられたことがうれしい。本当に義道の為に祝福し度いね。この数ヶ月君がどんなに悩み苦んだか、君はどうとうたまたまなくつて半分なげ出し度い気持ちで恐ろしくたたきつけたであろう。それでよいのだ、それでよいのだ、我々、俗物中の俗物、鈍物中の鈍物に何が出来るものか、苦しめぬきやみぬき、もたえあえき、ここんで投げ出す。何たる尊い体験であろう、何たる偉大な生長だ。本当に祝福したい。いや、こまで投出し得た君が羨しいよ、真実云々の方にはまだ過去の義道の姿が濃厚だ。

(註37)

木子についての発言者は、津高和、山崎隆夫、島本昭三、須田廻太、田中健三の五名。

(註38)

①井上有一 圧倒されそうな量感、新鮮な感覚、拙なるもの、巧、醜なる美、切実に近代を感じさせられる。只慾を言えばキーンと響いてくる金属性のものがほしい。②江口草玄 前者と比してこれは洗練されたスタイルだ。高い響とスマートなフォルム、実に美しい、作者が判っているために過大評価を恐れて二位にした、知つている作品の前で素直になりきる事は理屈なしに難しいものだね。(他略)

(註39)

関谷義道 ①作品A 草書の濤字、リズムカナル作品だがジミの様なのが気にかかる、ミの第点と旁の堅線のカーヴとの緊密さが喰い足りなく特に堅線は生ぬるい。下部の二堅線も線質に変化を持たせてあるとは言へ構成が通俗的であり平板だ。中央部もつと黒くするかの何かが工夫の必要はないか、それらによって作品全体の広がりや深さが一層効果的であると思う。②作品B 「道」恐ろしく意欲的の様であつて再見、三見している中にスカーツとして腹の底からあつてくるものがない、之も無理なデフォルメの為に力を殺ぎ取られていたがらに重苦しく、印によって救われてる様だが最後の画にも筆を抜きつばなしてなく「呼吸入る」か支へるものをおくかした様だが或はこれは僕の欲目かも知れない。(他略)

昭和三十年
(一九五五)

六月二十三日から九月二十九日まで、ニューヨーク近代美術館での「現代日本の書展」に全同人出品。墨人六十一・草玄展図録／

七月、佐渡で佐々木象堂、宮田藍堂(二代)らと参加していた淡交会、無絃社に改称し十三名で再発足。(図版19)無絃社の歩み／

八月、『墨人』八月号で「書作品評」八名を担当する。墨人二九八／同月、カーネギー国際展に関谷義道と共に出品する。墨人二六六／

九月、『墨美』第三十三号の特集「現書壇」で作品一点紹介される(図149)。墨美三三三(二九一九)／

九月二十三日上京し、二十七日から三十日まで東京日本橋丸善画廊(図版20)(十月二日から六日まで京都河原町丸善画廊)での墨人会展(第一回展)に三点出品(図156～158)。その後上洛。墨人二九一・二九一／

十月、『墨人』十月号に墨人会展特集が掲載され、作品三点(図156～158)が掲載され、津高和一に「中村木子小論」掲載される※資料六十五。墨人二九一／

十月四日、京都での「墨人会展を語る」座談会に参加※資料六十六。(図版21)墨人二九一／

十一月、『墨人』十一月号に「書作品について」を七人への評とともに掲載※資料六十七。また、前月の墨人会展を語る座談会の記事掲載※資料六十六。墨人二九一／

十一月二日、三日、佐渡の無絃社、新潟交通河原田営業所待合室二階で展覧会開催、木子も引き続き出品する。無絃社の歩み／

十一月十三日から十八日まで大阪松坂屋、二十二日から二十六日まで京都市美術館、十二月十日から十六日まで神戸朝日会館で第二回ゲンビ展が開催され《作品A》(図159)出品、十二月二十三日京都でのゲンビ展参観後、研究座談会開かれる(参加については確認できず)。墨人二九一・田桑鳩

四月、パリ・フアーズ国際展に子龍、有一とともに招待出品(六月、ミラノの国際展にも出品)。墨人三〇七／

四月八日から二十三日までパリ・コレット・アランデイ画廊で墨人会展開催される。(六月二十一日から七月一日までブリュッセル・アポロ画廊巡回(図版22))墨人三〇七・三〇一八／

六月十七日から十九日まで京都市美術館で第一回墨人公募展開催(図版23)し、《作品A》《作品B》《作品C》出品(図161)。作品の表装には、子龍、草玄とともに小橋康秀のアトリエで連日行った。(図版24)また、十七日午後一時から午

図版19 左から三人目木子、右隣佐々木象堂、その右二代宮田藍堂



図版20 左から子龍、義道、木子、上田桑鳩



図版21 左から井島勉、木子、吉原治良



(註40)

②江口草玄 鶏毛を使つての作品か、原本の味とはいささか遠い様に思えるが、こゝまで自分のものとして作品することには心から感銘の外ない、只小字は安易でこれのない方がよい。／③井上有一 朗、世等実にはすばらしい、卯は心にあせりが見える。／④森田子竜 ロマンはよいがこれでは骨格が不確だ其、は大変よい。／関谷義道 抽象作品求心的な構成乍ら線がもろく、求心力が乏しい外部の白が只白としての存在だけ。(他、略)

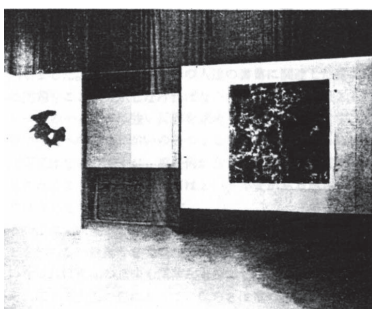
(註41)

③井上有一 先日と連の作、小品の方は原稿かと思うが大い方はそれだけにゼスチュアールが大きい。今までの君のナイヴな作品からの流れからして、君も知っている僕としてはこの作品の持つアイデアはよく判るがこの誇張した身振りがそのまゝ君のものとして、君の持味としていただけない。只この様な所謂文人趣味的なロマンな作品に今まではきびしさとか、紙面処理とかが極めて贅弱であつたのに対し、さすがモダンアーティストとしての洗練された智性のかげやきのあることはうれしいが、古い文句にある様な冲融とか、混然一体とか言うことまでの錬れが乏しいことが、この作をチグハクな感じのものにしてゐるのではあるまいか。(他、略)

(註42)

参加者は、吉原治良、須田勉太、植木茂、津高和(井上有、江口草玄、関谷義道、辻太、中村木子、森田子龍、政本達之、淵上清園、安田文男、山田義之、大野良明、有田光甫

図版22 右、木子作品(図158)



後七時十分まで辻を除く五同人で公募展の審査を協議する。十八日の墨人研究会に参加し、墨人公募展の評を井島勉に受ける。〔墨人三〇一五・三〇一七〕

七月、『墨人』七月号に前月の第一回墨人公募展での研究会の井島勉評が掲載される〔図161〕。また、木村重信の「第一回墨人公募展表」で作品が評される※資料六十八。〔墨人三〇一七〕

七月二十八日から二十九日まで東京ブリヂストン美術館で墨人推薦展を開催し出品〔図163〕。〔墨人三〇一七・三〇一十〕

八月、『墨人』八月号に四月のバリ、六月のブリュッセルでの墨人会展の海外評が掲載される※資料六十九。〔墨人三〇一八〕

八月二十日から二十八日まで国立近代美術館で「現代日本の書展」国内展（同年十一月から欧州六カ国巡回）が開催され《原始》〔図162〕《抵抗》〔図164〕出品。

〔墨人三〇一十・書の美しさ〕

十月、『墨人』十月号に七月の墨人推薦展の新聞、雑誌等の評が掲載され、週刊サンケイ八月十四日号で取り上げられる※資料七十。また、欧州巡回する「現代日本の書展」の国内展を見ての評を執筆掲載する※資料七十一。〔墨人三〇一十〕

十一月七日から十二月三日までニューヨーク・アヴアン画廊で第一回墨人公募展の選抜作品を展示する。〔墨人三〇一七〕

昭和三十一年
（一九五六）

一月、『墨人』一月号に「今月の作品を見る」を掲載。〔註43〕〔墨人三一一〕

二月二十五日、京都上京区の紫明荘での墨人研究会で「墨人は対社会に如何に活動すべきか」の意見発表者として予告されていたが、参加できず。〔墨人三一二・三一一四〕

六月、『墨人』六月号に前年六月十四日付のラ・ランテルヌ紙（ベルギー）に掲載された「ブラッセル墨人展評」が掲載され、木子の名も記される※資料七十二。また、井上有一に「身辺雑記」中で触れられる※資料七十三。〔墨人三一二六〕

八月、『墨人』八月号で「一字習作評」を担当する。〔註44〕〔墨人三一一八〕

十月、『墨人』十月号で「作品選評 自由習作」を担当する※資料七十四。〔墨人三一一十〕

十月二十三日から二十八日まで東京上野・松坂屋で第二回墨人展に《作品》〔図166〕を出品。〔墨人三一一十〕

十月二十七日に東京ウズラ荘で美術評論家河北倫明を招いて「墨人展を語る」座談会に参加する。〔墨人三一一十二〕

十二月、『墨人』十二月号に十月の「墨人展を語る」座談会の記録が掲載されるが、木子の発言記録なし。〔墨人三一一十二〕

昭和三十三年
（一九五七）

三月、これまで墨人同人として『墨人』編集部員に名を連ねていたが、家業多忙のため一時制作を休み会員より離脱、三月号から「墨人会友」となる。〔墨人三一一三・三五一六・三六一十〕以降、昭和三十八年十二月号（百二十六号）まで会友欄に掲載されるが、昭和三十三年三月号（百二十七号）からは名の掲載も消える。〔墨人三一一三〕

図版23 後右から木子、義道、井島勉、子龍、前右から有、草玄



図版24 右端、梓作りする木子



〔註43〕

井上有一 従来の作品に比して人間的な大きな成長を喜ぶ、内へへと動きが沈んで空間的にも時間的にも大きな活動が非具象化される趣に大きな前進を喜ぶ。江口草玄の大きな方にもこれと稍や似たものがあるがやはり理詰めすぎ、神経がこまか過ぎてどうしても見る方と作品とに大きな壁が邪魔している。付箋に書いてある様作品の光線迄計算に入れて作る細い神経が逆にある。特にタテの作品が柔かく人を迎える。イサムのボク（筆者註ノクチの誤りか）やクレイの様なユーモラスの人間性の一面がナマのままに見る人を誘い込む、然し仕事としては黒い方の横の小品がすきだ。左のタテ線と右の曲線との調和や、縦線を取りまく曲線の黒も美しい、淡墨の方は甘い。関谷氏の線の仕事に対し大沢華空は面の仕事だ。〔他略〕

〔註44〕

今月の三点、皆それぞれ面白く拝見した。墨人が類型化云々と部から評され、吾々自身としても常に反省して居る時、この様に各々の個性が毅然として自守している作品を拝見することは喜ばしくも力強い限りだ。華空の「象」はやや平板な特殊を生かして、まとまっている。左下部のカスレと右上部の黒い小点（ミカ）のコントラストとは特に気に入っている。只この様に面を主とした所謂空間性への強調は二面時間性の心やりが充分行き届き度いものだ。面の持つ触感、奥感と言ったものが従来の墨色としての観点でなく新しい角度から見直されなければならぬ。有のではそれが心にくく迄達して完璧に近い迄なされている禅僧の墨蹟にも似た素朴さでものしているあたり実に壯観とも言いたい。限られた面を基準に無限への生命の息吹が心臓の鼓動が、脈々と伝えられるものに子龍の作品がある。キヤ酒の外観の中に毅然たる意志の力を蔵し、白を充分に駆使している。三人三貌、各々其の本領を発揮して余す所なし。

昭和三十三年
(一九五八)

この頃、政治に関心を持ち、北吟吉や藤山愛一郎を応援し、街宣車に乗ったりすることもあった。／田中角栄郵政大臣の「以和為貴」の色紙を子供に捨てさせることもあった。／また、会社の仕事が順調で忙しく、父佐次平が中気を患い作業ができないため、蒲鉾のビニール包装の効率化、機械化に没頭する。効率化により書作の時間を作ろうとしたのではないかと神蔵翠甫氏は述懐する。また、魚を保存するために同業者と製氷業も始める。聞き取り

昭和三十四年
(一九五九)

八月二十一日過ぎ、北海道での墨人研究会の帰路の森田子龍、井上有一、辻太が東京駅八重洲口で木子と偶然に出会う。その後、池袋三越で草人展を見る。墨人三四一九
九月、『墨人』九月号に井上有一が前月の北海道墨人研究会の旅行記の中で帰路に木子に出会ったことが記され、「仕事忙しいのでこしはばらくはだめだが、来年はきつと書の道にたちもどれる」と語る※資料七十六。墨人三四一九

昭和三十五年
(一九六〇)

六月、『墨人』六月号に井上有一が木子のことを触れた「墨人史」(六十六号)の前半部が再掲される。また、辻太の「続墨人史——墨人は今どこを歩いているか——」の年表中で触れられる。墨人三五一六

昭和三十六年
(一九六一)

一月二十九日、二十六日に亡くなった佐々木象堂の旧真野町葬に木子を含め無絃社全員会葬する。無絃社の歩み
四月、『墨人』四月号に久しぶりに一字習作《品》(図171)を提出し辻太に評される。墨人三六一四
八月七日から九日まで佐渡池田ギャラリィ、同二十七日、二十八日常念寺で第十六回無絃社展を開催し、出品する。これを最後に翌年から無絃社を自然退会となる。無絃社の歩み
十月、『墨人』十月号の「墨人会小史」で触れられる。また、本編中の墨人会員名簿には会友欄にも名前の掲載はないが、裏表紙の会友欄には名前の掲載あり。墨人三六一十
この年、佐渡の池田画廊新築の祝いに《白雲悠々》(図170)揮毫。写真

昭和三十七年
(一九六二)

これまで家業の機械化、経営拡大を図っていたが、共同出資者に株券や金を持ち出しされて負債だけ負わされ、経営が難しくなる。三、四月、会社をたたみ佐渡を離れることとなり、内野(現新潟市西区内野町)に引っ越し、蒲鉾製造を続ける。聞き取り

四月、『墨人』四月号「特集 書の美しさ 創立十周年記念研究記録」中に「墨人会結成挨拶より」「墨人会小史」が掲載され、木子の名も触れられる。墨人三七一四

六月、前月に黄綬褒章受章した堀川蒲鉾工業株式会社会長の祝賀会のために《頌祝歌》(図172)を揮毫する。堀川会報

昭和三十八年
(一九六三)

六月三日、久野麦銭に手紙(図173)と《山之口猊詩集から》(図174)を送る。墨人四九一四・五
この年、内野での蒲鉾製造の衛生環境について呢懇だった他社に密告され、会社をたたみ、信濃川河口近くの柳島(現新潟市中央区柳島町)の倉庫の一画に住む。聞き取り

昭和三十九年
(一九六四)

三月、『墨人』三月号の会友欄から名が消える。【墨人三九一三】
三、四、五月ころ、富山県滑川の仕事仲間に誘われ、滑川へ移る。【聞き取り】

昭和四十二年
(一九六七)

一月一日、次男啓二に『いろは歌』(図175)を書き与える。【現物】

昭和四十五年
(一九七〇)

六月十六日、孫の俊佐のために金太郎の提灯絵を描く。(図版25)【写真・聞き取り】

昭和四十六年
(一九七一)

五月、長男紘一、次男啓二、両家と共に神通川、新穂高方面に旅行する。【写真】

昭和四十七年
(一九七二)

三月、『墨人』三月号(六月十五日発行)の「墨人20年史」で触れられる。【墨人四七一三】
八月二十日、江口草玄が滑川の木子宅を訪れ、前年に不慮の交通事故で亡くした長女の話から写経に取り組んでいることなど、旧交を温める。また、茅ヶ崎の井上有一に酔いながら電話する。【墨人四九一四五】

九月から十一月にかけて個展のため作品制作にとりかかり、『妙法蓮華經如来寿量品偈』(図178)、『摩訶般若波羅蜜多心經』(図179)、『紺紙金字妙法蓮華經・觀世音菩薩普門品第廿五』(図180)、『蠟纈染め手法の『萬点亭主』』(図181)、『色紙『瀧』』(図182)などを制作、十一月、富山県民会館での個展で発表する。【現物・聞き取り】

昭和四十八年
(一九七三)

元旦日付の年賀状『萬寿無疆』(図186)を久野麦錢に送る。【墨人四九一四五】
四月上旬ころ、孫の俊佐に「金沢に行く」と告げて出稼ぎに出る。【聞き取り】
五月二十九日、住み込みで働いていた金沢の白雲楼ホテルで急逝(註45)。【聞き取り】
戒名、法身院静道覚居士位。【位牌】

昭和四十九年
(一九七四)

九月、『墨人』四月・五月合併号(九月三十日発行)「中村木子追悼号」で、江口草玄※資料七十七、井上有一※資料七十八、森田子龍※資料七十九に追悼文贈られる。また、墨人で発表した作品、論文が再掲され追悼される。併せて久野麦錢に贈った昭和三十八年六月三日付け(五日消印)の書簡および昭和四十八年元旦の年賀状『萬寿無疆』(図186)披露される。【※資料八十】 【墨人四九一四五】

昭和五十三年
(一九七八)

六月、堀川蒲鉾工業株式会社の堀川兵三郎会長が還暦を迎え、会社報『銀嶺』No.118に昭和三十七年(一九六二)に黄綬褒賞を受章した際、木子から贈られた『頌祝歌』(図172)を紹介、回想する※資料八十一。【銀嶺】 木子の父、佐次平に堀川会長が若い頃、世話になり、木子とも昵懇だった。【銀嶺・聞き取り】



図版25

(註45)
『越佐の埋み火』の中で横山蒼風は「会社出張先の長野で心臓発作。」と記しているが、御親族に確認し、「会社の出張先の長野」は誤りと判明。また、親族間でも、死亡状況について風呂場で倒れたとも、朝、布団の中で亡くなっていたとも分かれる突然の死だったようである。

平成四年
(一九九二)

平成六年
(一九九四)

平成七年
(一九九五)

平成八年
(一九九六)

平成九年
(一九九七)

平成十四年
(二〇〇二)

平成二十七年
(二〇一五)

九月、未亡人ら遺族によって、佐渡から滑川市の無縁寺に、遺骨を含め墓石を移し再建される。(図版26)聞き取り・現地

十月二十二日、二十三日、佐和田町(現佐渡市)佐渡中央会館で開催された第十四回三木会書道展に中村木子遺作展が併催される。写真・新聞

六月二十八日、新潟日報紙に連載中の「越佐の埋み火」(25)で横山蒼鳳に中村木子を取り上げられる※資料八十二。現物／

七月、旧両津市の『広報りょうつ』七月号「市長考え歩記(一二六)」に当時市長の伊豆野一郎が「生き方」と題して木子のことを記す※資料八十三。現物

十一月一日から十二月十五日まで、新潟県立近代美術館「戦後の書・その一変相 江口草玄」で作品三点(図160、167、168)展示される。

十月、新潟県立近代美術館便り『雪椿通信』第九号に筆者「研究室より 佐渡の島影―中村木子ノート」掲載※資料八十四。

二月十三日から三月二十四日まで、岐阜県美術館「日本的なるもの 書くこと描くこと」に《作品》(図167)が展示される。

三月四日から四月十二日まで、新潟県立近代美術館常設展「所蔵品に見る〈書〉」に中村木子作品《曠達》(図67)、《作品C》(図160)、《作品》(図165)が特別展示される。

三月末、塚本惣右衛門氏四点、塚本順一郎氏一点の中村木子作品が、新潟県立近代美術館に寄贈される。／

九月三日から十一月八日まで、新潟県立近代美術館常設展「新収蔵品を中心に」で塚本両氏から寄贈された五点、前期(十月四日まで)《曠達》(図67)、《崔顥詩黄鶴楼》(図49)※資料八十五、後期(十月五日から)《老子第一章》(図68)、《作品C》(図160)、《作品》(図165)が展示される。



図版 26

二、作品

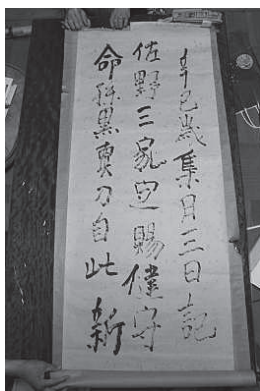
前章の年譜に照らし合わせつつ、中村木子の書歴を見ていくと次の四つに大別できる。

- 〔第一期〕 手習い期…戦前～昭和二十年（一九四五）（図1～3）
佐渡で伝統的な書道を伝習し、鈴木翠軒の流派につき競書雑誌で学んだ頃。
- 〔第二期〕 『書之美』期…昭和二十一年（一九四六）～二十六年（一九五一）（図4～78）
戦後、佐渡で国家再建、佐渡の文化振興を図ると共に、上田桑鳩に師事し、新時代の書のあり方を考え始めた頃。
- 〔第三期〕 墨人会期…昭和二十七年（一九五二）～三十六年（一九六二）（図79～171）
墨人会を結成し、既成の書壇と一線を画し、書の革新を図った頃。
- 〔第四期〕 滑川期…昭和三十七年（一九六二）～四十八年（一九七三）（図172～186）
家業の都合により佐渡を離れ、墨人会の活動からも身を引いて以降、晩年まで。

この四期の中で木子の書として見るのは、戦後の、新しい時代の書、書の革新を志した第二、三期の十六年間と言える。ただし第三期・墨人会の後半、昭和三十二年（一九五七）から同三十六年（一九六一）までの五年間は、佐渡で無絃社での活動はあったようだが、墨人会の活動を休んでいるので、実質十一年間と考えてよからう。木子の遺品の中に、この時期の作品写真や『墨人』誌、写真原版、また墨人同人の書簡などが残っていたことから、戦後の、書の革新に燃え上がった木子自身の書に対する情熱は、この時期、特に第三期の墨人会期であったことは、間違いない。

第一期の作品は、数点しか実見できていないが、初学の時期であり、書道の伝統的な師風を継承する手習いの延長線上にある。木子が後年『墨人』で回想しているように、祖父に習字の手ほどきを受け、競書雑誌の通信添削で学び、師に付き、その講習会に参加して流派の書風を習得していった時期と言える。その中で『臨孟法師碑』（図1）は、全臨の大作で出品作（展覧会不明）。そして調査の中で見つかった最も早い時期の作。鈴木翠軒流を伝え、七百八十字余りを端正に書き上げた木子二十歳^{（註46）}の技術力が窺われる。また戦時下の『青少年学徒二賜ハリタル勅語』（図2）『教育勅語』（図3）からも、技術力が窺われると共に、時代色が表れている。前後するが、木子の遺品、米倉大謙の手紙^{（図版3）}中、「十八歳の少年にして而もこの書あり其の技倆ノ卓絶スへて驚くの外なし」という文を割り引いて考えても、この期の木子の書写技術の高さが裏付けられる。

第二期は、上田桑鳩に師事し、戦後の復興期の中で、個への自覚の萌芽期と言える。戦前から芸術としての書の確立を唱えていた桑鳩の指導の下、木子の書は、戦前の端正で均斉のとれた書から一気に変化していく。戦前から感じていた「技術と、技術の情性で字をかくことが書芸術か」※資料四十七という疑問が、戦後、解放され、桑鳩の西洋哲学や美学を取り入れた創造的表現に影響されていた。桑鳩の弟子である森田子龍が編集主幹の『書之美』誌が昭和二十三年（一九四八）四月に発行され、木子も八月第五号から競書成績欄に名を連ねていき、桑鳩風な作品や桑鳩が好んだ古典、特に漢代以前の木簡・竹簡や帛書、摩崖碑などの古朴な強さを持った書の臨書が多くなる。そうした中、同二十五年（一九五〇）第三回書道芸術院展で『臨山名村碑』（図18）^{（註47）}が佳作賞を受章する。一方で、長谷川三郎を始めとして須田剋太、イサム・ノグチら美術家との急速な接近により、『書之美』の中で書を分析的に研究するα部^{（図36、42、46、52）}や、書の実社会への浸透を研究する商業美術部^{（図35、43、47）}にも積極的な出品している。古朴な古典の学書や、α部での試行によって次第に文字を歪曲し、紙面を再構成したような作品が多くなっていった。アンフォルメルや抽象表現



（註47）
現在右幅のみ残る。第三回書道芸術院展佳作賞。

（註46）
軸装の裏面に出品票が添付され、「年齢20歳」と書かれている。

主義の西洋美術、そして美学や国内のモダンアートの作家たちと交流を深めながら、桑鳩の下で新しい時代の書を分析的に研究を進め、個の自覚に至った木子は、森田子龍、井上有一、江口草玄、関谷大年との五人で、前近代的な書法を伝習していく師弟関係や、流派に寄り添う現書壇との関係を捨てさり、個の表現を求めて墨人会を結成し、既成の書壇と袂を分かち、その活動はより先鋭的に進めていくこととなった。

第三期は、墨人会を結成し、美学者・井島勉や国内外の美術家との交流を深め、自身(個)の表現を模索した最も熱情的な時期と言える。この時期制作された作品から、木子が目指した書の方向が窺える。

木子が最も模索したのは「線の表現」ということと思われる。線に表情を付けるため鋒先を燃やした筆で書いたり、畳の上で書くことで線の中に白く飛んだ部分を作る飛白表現(図80、81、145、146)を模索したりしている。そして線と線とを接近させたり、絡み合わせたりして綾模様のようにするなど、線に表情を持たせながら構成して作られる紙面を模索する姿が『墨人』創刊号で示した『為政命宮斬大年』(図79)に始まり、墨人展最後の発表となる『作品』(図166)、そしてその制作過程の一作(図167)まで作品の随所に表れており、確認することができる。

また、墨(図)と余白(地)との問題では、そこに摩崖碑で見られる形状に着目し、人によって引かれた(彫られた)線と摩崖面の凹凸(拓本に写された凹凸の白と黒)との人為と天意が渾然とした表現を模索した『作品A(良寛詩』(図97)『仲よし小道』(図111)『(不明』(図131、148、149、151、153、158)『蜜雲』(図146)『烏飛兎走』(図155)『作品』(図161)『原始』(図162)などの作品からも線の表現に腐心する木子の姿が窺えよう。

そしてその線の表現、構成の方向として、ジョアン・ミロが好きだったと伝えられるその影響、有機体の記号的浮遊のような『作品一』(図92)『作品二』(図93)『作品B』(図98)『心無累』(図103)『(不明)』(図139、144、148、149)『作品A』(図159)『作品C』(図160)などからも模索の幅を見ることができ、書における古文(甲骨文や金文、篆書等)の造形性と、ミロの有機体記号の類似性から試行されたものである。

墨人会での活動の終盤には、行為性(運動性)が見て取れる。これは井上有一に影響されているところが大きいと思われるが、有一の線を引きさるストローク性に対し、木子は割れた筆を紙面に打ち込むような短い線、点の行為、上下動の動きの中での線の表情の変化を見せている。(図164、167)最後の墨人展出品作となる『作品』(図166)は、墨人会での活動の到達点、木子の求めている線の表現の帰結と言っても良い、木子らしい作品ではないだろうか。

しかし、墨人展や海外展への作品出品はあるものの、昭和三十一年(一九五六)からは墨人研究会への参加、『墨人』誌の執筆などが減り、同三十二年(一九五七)初からは、家業多忙で墨人会の活動を休まざるを得なくなる。三月には同人から会友へととなり、以降、作品の出品は、同三十六年(一九六一)の『合品』(図171)のみとなり、墨人会から離脱していく。この『合品』は、木子らしい歪曲した字形の表現に、この時期の墨人会の表現である太い線で書き切った、辻太が言うように、まだかつての情熱が伝わってくる久しぶりの作品だが、以降の書には、こうした熱情的表現は無くなってしまふ。

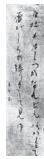
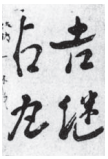
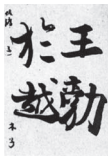
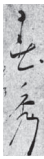
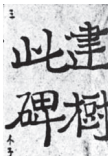
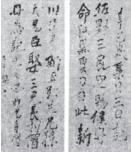
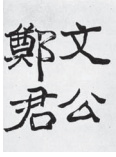
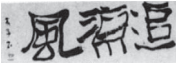
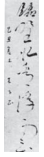
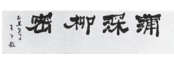
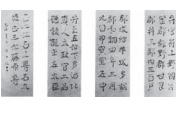
第四期は、家業が立ち行かなくなり、昭和三十七年春に佐渡を離れてから、同四十八年五月に金沢で亡くなるまで筆を持った中で書である。佐渡を離れる際、それまでの作品はほとんど佐渡の人達に渡して離島したという。しかし、何が残り渡されたのか、そして所在不明の作品が多い。この期の書は、墨人会での活動の跡を見ることは難しい。ただ表現手法として蠟繅染めの手法(図181、185)を取り入れたりしている点に辛うじて名残と見えるくらいと思われる。この時期の書は、何よりも父祖の地である佐渡を離れ、各所を転々とすることや晩年に長女を亡くしたことなど、自身の身の回りの大きな変化が影響している。他の墨人会の同人たちも昭和三十、三十一年頃から非文字の作品は制作せず、書は文字を場として表現されるものと文字へ回帰し、少字数の表現へと変わっ

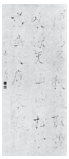
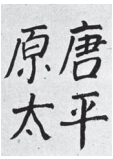
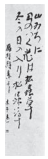
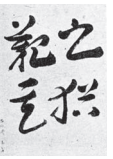
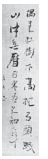
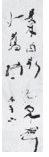
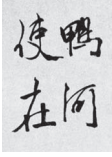
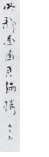
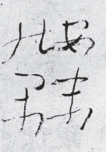
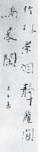
ていく。そうした時、木子の場合、同三十八年（一九六三）六月に久野麦銭に送った手紙（図173）のように「誰にでも読める、読ませると言う文字本来の目的と文字発生からの色々な約束、制約を受けつゝ、それから逃避しないで堂々と受けて立ちながら然も全身制約の縷の中で新しい近代の書表現をなしとげたい」というところでは、文字として認識できる―ただし、それは手慰みな表現―だけのものとなってしまう。この時期の作品は、晩年に富山県民会館で個展を開催しているの、数多く残っているが、書の革新を目指した墨人期の書に比べて魅力が乏しいと言わざるを得ない。その中で試作であろうと思われる作品（図184）は、かつての作品には遠く及ばないが墨人会での活動を思い起こさせる試筆である。

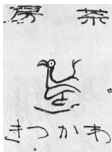
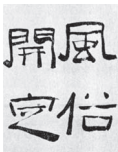
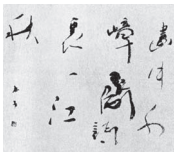
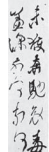
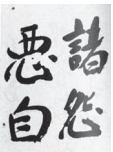
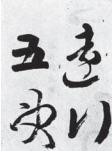
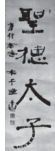
以上、中村木子の作品は、現在実物を確認しえる作品は多くはなく、また、墨人期の代表的作品の現物もほとんど確認できない。しかしながら、調査によつて判明した中村木子の作品および図版について次に紹介する。なお、第一期と第三期は、確認できた全ての作品と図版を掲載したが、第二期は、小品や類例のある作品数点を間引き、第四期は、同様な作品が多いので代表するものの掲載としている。

番 号	
図	
画像番号	
作品名 制作年（西暦）	出品展覧会・出典
①寸法／②所蔵／③読み／④木子の言／⑤他者評／⑥その他 ／⑦筆者註	

3	2	1
15-2	15-1	11-1
教育勸語 昭和十四～二十年 （一九三九～四五）	青少年生徒二賜ハリタル勸語 昭和十四～二十年 （一九三九～四五）	臨孟法師碑 昭和十一年（一九三六） 出品展覧会不明 （↓⑦参照）
②個人蔵／ ⑥落款に「中村香山謹書」とある。／ ⑦張り交ぜ屏風の一つとして張り込まれている。内容から図2《青少年生徒二賜ハリタル勸語》と同時期頃の制作と思われるが、図2の整然とした表現に比して、線の揺れ等、表現に個性が表れている。	①29.5×41.0 cm／ ②個人蔵／ ⑥飾り枠外に「中村佐魂謹書」とある。／ ⑦この勸語は、昭和十四年五月二十二日に発布されているため、それから廃止されるまでの間に書かれたと推定される。	②個人蔵／ ⑥落款に「孟法師碑銘 中村香山臨」とある。／ ⑦軸天部の裏に出品展覧会不明の出品表があり、「年齢20歳」と記載されていることから制作年を特定。
6	5	4
24-2-1	24-1-1	23-9-1
臨高貞碑 昭和二十四年 （一九四九） 『書之美』第十一号… 第十一回競書成績 随意部二級二番	松風吹天蕭 昭和二十四年 （一九四九） 『書之美』第十号… 第十回競書成績創作部 ・天（位）	高臥 昭和二十三年 （一九四八） 『書之美』第六号… 第六回競書成績創作部 ・天（位）七番
①半紙／ ⑤岡村雄風「審査概評」「潘存張りの高貞臨は余裕も見えず堅い、着実な作であるが新鮮味が無い、此処ら辺りから、ロマンも入れて転換をやらないと行詰りを生ずるだらう。」／ ⑥成績優秀につき、随意部昇級となる。	①半切四分の一／ ⑤字野雪村「審査概評」「良寛的なモチーフであるが線質が爽やかで含むものが乏しいために飄然たる風致に欠けた。」	⑤森田子龍「審査概評」「すなはさが魅力です。臥の字は高の字が上のこの位置を占めてゐる事を考へて書かれる様」

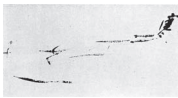
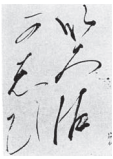
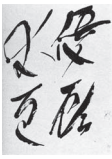
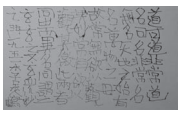
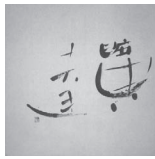
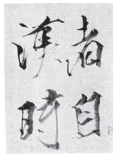
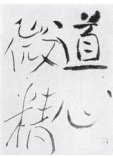
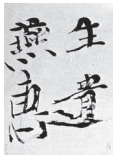
12	11	10	9	8	7
					
24-8-2	24-8-1	24-6-1	24-5-2	24-5-1	24-4-1
『書的美』第十七号… 第十七回競書成績 創作部天位四番	短歌 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十七号… 第十七回競書成績 条幅随意部	臨瀧頂歴銘 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十五号… 第十五回競書成績 規定部一級二番	臨主勃詩序 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十四号… 第十四回競書成績 半紙規定部一級一番	春秀 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十四号… 第十四回競書成績 創作部天(位)三番	臨龔龍顏碑 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十三号… 第十三回競書成績 規定部三級二番
①画仙四分の一タテ長	①半紙／③白牡丹しつかなれども咲かむとて／雷がしろの張りきりて見ゆ／⑤宇野雪村「審査概評」「短歌のリズムを度外視するとしても、君の心リズムがもつと表れて作品の上に、たかまりも、静もあり、うねりもあるもので欲しい、手なれた安易さの中に生まれたいもので、之も君の一つの実用書の中に入れられるべきであらう。我々は実用書は読まれるという意味でなく、安易に機械的に書かれることを言いたい。苦悩の尊さ——君としては持つていと言ふかもしれないが——が最近強く感じられるので自戒のつもりで君に贈る。線としては「きつて」あたりが好きた。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「審査概評」「正直にあるがままに、素直な態度で臨書したよさである。これからは、新しいものは生まれないうがこれまで、こねくりの仕事、をして行詰つた君としては、一度この素直なところへ立返つて、そして出直す方がよいだらう。」	①半紙／ ⑤宇野立魚侯「審査概評」「詩序の風雅とは異なつたものを感じるのだがそれでいて一つの魅力をもっているのは、君の線のもつ和ぎの中にあると思う。」	①半紙タテ半分／ ⑤宇野雪村「審査概評」「線を細くするには、それだけ線に凝縮されたものがなくてはならぬ、案外この人のも調子書になつて来つたのではないか。」	①半紙／ ⑥成績優秀につき、規定部昇級となる。
18	17	16	15	14	13
					
25-3-1	25-2-1	24-10-1	24-9-3	24-9-2	24-9-1
『書的美』第二十四号 佳作賞／ 第三回書道芸術院展	臨山名村碑 昭和二十五年 (一九五〇) 『書的美』第二十三号… 準会友習作	追涼風 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十九号… 第十九回競書成績 半紙創作部六(位)四番	臨瀧水看浮雲 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十八号… 第十八回競書成績 半紙創作部二番	蒲深柳蜜 昭和二十四年 (一九四九) 『書的美』第十八号… 第十八回競書成績 条幅創作部天(位)二番	臨多胡郡碑 昭和二十四年 (一九四九) 日本総合書芸展 第二回毎日展／ 『書的美』第十八号
②右幅のみ個人蔵／④中村木子「作因集」「山名村碑の臨書。飛鳥人の持つ発生の健康さとロマンを超長鋒半毛にて黒以上の黒色で、素朴さ、稚拙感等を出し作品の構成には濁気を加へて光線を入れ明るさ立体感等を出さうとしました。特に此の表現は私としては始めてなお特に熱気をもつてあました。」／⑤宇野雪村「同志同行の立場から——第三回書道芸術院展記——」中評、「昨年の毎日展の快調がでていない。練り上げが足りないの、まだ／＼不純なものがつき纏つていいる感じである。君の書性の特長を君自身で認識する必要がある。」／⑦木子旧蔵写真。	⑤上田桑鳩「同人作品評」「粘りと呼吸の長さに欠け、余韻は乏しい。君字に於いて意を得てある。要するに空間を支配する意識に欠けてゐるのだ。」	①半紙タテ半分／⑤宇野雪村「審査概評」「数枚ある中でこれを取つたが君としては筆が沈んで線に張りが出て来たものに進歩を認められるが感性のよさとか、知性のヒラメキの乏しい作品だとしか思われない。こうした表現をとらねばならなかつた意図が明確に打出されたものであつてほしい只技法的には或は造形的に追隨する仕事は内らのことであつて条幅や創作の仕事にはもつと勇敢な自分の意図を盛り上げてほしい。」	①画仙四分の一タテ長／ ⑤森田子龍「審査概評」「浮雲」のあたり、特にその左側に大きく抱いた空気のフーツとふくらみ出て来るのが、先づ目に來た。上部は整理足らず筆路の冗漫を感じる。これは一面筆の深さを増すことによつてこの冗漫を救ふことも出来る。」	①半紙／ ⑤宇野雪村「審査概評」「水つぼさと濃やかさを表現してメカニクな美しさをうまくアレンジしている、まともに気をとられて乙にすまひこんでしまつた。もつと野生的な強さが盛り上がるものを企求したい。筆の圧力にも欠けるところがある様だ。」	⑤森田子龍「漢字と新書云」中評「一見、表装効果とマッチして快よい味に魅せられ、美しい夢に誘はれる思ひがする。正に美しい作品である。再見、三見、腹の底の方が苦情を申立て、来る。表現面の完美を紙背から支持するものに脆弱なものがあるのではないか。」 ⑦木子旧蔵写真。

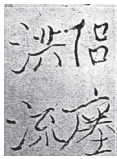
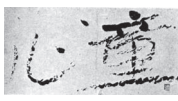
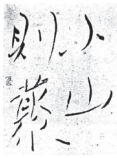
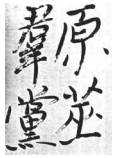
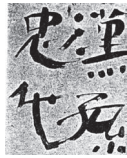
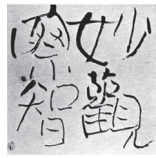
24	23	22	21	20	19
					
25-6-7-1	25-5-2	25-5-1	25-4-2	25-4-1	25-2
第一回書の美公募展／ 『書の美』第二十七号 韋応物詩秋夜寄丘二 十二員外 昭和二十五年 (一九五〇)	臨貴名松翁臨東方朔 画賛 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十六号.. 会友準会友習作	島崎藤村詩 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十六号.. 準会友創作	臨出師頌 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十五号.. 準会友	太上隱者「答人」 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十五号.. 準会友創作	平原の歌中より 昭和二十五年 (一九五〇)
③懷君屬秋夜散步／咏凉天山空松子／落幽人応未眠／木子書	⑤宇野雪村「同人作品評」 会友準会友習作雑感「木子君の、 東方朔画賛の松翁臨書習作は、稚拙さをとらへ得てゐる。然 しもう一つ踏みこんで線が響かないと問のびして持ちこたへ る力がないと思ふ。」	③山みちに／目のつく花は松蟲草／冬の日の入り松蟲草／藤 村詩集より 木子書 ⑤森田子龍「同人作品評」 「藤村の詩による一幅はやはりそ れ程推敲の跡も見えないが甚だしく破綻があるといふのでも ない。気軽に見られる作。線はボクボクして深み澄み透らな かつた。隷書の一作に最も重厚なものがあつたが、借着とい ふ感じが先に来る。創意が欲しい。産みの悩みがほしい。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」 「枯木な味は出ているが、揺りが 足りない。心境をも一段開いて感激を書つける態度をとれ」	①小画仙半切／ ③偶来松樹下高枕石頭眠／山中無曆日寒尽不知年／ ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「自然な淡雅な作品で、巧まない ところに自ら変化があつて、素直な気分が窺える。相当高く 買つてよい。」	①131.0×32.0 cm／ ②個人蔵／ ③飛騨境の山のぜんまいわさびあまた／送りくれしが人月見 しらず／平原の歌中より／千九百五十年二月／木子書
30	29	28	27	26	25
					
25-10-2	25-10-1	25-9-2	25-9-1	25-8-1	25-6-7-2
準会友随意条幅 『書の美』第三十号.. 第三十回競書成績	夏木自新色泉声如旧時 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第三十号.. 第三十回競書成績 準会友課題条幅	蒼嶂秋雲更白青林霜 葉偏紅 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第三十号.. 第三十回競書成績 準会友課題条幅	風静書窓月滿樓 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十九号.. 第二十九回競書成績 準会友課題条幅	臨秋萩帖 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十八号.. 第二十八回競書成績 準会友課題	竹外茶烟靜籬間鳥声聞 昭和二十五年 (一九五〇) 『書の美』第二十七号.. 第二十七回競書成績 準会友条幅
①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「大きい逞しい仕事だ。空白の中 に大きい意味のあるを覚える。」	①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「熱情のぶちつけだ。そして空間 を軽くきつたところに明るさと快適が生れている。更字少し だれたのが傷でもあり魅力でもある。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「治河議の臨書は外見弱いが涼化 静謐滋味に富んだものだ。松翁に立脚して君の本質の一面 が、ひそやかな中から沁出てくる。」	①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「良寛あたりを狙つたものか。淡 くて落着き、じつくり楽しめる興長きもの。素朴閑雅愛すべ きもの。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「小味ながら神経よく行届き、気 持も統一してすがすがしい気分である。」	①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「閑雅にして清澄な境地だ。然も 気宇は字の細いにかゝわらずかなり大きい。」

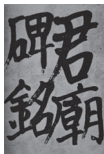
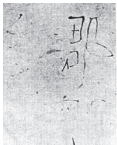
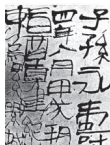
36	35	34	33	32	31
					
25-12-α	25-11-S	25-11-3	25-11-2	25-11-1	25-10-3
(無題) 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十二号、α部	茶房あかつき 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十一号、商業美術部	臨張還碑 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十一号、第三十一回競書成績 随意習作	画中水嶺齋詩裏一江秋 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十一号、第三十一回競書成績 随意条幅	臨費乱帖 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十一号、第三十一回競書成績 課題条幅	臨三十帖冊子橋逸勢部分 昭和二十五年 (一九五〇) 『書之美』第三十号、第三十回競書成績 準会友課題習作
⑤長谷川三郎評「線も、空間も美しい。造形的な構成の感覚もよい。然し、全体の気分が、消極的であると思う。この作品にあるまとまりをもつと力動的(ダイナミック)に生かす冒険の意欲が望ましい。」	⑤上田桑鳩評「そこらにある喫茶店に見られるような作品で別に新しいものではないが、すつきりして気がきいたよい気分のものである。中の画を中心にして上下の字のあしらいがうまく調和している。あかつきの調子親しみが持てる。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「張還碑の清潤さを純真な気持で明媚に表現して、かなり完成した。近來君の心手共に澄んできたことと、透徹したことを喜ぶ。」	①小画仙半切 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「詩情ある韻致高い作品だ。作品の持つ世界は大きく、静な中から人の心をそぞろに秋の淋しさに誘込む。最後の秋字柔に且つ軽くすれば、更に効果的であつただらう。」	①小画仙半切 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「少しきつすぎる気魄であり、はげしい運筆ではあるが、自らのものとして把握したところに、原帖とは別な、きびしくも大きい世界を持つている。厚味は表に現われず、これを空間に置いていることは評者にも分る。只収筆をなげやりにしたため、余情が生じなかつたところが遺憾だ。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「熱情的な書振りだか、表現の制撫が足りなかつたため願しい。」
42	41	40	39	38	37
					
26-1-α	26-1-2	26-1-1	26-1-0	25-C-3	25-C-2
(無題) 昭和二十六年 (一九五一) 『書之美』第三十三号、α部	臨敦煌出土草書写経 昭和二十六年 (一九五一) 『書之美』第三十三号、第三十三回競書成績 準会友随意習作	画屏無健筆爆竹有寒灰 昭和二十六年 (一九五一) 『書之美』第三十三号、第三十三回競書成績 準会友随意条幅	聖徳太子 昭和二十六年 (一九五一) ①74.5×24.0cm ②個人蔵	七言二句 昭和二十五年 (一九五〇)頃 ①135.0×14.5cm ②個人蔵	養恋 昭和二十五年 (一九五〇)頃 ②個人蔵 ⑦線の太い作品だが、線の回転性、はらいの勢いなどに木簡や李柏文書のような運動性が見られる。上田桑鳩の影響による墨人会結成前の制作と考えられる。
⑤長谷川三郎評「A、飄逸な面白さがある。彫刻的な形態も清潔でよい。但し、紙を裏返して見た時の方がずつとよくなる——それは、表の時に感じる筆つきの安易すぎる欠点がなくならないからである。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「穏厚にして壮重な事に心を暖かくしてくれる情の世界が分つてきたように思えて喜ばしい。これも心的な一進境だ。」	①小画仙半切 ⑤上田桑鳩「競書審査評」「漠々たる中に、詩情をよせた作品だ。上半線や字傾きから生じる韻律に情がそえられる。筆爆がそれに添えなかつたことは嬉しい。」	⑦落款に「辛卯新春 木子謹書」とある。 ⑥木子の従兄、元両津市長を務めた故伊豆野彦郎旧蔵。	③琴彈石上桐三尺雁到江／頭字一行／木子書 ⑦書かれている書風から、この頃と推定される。	

48	47	46	45	44	43
26-1-28	26-2-S	26-2-α	26-2-2	26-2-1	26-1-S
岑参詩与高適薛稷同登 慈恩寺浮圖 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十四号 推薦(賞) 第四回書道芸術院展	開店のんべ 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十四号 商業美術部	(無題) 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十四号 α部	臨鄭長猷造像記 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十四号 第三十四回競書成績 準会友課題習作	冬心 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十四号 第三十四回競書成績 準会友随意部条幅	文化祭 佐渡倶楽部 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十三号 商業美術部
③塔勢如湧出孤高／聳天宮登臨出世／界磴道盤虛空突／兀伻神州崢嶸／如鬼工四角礙白／日七層摩蒼穹／下窺指高島俯眺／聞驚風連山若／波譁奔走似朝東／青松夾蹊道宮觀／何玲瓏秋色徒(徒)／西來蒼然滿闕／中五陵北原上／萬古青濤々々淨／理了可悟勝因／夙所宗誓特挂／冠去寬道資無／窮 木子書 ⑤上田桑鳩「第四回書道芸術院展より」中評、「六曲屏風の涼しげで楽しい詩情の豊かなのをうれしく思う」(『書の美』第三十五号) ⑦図49とともに出品されたが、「書の美」第三十五号に図版掲載はなく、上田桑鳩の評のみ掲載される。この成績優秀により会友に推薦される。木子旧蔵写真。	⑤長谷川三郎評「A、ゆとりのある構成で、余白がよく生き、線もしまつた中に、ユーモアもあつて題材とシンククリしている。成功作。」	⑤長谷川三郎評「A、横の作品であつたが、タテにした方が、線も空間も生きて来る。印の位置も右下隅タテにして」に移したい。四本の線の交錯が、複雑に空間を截り乍らも、四本ままとつて作り出す形体にも動きがあるので面白い。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「原本の形の特質によつて、純朴な個性的な臨書だ。頑にして愛すべきもの。」	①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「文句から来る気分大体出ている。殊に心の部分において、澄みきつている。冬斜にして動きを見せようとしたらしいが、むしろ斜になつた方が、きびしい気分になつたのではなからうか。このきびしくて澄んだ題に対しては、才智の働かせかたを内面に向わせるべきたつたと思う。」	⑤長谷川三郎評「A 大事の様式化には無理がなくてよい。数字(月日)と小字(場所)の様式かも」
54	53	52	51	50	49
26-6-2	26-6-1	26-5-α	26-5-1	26-4-1	26-3-1
臨劉石庵書 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十八号 第三十八回競書成績 会友随意習作	臨木簡集英上 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十八号 第三十八回競書成績 会友課題習作	(無題) 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十七号 α部	心無累 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十七号 第三十七回競書成績 会友課題条幅	臨姨母帖 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十六号 第三十六回競書成績 会友課題条幅	崔顥詩黃鶴樓 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十五号 第四回書道芸術院展 推薦(賞)
①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「情味豊かな石庵の臨書。更に濃密なポリウムを養い給へ。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「樂趣あるフランスのブラック中期の作品を思わせる作品だ。線も渋い。堅横の階調なかなかよく働いている。ただ伏の字を更に働くようにデフォルムするともつとよくなろう。」	⑤長谷川三郎評「鋭い粘り強い神経が、それに徹底して、却て厚味のある充実した効果をあげて居る。構圖に幾分難があるが、紙面の白の美しさは生きて居る。」	①小画仙半切	①小画仙半切／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」 「ポリウムや情緒は原本と異なるが、君の感情の表現として、創意あり、充実した気分が、この作品を高く響かせ引きしめている。」	①各136.0×68.0cm／②当館蔵／ ⑦『書の美』第三十五号に図版掲載され、当時は二曲一隻屏風(現在は双幅に表装)で出品されたことがわかる。上田桑鳩の批評では、図48の六曲屏風のみであり、二点出品し、受賞したものと考えられる。また、この成績優秀により会友に推薦される。木子旧蔵写真。※資料八十五

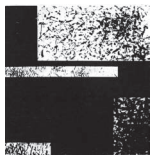
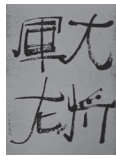
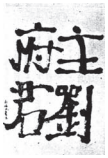
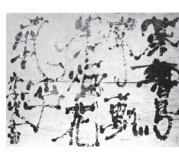
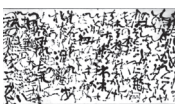
60	59	58	57	56	55
26-10	26-9-2	26-9-1	26-7-8-3	26-7-8-2	26-7-8-1
良寛詩夢中間答 昭和二十六年 (一九五二) 第三回毎日展	臨李柏文書 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十号… 二部随意習作	(不明) 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十号… 二部随意創作	臨澄清堂帖 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十九号… 会友課題習作	琴韻暮声 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第三十九号… 会友課題条幅	鐘の鳴る丘 昭和二十六年 (一九五二) 第二回書の美巡回展 A賞特選／ 『書の美』第三十九号
③乞食／到市朝／路逢／旧識翁／問我／師胡爲／住彼／白雲峯／我問／子胡爲／老此／紅塵中／欲答／兩不道／夢破／五夜鐘／木子山人／ ⑤上田桑鳩「第三回毎日書展評」※資料三／ ⑤井上有「毎日展より―書の美会員作品雑感」※資料四／ ⑥アメリカ人の手に渡る。／ ⑦木子旧蔵写真。	①半紙／ ⑤上田桑鳩「同人作品評」「整理と単化の度合がよいところで行われ、情調にして純朴な気分を出している。平素の情緒におぼれたところも見えず、健康になつてきたことを喜ぶ。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」「雑然とした中に統一をもとめ、楽しげな遊び方である。快い不協和のリズムを覚える。落款をも少し下へおろせば、びりつとしたであろう。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」「牧歌的素朴なセンチメンタルな臨書だ。こういったところを押さすめっていると文人趣味に陥入るのである。逞しさを失わざらんことを切望する」	①小画仙四分の一／ ⑤上田桑鳩「競書審査評」「横画の持つ諧調に楽しさはあるが、堅画で作っている諧調と骨格に不健康なものを覚える。こういった牧歌的なものや、情緒的なものは一種の憧れは覚えるが、成長しないことを知っておくべきである。」	⑤関谷大年「応募作品評」※資料一／ ⑤有田光甫、柴垣九江、安藤机賛「七点批評」※資料二／ ⑥第二回書の美巡回展で成績優秀により二部会員に推薦される。／ ⑦『書の美』に図版掲載のための版下原版を木子旧蔵。
66	65	64	63	62	61
26-C-1	26-12-3	26-12-2	26-12-1	26-11-2	26-11-1
登樓臨海原 昭和二十六年 (一九五二)頃	臨吐魯蕃写経 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十三号… 二部課題習作	(不明・□怡) 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十三号… 二部随意創作	月至千家静 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十三号… 二部課題創作	臨甲骨文 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十二号… 二部課題習作	奇秀 昭和二十六年 (一九五二) 『書の美』第四十二号… 二部課題創作
①各135.0×49.0cm／ ②個人蔵／ ⑦佐渡で書を志す仲間の神蔵氏宅新築の際、襖に書かれたもの(七月頃)。現在は双幅。	①半紙／⑤上田桑鳩「同人作品評」「自由な爽や境地で書いているのですが、美しく美しい作品である。しかし、それは少々安易な気持であつて、対象物に迫つていこうとする前進がなくて只遠くから、打眺めての印象を楽々と書き着けたといつたものである。もつと厳しい喰いさがあつた後に(観照のときだけでもよい)こうあつてほしい。そうすれば、この作品もつと響いてくるものを持つてであらう。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」「軽い即興的な面白さを持つ作品だが、怡の長い堅画の支えがきかないので、全体の響きが壊れたかたちである。」／ ⑦『書の美』に図版掲載のための版下原版を木子旧蔵。	⑤上田桑鳩「同人作品評」「軽い穏やかな気分の湧いて来る詩だ。殊に中央の家がその気分を一番現わしている。静字は右部に対して少々不調和だ、それは、右上から斜に走つた千の不用意からきている。」	①半紙／ ⑤上田桑鳩「同人作品評」「細い線で澄み切り、しかも豊かな情感を出している。いかにも古人の遊びを見る楽しいものだ。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」「横線と斜線の階調が音楽的に美しく秀でている。気分も清く、君としては近頃の明快な作品だ。小快作であらう。」／ ⑦『書の美』に図版掲載のための版下原版を木子旧蔵。

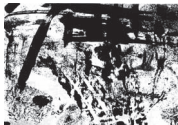
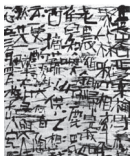
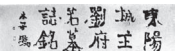
72	71	70	69	68	67
					
27-2-1	27-1-3	27-1-2	27-1-1	26-C-3	26-C-2
（不明・寒□□） 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十五号.. 二部随意習作	臨筋切 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十四号.. 二部随意習作	臨佐理書 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十四号.. 二部課題習作	凌閣 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十四号.. 二部課題創作	老子第一章 昭和二十六年 （一九五二）	曠達 昭和二十六年 （一九五二）頃
⑤上田桑鳩「同人作品評」 「感覚的な即興詩だ。清く美しいが、されこれから発展するものがあるだろうか。」 ⑦『書的美』に図版掲載のための版下原版を木子旧蔵。	①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「原本の筋切より気分ははげしい。しかし、それだけきびしく又やさしく澄んだ気分がする。筆の出した偶然性も美しい。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「線のねばさ、運筆の呼吸など原本と違って、少々独善的なところなきにもしあらずだが含み味ある澄んだ線の交錯がうまく交配されて、そこに一種別名快よい雰囲気を出している。今少しゆとりがほしい気持がせぬでもないが。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」 「即興的なロマンチズムなものだ。闇はうなづけるが凄は浅い。もつとがっちりした骨格の逞しいもので作り上げていくようにしたらどうか。或はそれを望むのは木子君の性格に合わぬだろうか。」	①16・5×28・5 cm ②当館蔵 ⑦落款に「一九五一 木子呆人写」と年記があり、墨人会結成以前の作品とわかる。細い線で、文字を密集させた表現は、中国漢代の「開通褒余道刻石（かいつうほうやどうこくせき）」などの摩崖碑（まがいは）を意識したものと思われる。	①68・0×68・0 cm ②当館蔵 ⑦木簡調の作品であることから、上田桑鳩の影響を受けた昭和二十六年頃の作品と推定される。
78	77	76	75	74	73
					
27-3-3	27-3-2	27-3-1	27-2-3	27-2-2	27-C
臨貴名松翁書左繡叙 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十六号.. 二部随意習作	臨良寛書 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十六号.. 二部課題習作	瑞 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十六号.. 二部課題創作	臨光明皇后臨案穀論 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十五号.. 二部随意習作	臨石鼓文 昭和二十七年 （一九五二） 『書的美』第四十五号.. 二部課題習作	暴風雨のぼん 昭和二十七年 （一九五二）頃
①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「松翁の左繡叙のきびしさは、煮詰めたところから来るきびしさであり、その中に張りが弾力があるのだが、これは張りや弾力だけなので、味うべき肉も血もない骨だけである。あまり分析して一部だけをとりすぎる。もう少し粘るか何かした総体的なものを、もう少し取入れる必要がある。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「荒削りの中に細やかな神経の働いたものが見えて、良寛より少々逞ましいが、良寛に迫るもののあるを覚える。淋しい中に、ぬくぬくと心の温まるのを覚える。空間を大きく持った落着いた字々だ。」	⑤上田桑鳩「同人作品評」 「澄んだ気分で瑞々しいものを覚える。細い張った線が美しく、又すがすがしい気分をわかしめる。構成左部をかけたところ大胆であるが、何かここにもう少し支えるものがほしい。落款をもう少し左へ書いたらどうだったか。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「種の哀調を持った習作だ。これはこれなりに清らかな雅趣を覚える。きびしさもかなりある。しかし、もつと高踏的な清さから下つてきて、生活している木子という態度があつてほしい。案穀論の胸の張った逞しさがほしい。」	①半紙 ⑤上田桑鳩「同人作品評」 「君としては珍しく客観的な臨書である。原本の印象がよく出ていて、逞しさの中にあどけなさがある。しかし、運筆の練りが少し足らぬところがあるため、原本の持つ餘響を逸した。」	②個人蔵 ⑦書の仲間の神蔵氏は、「木子が佐渡にいる頃、暴風雨があり、牡蠣の殻が吹き散らされ、それが基となった言葉ではないか。こうした構成の書をよく書いていた」と記憶している。図72と同様の構成、線質により、同時期の作品と推定した。

84	83	82	81	80	79
					
27-5-1	27-4-5	27-4-4	27-4-3	27-4-2	27-4-1
(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第二号	臨撫鶴銘 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』創刊号	臨廣川王賀蘭汗造像記 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』創刊号・古典研究	真心 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』創刊号	童心 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』創刊号	為致命宮斷大年 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』創刊号
⑤井上有「作品批評」※資料十七	①半紙／ ④中村木子「模作の跡」 習作感※資料七	①半紙／ ④中村木子「模作の跡」 習作感※資料七	④中村木子「模作の跡」 習作感※資料七／ ⑤森田子龍「作品互評」 木子の作品※資料十	④中村木子「模作の跡」 習作感※資料七／ ⑤森田子龍「作品互評」 木子の作品※資料十	④中村木子「模作の跡」 習作感※資料七／ ⑤森田子龍「作品互評」 木子の作品※資料十
90	89	88	87	86	85
					
27-6-3	27-6-2	27-6-1	27-5-4	27-5-3	27-5-2
臨枯樹賦 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第三号・古典研究	さくら 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第三号	天上大風 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第三号	臨宇多天皇宸翰周易抄 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第二号・古典研究	臨木簡 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第二号	妙觀察智 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第二号
①半紙／ ④中村木子「古典研究 枯樹賦」※資料二十 ⑤武田茂則「習作批評」「研究不足の私が批評することは、どうかと思うが、率直に感じたことを墨が少しうすいにもかかわらず穂先のきいたきびしい線である。おおきな仕事をしている。」	⑤墨人会研究部員有志「作品批評座談会」(木子欠席)※資料十九	⑤墨人会研究部員有志「作品批評座談会」(木子欠席)※資料十九 ⑦木子旧蔵写真。	①半紙／ ④中村木子「古典研究 宇多天皇宸翰周易抄」※資料十五 ⑤井上有「古典研究 宇多天皇宸翰周易抄 習作批評 中村木子」※資料十八	①半紙／④中村木子「木簡を習う」※資料十四／ ⑤井上有「習作批評」「些かも滞りがなく、奔放で明るい。生き生きしている。木子という人間が、そのまま紙一杯に躍動しているという感がある。点のリズム、突っ放した線、孫の字の上部をバカに大きく書いてしまったものだから、どうするのかと思うと、隅っこに小さく何の苦もなく取めてしまった。有一、潔よく兜を脱ぐ。／木子のこの態度が、益々発展すると共に、その裏附けとしての内面的の深さを増すことを切に望む。」	④中村木子「模作の跡」※資料十三／ ⑤井上有「作品批評」※資料十七

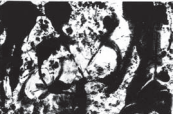
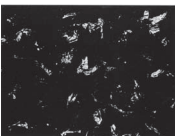
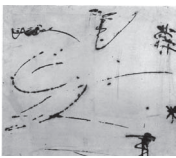
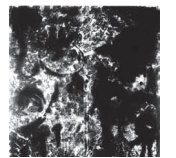
96	95	94	93	92	91
					
27-8-1	27-7-4	27-7-3	27-7-2	27-7-1	27-6-4
墨人(第五号表題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号	臨顔氏家廟碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第四号・随意習作・顔家廟碑を習う	臨杜家立成雜書要略 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第四号・随意習作	作品二 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第四号	作品一 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第四号	(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第三号
	①半紙／④中村木子「習後感」※資料二十二／⑤谷口舟山「習作批評」無造作に落着いた男の中の男、高くは雲に腕を掛け深くは地下にもぐつて地を持上る。内に含んだ情熱の顔真卿の楷書の魅力。石に文字を掘る石工職人の私は、この様な楷書を一度掘つて見たい。毎日そればかり思い乍ら今日も過ぎてしまった。先生の顔家廟碑、職業的から見て廟は好きだが外のものはあくが強過ぎてそれ程に思えないのです。」	①半紙／⑤谷口舟山評「杜家立成雜書要略 本身の線を捨て切つて、よくここまで喰入れたものと敬服の外ありません。踊つて沈んで、と私は思うのですが。」	④中村木子「模作の跡」※資料二十一／⑤江口草玄「作品互評」※資料二十三／⑥右下に「Begin」のサインあり。	④中村木子「模作の跡」※資料二十一／⑤江口草玄「作品互評」※資料二十三／⑥右下に「Begin」のサインあり。	①半紙／⑤大澤華空「習作批評」「造像二十品の臨、ネバツこく力強い作品で、然も空間が広くつてあるのに文字が大きく充滿して見える、これは線の響きの高いこと、デッサンの確かさがその基をなしていると思う。／しかしこの手はもう充分手に入つていと思われ、又ともするとこの線の味に溺れ勝ちになることは警戒しなければならぬ。勿論この作品は木子氏の体質がよく出ていると思われるが更に別の境地からねらつたものも拝見したいような気がする。」／⑦大澤華空の評中に「造像二十品の臨」とあるが、この文字が該当する龍門造像記二十品中には見当たらない。
102	101	100	99	98	97
					
27-8-p2	27-8-p1	27-8-5	27-8-4	27-8-3	27-8-2
(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号	(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号	臨多胡郡碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号・随意習作	臨劉平国碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号・随意習作	作品B 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号	作品A(良寛詩) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第五号
⑦図101と共に本文中のカットとして使われている。図101より図形的である。	⑦図102と共に本文中のカットとして使われており、文字は書かれていないが、漢字のような連筆による線の構成である。	①半紙／⑤井上有一「習作互評」「木子の主観的な臨書が、とてもよくゆく場合と失敗に終る場合とがある様に思う。これは多胡郡碑だが明らかに失敗の方である。一言にして言えばこれは安易である。／技巧を否定してボケている様で、実は技巧が眼について鼻もちならぬ。しかしあの多胡郡碑から新しい何かをひっぱり出そうとする意図には同感だ。」	①半紙／⑤酒遊生(水本酒遊)「習作互評」※資料二十七	④中村木子「模作の跡」※資料二十四／⑤関谷義道「作品互評」※資料二十六	③盤陀石上坐支頤眺雲烟雲／烟千萬重宝塔映日懸下／有龍王泉可以洗心願上有／千年松清風竟日伝誰能／超世累茲来共盤桓 木子／④木子呆人「模作の跡」※資料二十四／⑤関谷義道「作品互評」※資料二十六／⑦木子旧蔵写真。

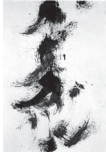
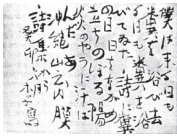
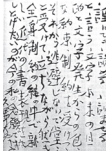
108	107	106	105	104	103
27-10-2	27-10-1	27-9-4	27-9-3	27-9-2	27-9-1
臨光明皇后臨樂毅論 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第七号・習作	老子第六章 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第七号	(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第六号・随意 習作	臨灌頂記 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第六号・灌頂 記習作	(無題) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第六号	心無累 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第六号
⑤井上有一「習作互評」 「主観的態度の蔭に、自己の型に安易に倚りかかっている点がないとは、言えないと思うが、どういうものであるか。――人のことをソナナと言えろ柄ではないが――。特に「喪」の下部や「清」の扁はイヤだ。「弱」が一字光っている。僕をして率直に言わしめれば、特に筆数の場合などは、なぜ堂々と真正面から取組もうとしないのか。下手ではあるがヒタムキな一般部員の一人の人の習作と比べて、僕はこう言わずには居られない。」	①22×21cm ③谷神不死是謂玄牝 木子 ④中村木子「模作の跡」※資料三十四 ⑤井上有一「作品互評」※資料三十五	①半紙 ⑤神蔵翠甫、森田子竜、今岡翠波、江口草玄、有田光甫、水本潤遊「習作互評」随意習作※資料三十二	①半紙 ⑤有田光甫、江口草玄、今岡翠波、猪俣静村、井上有一、森田子竜、神蔵翠甫「習作互評」灌頂記習作※資料三十一	④中村木子「模作の跡」※資料二十九 ⑤森田子龍「作品互評」※資料三十	④中村木子「模作の跡」※資料二十九 ⑤森田子龍「作品互評」※資料三十
114	113	112	111	110	109
27-12-2	27-12-1	27-11-3	27-11-2	27-11-1	27-10-3
日本書紀(天智天皇歌) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第九号	古事記(大久目命歌) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第九号	臨張遷碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第八号・習作	仲よし小道 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第八号	(不明) 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第八号	臨懷素自叙帖 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第七号・随意 習作
③きみがためのこひし／きからにはて／居て斯くや／こひむもきみ／が(め)をほり ⑤関谷義道「作品互評」 「木子にも墨人読者にもすまないことだがどうにもぴんとこなくて批評が書けない。ぴんとこないのに無理に作文することも意のすすまぬこと故止める。なぜ作品をみてもぴんとこないのかその原因をじっくりと考えていたいと思っている。」	①67×33cm ③夜麻登能多加佐士怒哀／那那由久袁登亮／杵母多礼袁志摩／加牟(以下判読不明) ⑤関谷義道「作品互評」 「はげしい情熱を感じはするがそれがどうもじいんと追いつてくるものではない。よくよく観賞してみたが表面的な見方かもしれないがガサガサした感じが先に来て何ともならぬ。四行目「多」の字ですくわれた感じがした。」 ⑦木子旧蔵写真。	⑤江口草玄「習作批評」 「原本と比較して見て何ともしても小味だ。まとまって然もたのしいものとして自己の独創性を尊重される態度は可とすべきも、原本とは大分違いものになったのではなからうか。」	①27×34cm ③なかよし／こみちわ(は)／どこのみちいづもとなりの／みよちゃんどらんどせろ／しよってげんきよく／おうたを／うたって／かえるみち ⑤江口草玄「作品互評」 ※資料三十八 ⑦「書的美」第二十九号に須田翹太「原始と書」同三十一号に「統原始と書」や、同三十三号で紹介された須田の個展出品の《無》という人物壁画のような作品を上田桑鳩が「開通褒斜通碑を連想するのでもあった」と紹介しており、その影響の下、書の原始的形態から試みられたものである。	①45×59cm ⑤江口草玄「作品互評」※資料三十八	⑤井上有一「習作互評」 「素に木子が躍如としている「懷」の旁は破綻だと思う。これの全紙面に及ぼす被害は甚大と見る。二三目壁に貼つて眺めている中に次第に平板になり影が薄くなつて来た。原帖を壁の上に掲げて暫く見る。そこで木子に、なぜ原帖の痛快味を取らないのかと聞いてみたくなつた。」

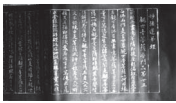
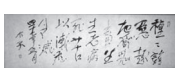
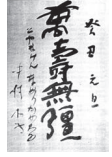
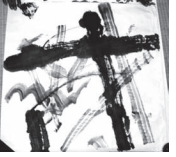
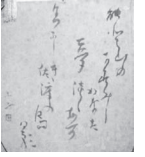
120	119	118	117	116	115
					
28-3-2	28-3-1	28-1-2	28-1-1	27-12-4	27-12-3
α 作品 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十一号… 墨人誌上展	(不明・六道) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十一号… 墨人誌上展	臨紀貫之書自家集切 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十号…仮名 習作	老子第六章 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十号	臨広武將軍碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第九号…習作 随意習作	臨龔宝子碑 昭和二十七年 (一九五二) 『墨人』第九号…習作
① 87×87cm ⑤ 大澤華空、森田子龍、江口草玄、所正直、水本酒遊、辻太、佐藤匡弘「誌上展 作品批評座談会」※資料四十三 ⑥ 台紙は赤色。 ⑦ 木子旧蔵写真。	① 34×68cm ⑤ 大澤華空、森田子龍、江口草玄、所正直、水本酒遊、辻太、佐藤匡弘「誌上展 作品批評座談会」※資料四十三 ⑦ 木子旧蔵写真。	① 半紙 ⑤ 森田子龍「習作批評 仮名習作」※資料四十二	① 65×34cm ⑤ 小川一翠、森田子龍「作品互評」※資料四十一 ⑦ 木子旧蔵写真。	① 半紙 ⑤ 井上有一「習作選評 随意習作」「廣武將軍碑、木子をよく知っているだけに、他と比較し順位を決めるのが困難だ。僕はやはり名前のない方が選び易い。この作、紙面をすつかり自分のものとして、隙のない自由な線が躍動し、生々としている。然し少々調子につて達者になりすぎではないか。この勢で進のは危いと思う。」「左」の字の長い線が構成上しつくりしないと見るは誤りか。」	① 半紙 ⑤ 関谷義道「習作選評 龔宝子碑」「柔軟な線のうごき、スマートな姿態、明るくのびやかな感じがする。」
126	125	124	123	122	121
					
28-5-4	28-5-3	28-5-2	28-5-1	28-4-1	28-3-3
臨劉懷民墓誌 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十三号…随 意習作	乱舞 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十三号	御暮弁冕「中」天 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十三号	『墨人』第十三号題字 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十三号	呉梅村詩 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十二号	島崎藤村詩「椰子の実」 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十一号… 墨人誌上展
① 半紙 ⑤ 江口草玄「習作批評 随意」「劉懷民墓誌の臨、筆毛をくじいて面白い仕事をしている。一寸うるささも感じられんこともないが底からソクソクと輝いて来る光を感じて好きな作品の一つである。」	① 20×138cm ⑤ 森田子龍「作品互評」※資料四十五	① 20×138cm ⑤ 森田子龍「作品互評」※資料四十五	⑥ 『墨人』第十三号の表紙構成を担当。	③ 基響鳥／声動／茶煙花／氣浮／木子山人書 ④ ⑤ 中村木子、津高和一、島本昭三、須田剋太、田中健三、「現代美術懇談会」二月例会 書とモダンアート」※資料四十四 ⑥ 黄色の包紙。	① 68×130cm ③ 名もしらぬとおき／しまよりながれくるや／しのみひとつふるさと／のきしをはなれてな／れはそまなみに幾月／もとの樹はおいやしげ／れる枝はなほかげ／をやなせるわれも／またなごさをまくら／ひとりみのうきねの／たびぞみをとりて／むねにあつればあ／らたなり流離のう／れひうみの日のしず／むをみればたぎりお／つ異郷のなみだおも／ひやる八重のしおじおい／づれの日にかくに／かえらん 木子かく／⑤ 大澤華空、森田子龍、江口草玄、所正直、水本酒遊、辻太、佐藤匡弘「誌上展 作品批評座談会」※資料四十三 ⑦ 木子旧蔵写真。

132	131	130	129	128	127
					
28-8-1	28-7-2	28-7-1	28-6-2	28-6-1	28-5-5
(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十六号	(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十五号	丹崖清壁 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十五号	良寛詩 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十四号	臨劉懷民墓誌 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十四号	臨宇治橋断碑 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十三号
① 52×88 cm ⑤ 井上有「作品互評」※資料五十五	① 17×25 cm ⑤ 関谷義道、井上一、森田子龍、江口草玄「組上一点 中村木子作品」※資料五十二	① 34×120 cm ⑤ 井上一「作品互評」「明るい華やかな作品だ。文句によくあつた表現をしている。楽しい作品だ。木子独特のほりり出された様な動きがよく生かされている。しかし少々いい気持ちになりすぎてはいないか。線の味にかわりすぎてはいないか。むしろ「丹」の字の調子で全体を通して、木子として新しいものにならなかったか。字と字がぶつかって窮屈になっていることも気になる。」	① 42×34 cm ③ 行々投田舎正是桑榆時鳥／雀聚竹林啾々相率飛／老農言婦来見我如／旧知喚婦遮濁／酒摘蔬以供之相对／云更酌談笑一何奇陶／然共一醉不知是是非／一九五三年四月木子山人写 ④ 中村木子「模作の跡」※資料四十六 ⑤ 岩佐麗堂、関谷義道「作品互評」※資料四十九	① 34×131 cm ④ 中村木子「模作の跡」※資料四十六 ⑤ 岩佐麗堂、関谷義道「作品互評」※資料四十九	① 半紙 ⑤ 江口草玄「習作批評 随意」「宇治橋断碑？スマートな宇治橋断碑の臨書。手筆共よくいっている。然しそれを支配する作者の奥のものが小さくはなからうか。」
138	137	136	135	134	133
					
28-9-4	28-9-3	28-9-2	28-9-1	28-8-BB	28-8-2
(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十七号	臨王羲之「閭極帖」 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十七号	酒鬼 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十七号	(不明・□□勇退) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十七号	(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨美』第二十六号	児沢 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十六号
① 半紙 ⑤ 関谷義道「習作選評 随意習作」「きびしさをねらつて、「日」はふくんである強さがあつてよいと思うが他の字は、表面的にながれたようで浅い。」	① 半紙 ⑤ 森田子龍「習作選評 王羲之「閭極帖」」「鮮やかに原帖の一面を掴み、白も美しいが、閭極帖と共に生きる作者の全人間的な燃焼、しめ上げの上にこの表現が生まれたかと思うと、ややその過程が弱いように思えてならぬ。というのは、底から強靱にびびくというよりは、表面でいららと話しかけて来るからである。」	① 69×132 cm ④ ⑤ 墨人会々員一同井上一、江口草玄、関谷義道、辻太、中村木子、森田子龍「作品批評会」※資料五十三	① 69×136 cm ④ ⑤ 墨人会々員一同井上一、江口草玄、関谷義道、辻太、中村木子、森田子龍「作品批評会」※資料五十三	⑥ ニューヨーク近代美術館建築工芸部主任アーサー・ドレッツクスラー依頼による展覧会に出品。	① 半紙 ⑤ 江口草玄「習作選評 古文習作」「部分的に見たり、又見た瞬間は何か雑なものを感じてあまり引きとめなかつたが、よく見直し見つめて居ると雑に思えた線も左程眼ざわりにならず、より一つの空気を出すことになつていいる。それだけに反面、無雑作のうちに出来たのかも知れない。／左上半は動かながつたし、それによつてひ弱いものを全体にまで影響させていると思う。」

144	143	142	141	140	139
					
28-12-2	28-12-1	28-11-1	28-10-3	28-10-2	28-10-1
(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第二十号	関関雅馬 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第二十号	(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十九号	臨西狭頌 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十八号	山色新 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十八号	(不明) 昭和二十八年 (一九五三) 『墨人』第十八号
① 46 × 69 cm	① 33 × 34 cm	① 17・5 × 28・5 cm	① 半紙／⑤ 大澤華空「習作選評 西狭頌」〔紙面一杯に濃墨で全力的な仕事が行なわれている。その追求とポリウムは今回の圧巻であろう、こうした仕事はこれで作者の意図は達せられているのであるが、これで更に深まりは出ないものかと考えて見る。実際再三、再四見ていると、初めの感激が次第に薄れて来た。作者は、それ充分承知してやっているから、ここに述べて見る必要もあるまい。ただ、隆の扁の堅画は、他の線に比し少し甘いと思う。〕	① 46 × 70 cm ⑤ 森田子龍「作品互評 中村木子」※資料五十八	① 47 × 53 cm ⑤ 森田子龍「作品互評 中村木子」※資料五十八
150	149	148	147	146	145
					
29-1-3	29-1-2	29-1-1	29-C	28-C-2	28-C-1
三本の曲線と二点による構成 昭和二十九年 (一九五四) 『墨人』第二十一号	(不明) 昭和二十九年 (一九五四) 『墨人』第二十一号 『墨美』第三十三号	(不明・墨口) 昭和二十九年 (一九五四) 『墨人』第二十一号	(不明) 昭和二十九年 (一九五四) 『新しい書道十二ヶ月』	蜜雲 昭和二〇年代後半	雲煙萬里 昭和二〇年代後半
⑤ 辻太「基礎造形部選評——三本の曲線と二点による構成——」〔木子は、こういう方面では手慣れた力を感じさせる。線にも滋味が感じられる。然し手なれた味だけでおしきれるものではない。それだけでは脆弱である。これは線のもつ味にもたれて、造形性を鍛えることがなし得なかつたのではないかと考える。〕	① 34 × 46 cm	① 45 × 69 cm	⑦ 篠田桃紅著「新しい書道十二ヶ月」の出版年が昭和二十九年であることから、これ以前に制作された作品。文字では無く、線の構成による。／ ⑦ 図版掲載のための版下原画を木子旧蔵	① 31・5 × 24・0 cm ② 個人蔵 ⑦ 篆書に隸意を用いて書かれている。図145と同様、線の途中が飛白のように飛んでいて、こうした作品は、墨の目を利用して制作されたとき氏が目撃している。紙の皺を利用したり、墨の目を利用して線に変化を採っていた昭和二十七年頃かと思われる。	① 34・0 × 34・0 cm ② 個人蔵 ⑦ 篆書に隸意を用いて書かれている。図146と同様、線の途中が飛白のように飛んでいて、こうした作品は、墨の目を利用して制作されたとき神威氏が目撃している。紙の皺を利用したり、墨の目を利用して線に変化を採っていた昭和二十七年頃かと思われる。

156	155	154	153	152	151
					
29-10-1	29-6-1	29-2-3	29-2-2	29-2-1	29-1-4
『墨人』第二十八号 （不明） 昭和二十九年 （一九五四） 第一回墨人展／ （二九五四）	鳥飛兎走 昭和二十九年 （一九五四） 第一回モダンアート フェア／ 『墨人』第二十六号	臨末伯望刻石 昭和二十九年 （一九五四） 『墨人』第二十二号	（不明） 昭和二十九年 （一九五四） 『墨人』第二十二号	（不明） 昭和二十九年 （一九五四） 『墨人』第二十二号	（不明） 昭和二十九年 （一九五四） 『墨人』第二十一号
① 70×70 cm ／ ⑤ 井島勉、吉原治郎、墨人会会員他「墨人会展を語る」※資料 六十六	⑦ 図131、148、149、153などと同様、図と地の問題を意識した書を模索したものだろう。	⑤ 江口草玄「随意部選評」「木子は紙面に墨をばらまいて行つてゐるが甘い感覚で、充実したものではない。筆の空転だけが眼につく。」	① 46×69 cm	① 22×96 cm	⑤ 井上有「随意部選評」「墨色を主にした厳しいものを志向するか、或は線性に重きをおいてナイーヴなものを目指すのか。前者としては研究が不徹底だし後者としては気がきき、すぎる。貪慾はいいが、その一瞬における自己は何かに徹すべきであり、少くとも徹せんとすべきであろう。」
162	161	160	159	158	157
					
30-8-BJ50	30-7-1	30-C-1	30-1-1	29-10-3	29-10-2
現代日本の書・墨の 芸術（国立近代美術 館、ヨーロッパ巡回） ／『書の美しさ』 昭和三十年 （一九五五） 原始	作品（A・Cのいずれか） 昭和三十年 （一九五五） 第一回墨人公募展／ 『墨人』第三十六号	作品C 昭和三十年 （一九五五頃） 出品展覧会不明（↓⑥ 参照）	作品A 昭和三十年 （一九五五） 第二回ゲンビ展／ 『墨人』第三十一号	（不明） 昭和二十九年 （一九五四） 第一回墨人展／ 『墨人』第二十八号	ニーチェ『善悪の彼岸』 昭和二十九年 （一九五四） 第一回墨人展／ 『墨人』第二十八号
① 133・3×97・8 cm	⑤ 井島勉「墨人展をみて」「中村木子の横長の絵巻物のような作品があつたが、あれだけの空間が必要かどうかを会場で考えてみたが、どう切つても切れないのでやはり必要らしいということはわかつた。そうはいうもの、あれだけの大画面をもう少しリスミカルに運べないものだろうか、仮りに全く造形的な仕事であるとしてね。ベタ一面というのも、過ぎかも知れないが何かそんなところもあるなあ。」／⑤ 木村重信「第一回墨人公募展表」※資料六十八／ ⑦ 木子旧蔵写真。	① 52・0×59・5 cm ／ ② 当館蔵 ⑥ 裏面に出品展覧会不明の出品表あり、「作品C」と記載。 ⑦ 図139、159に類似しており、ジョアン・ミロを意識した作品と思われる。※資料八十四	⑦ 図139、160に類似した、記号性を持った有機体の浮遊のような構成であり、ジョアン・ミロを意識した作品と思われる。	① 139×138 cm ／ ⑤ 井島勉、吉原治郎、墨人会会員他「墨人会展を語る」※資料 六十六 ⑦ 木子旧蔵写真。	① 91×69 cm ／ ③ 「たかい感覚の強さにはあらずしてむしろそのおぞくがたかい人間を作る／善悪の彼岸／木子」 ／ ⑤ 井島勉、吉原治郎、墨人会会員他「墨人会展を語る」※資料 六十六 ⑦ 木子旧蔵写真。

168	167	166	165	164	163
					
35-C	31-C-1	31-11-1	30-C-2	30-10-2	30-10-1
救 昭和三十一年代中頃 (一九六〇頃)	作品 昭和三十一年 (一九五六)	作品 昭和三十一年 (一九五六) 第二回墨人展／ 『墨人』第五十号	作品 昭和三十年 (一九五五)頃	抵抗 昭和三十年 (一九五五) 現代日本の書・墨の 芸術(国立近代美術 館、ヨーロッパ巡回) ／『墨人』第三十八号	(不明) 昭和三十年 (一九五五) 墨人推薦展／『墨人』 第三十八号
①75.7×106.0cm／②個人蔵／⑦文字も否定し、非文字作品を制作した墨人会だが、昭和三十一年頃を境に全員、「書は文字を場として生きるもの」として文字に回帰していく。その流れの中の一点。ただし、木子が墨人展や機関誌『墨人』で発表した最後は非文字作品の図166であることや、その後の図17(『品』)から考えると、墨人での活動を休止した昭和三十一年以降三十六年頃の間にかかれた作品と思われる。 ※資料八十四	①107.5×75.0cm／ ②個人蔵／ ⑦第二回墨人展で発表された作品と微妙に異なり、発表作の過程の一枚であろう。非文字作品の中で、この時期、木子がたどり着いた独自表現を窺うことのできる現存作。 ※資料八十四	⑦家業のため、木子が墨人会の活動を休止し、離脱していく前の最後の発表作品。井上有一の抽象表現的な非文字作品とは異なった、捌いた筆線の構成による木子独自の表現作品。	①104.0×70.0cm／ ②当館蔵／ ⑦図164と同時に制作された非文字作品だろう。この頃井上有一がエナメルで書いた影響を受けてのものだと推察できる。完全にデタラメではなく、書の運筆の運動性が残っている。	①132×99cm／ ⑦この時期、井上有一が「アパレルダケアパレロ、スベテラ否定セヨ、メチャクチャデタラメニ書ケ、何モカモクソクラエ、文字モクソモアルモノカ、線一本紙ヲ截レ、破レ」とエナメルを使って制作しているその影響を受けての作品と考えられる。	
174	173	172	171	170	169
					
38-2 (49.4・5・2)	38-1 (49.4・5・1)	37-6・1・2	36-4・1	36-0・2	36-0・1
山之口鏡詩集から 昭和三十八年 (一九六三) 『墨人』第二百二十五号 中村木子追悼号	久野麦銭宛六月五日 付書簡 昭和三十八年 (一九六三) 『墨人』第二百二十五号 中村木子追悼号	頌祝歌 昭和三十七年 (一九六二) 堀川会社報「銀嶺」 No.118	品 昭和三十六年 (一九六一) 『墨人』第九十九号	白雲悠々 昭和三十六年 (一九六一)	鈍牛 昭和三十六年 (一九六一)
③僕は来る日も／糞を浴び去る日も糞を浴びてゐた詩は糞／の日をながめ／立ち上る陽／炎のやうに汗ば／んだあ、／沖繩山之内膜／詩集から／癸卯六月／木子写	①葉書／ ③誰にでも読める、読ませる／と言う文字本来の目／的と文字発生からの色々／な約束、制約を受けつゝ、それから逃避しないで堂々／と受けて立ちながら然も／全身制約の縲の中で新／しい近代の書表現をな／しとげたいのが今の私の念願です／木子／久野大兄	③頌祝歌／ほりかわ／の川辺／に／生きる／蒲の穂／の／そだてば／榮／える／黄綬褒賞／贈堀川氏／黄綬褒賞／受賞祝賀／会／昭和三十七年／寅年／六月／大吉／木子道人 ⑤「還暦の思い出」※資料八十一	①半紙／⑤辻太「二字習作―品―評」「小さな半紙の中に大きな動きを盛り込むのは、並たいていの事では出来るものではない。久方ぶりのカムバックであるが、さすがに動きのおおらかさ、安定した力、にじみ出る何かの力をまざまざと感じさせるものがある。」／⑦文字の歪曲が激しく、力強く太い線で書ききついているところは、墨人会らしい表現となっていて、辻太の評もうなづける。	①135.0×32.5cm／ ②個人蔵／ ③昭和三十六年／白雲悠々／祝池田画廊新築／木子道人書之／ ⑦淡墨で悠々と書いているものの、既に墨人会的表現ではなく、筆に任せた表現となつていく。	②個人蔵／ ③鈍牛／昭和三十／六丑／歳／木子／道人書／ ⑦軽い筆触による表現。線の太細の変化が乏しく、墨人での先鋭的表現は影を潜めている。

180	179	178	177	176	175
					
47-9-30	47-9-② 1/4	47-9-① 1/4	47-5	47-3	42-1 (表裏)
紺紙金字妙法蓮華經・ 観世音菩薩普門品第 廿五 昭和四十七年 (一九七二) 個展(富山県民会館)	個展(富山県民会館) 摩訶般若波羅蜜多心經 昭和四十七年 (一九七二)	妙法蓮華經如来寿量品 偈 昭和四十七年 (一九七二) 個展(富山県民会館)	観音經 昭和四十七年 (一九七二)	南無最勝金剛準胝観 世音菩薩摩訶薩 昭和四十七年 (一九七二)	いろは歌 昭和四十二年 (一九六七)
①巻子／ ②個人蔵 ③表・いろはにへとちりぬるを／わがよたれそつねならむ うめのおくやまけふこえて／あさきゆめみしゑひも／せ す／丁未元旦試筆／員元居士木子題／裏・昭和四十二年／丁 未歳／贈患恩啓／木子道人	②個人蔵 ③表・いろはにへとちりぬるを／わがよたれそつねならむ うめのおくやまけふこえて／あさきゆめみしゑひも／せ す／丁未元旦試筆／員元居士木子題／裏・昭和四十二年／丁 未歳／贈患恩啓／木子道人	②個人蔵 ③表・いろはにへとちりぬるを／わがよたれそつねならむ うめのおくやまけふこえて／あさきゆめみしゑひも／せ す／丁未元旦試筆／員元居士木子題／裏・昭和四十二年／丁 未歳／贈患恩啓／木子道人	①31.0×100.0 cm ②個人蔵 ③種々諸／悪趣／地獄鬼／畜生／生老病／死苦／以漸悉／令 滅／四十七年五月／木子	①106.0×20.5 cm ②個人蔵 ③昭和四十七年下浣／南無最勝金剛準胝観世音菩薩摩訶薩／ 行者木子中村佐魂拝写	①色紙 ②個人蔵 ③表・いろはにへとちりぬるを／わがよたれそつねならむ うめのおくやまけふこえて／あさきゆめみしゑひも／せ す／丁未元旦試筆／員元居士木子題／裏・昭和四十二年／丁 未歳／贈患恩啓／木子道人
186	185	184	183	182	181
					
48-1 (49-4・5-3)	47-C-3	47-C-2	47-C-1	47-11	47-10
萬寿無疆 昭和四十八年 (一九七三) 「墨人」第二百二十五 号 中村木子追悼号	梁塵秘抄 昭和四十七年 (一九七二)頃	昭和四十七年 (一九七二)頃 (試作)	和歌一首 昭和四十七年 (一九七二)頃	瀧ほか 昭和四十七年 (一九七二) 個展(富山県民会館)	萬点亭主 昭和四十七年 (一九七二) 個展(富山県民会館)
①葉書 ③癸丑元旦／萬寿無疆／とやまけんなめりかわ大町／中村木 子 ⑥久野麦銭に送られた賀状。「墨人」中村木子追悼号の表紙 を飾り、図173、174とともに紹介されている。	①各34.0×81.0 cm ②個人蔵 ③ほとけは／常に／いませとも／現ならぬぞ／あわれ／なる ／人の／音せぬ／あかつきに／ほのかな／ゆめに／みえ／た まう ⑦蠟燭染めの手法を取り入れた作品、図181などとともにこの 時期の作品によく見られる。	②個人蔵 ⑦滑川期に線の構成を試したものであろう。墨人会活動時の 先鋭さは薄れ、構成も平凡で滑川に移つてからの時の経過を 感じさせる。しかし、墨色の違う筆線は、墨人会での活動の 一端が窺える。	①色紙 ②個人蔵 ③能登山の／可春みし／かなた／夢淡く／あ可阿／なつ 可しき／佐渡の／島／影／木子 ⑦木子が移り住んだ滑川の自宅から日本海は間近であり、海 に臨めば能登半島が見えることから、佐渡島を思い出し懐か しんだ歌であらう。※資料八十四	①色紙五点 ②個人蔵 ③右から「金石滝字也／滝／北陸游中／木子」／「□三□□ ／黙勝雷／文日黙勝雷／木子」／「滝」／「文日滝字也／滝 ／金石文也／昭和四十七年木子」／「文日滝也金石文也／滝 ／昭和四十七年十一月／於県民会館個展為出品／木子道人書」	②個人蔵 ③文日／萬点／亭主也／於県民会館／為個展出品／昭和 四十七年

三、調査の一区切りとして

中村木子を追って二十年、断片的であった木子の生涯と作品とを、ようやく一つに繋ぐことができた。

木子が墨人会を離脱しても、筆を折り、書から全く離れていたわけではなかったことは以前の調査から判っていたが、今回その原因が、家業の負債のことだけではなく、好況により時間が取れなかったという要因がまず初めにあったということが判明し、昭和三十二年（一九五七）に休会した時、本人は本当に家業が落ち着くまでの休会と思っていたのだろう。それが本人の思いとは裏腹に違う方へと転がっていき、筆を置くどころか、佐渡を離れるまでになってしまい、自分の思いとかけ離れていく状況に、書の革新運動について正に志半ばで無念だったと思われる。

これまでの調査で、戦前の翠軒流書風が確認できる《臨孟法師碑》（図1）から、桑鳩そして墨人会と変転し、実体化されていく木子の書風の変遷が繋がったことで、これまで漠然としていた中村木子像が明らかにすることができ、草玄と木子、戦後、書の革新運動に身を投じた新潟の二人の書人像をようやく揃って語ることができるようになった成果は大きい。

最後に、本稿執筆にあたり、滑川、新潟の中村両家、佐渡塚本両家をはじめ、所蔵家、関係者から御教示、資料提供等をいただいたこと、厚く御礼申し上げます。

（新潟県立近代美術館 専門学芸員）

【参考文献】

- ・『墨人』創刊号～No.225 昭和二十七年（一九五二）四月一日～昭和四十九年（一九七四）九月三十日
- ・「PTAだより」 両津小学校PTA 昭和二十八年（一九五三）九月十五日
- ・「PTAだより」第四号 両津小学校PTA 昭和二十八年（一九五三）十一月二十日
- ・『銀嶺』No.118 堀川蒲鋒工業株式会社 昭和五十三年（一九七八）六月六日
- ・本間守拙『無絃社の歩み その四十周年を迎えて』 昭和六十一年（一九八六）
- ・「自由かつ達前衛の「書」 中村木子遺作展」 新潟日報佐渡版 平成六年（一九九四）十月二十五日
- ・横山蒼鳳「中村木子 書の個性と革新に情熱傾倒」『越佐の埋み火』25 新潟日報 平成七年六月二十八日付（書籍化『越佐の埋み火』新潟日報事業社 平成八年（一九九六）
- ・伊豆野一郎「市長考え歩記（126）生き方」『広報りょうつ』No.391 平成七年（一九九五）七月十四日
- ・津高和ひとゲンビの作家たち 1950年代のモダンイズム図録 兵庫県立近代美術館 平成七年（一九九五）十二月九日～平成八年（一九九六）一月二十一日
- ・『戦後の書・その一変相江口草玄』図録 新潟県立近代美術館 平成八年（一九九六）十一月一日～十二月十五日
- ・海上雅臣編『書の解放とは 井上有一全文集』芸術新聞社 平成八年（一九九六）
- ・『日本的なるもの 書くこと描くこと』図録 岐阜県美術館 平成十四年（二〇〇二）二月十三日～三月二十四日
- ・『復刻版 書之美』上下 国書刊行会 平成二十五年（二〇一三）
- ・『ゲンビ 現代美術懇談会の軌跡1952―1957』図録 芦屋市立美術館 平成二十五年（二〇一三）十月十九日～十一月二十四日
- ・『没後20年 弦巻松蔭展―模索と創作の軌跡―』図録 新潟市北区郷土博物館 平成二十七年（二〇一五）六月六日～七月五日

【資料】 改行／で示す。また、早い頃の原文は、読点で続いているものが多いが、読点を句点に筆者改変あり。作品に対応あるものは、番号を記した。

※資料一 「応募作品評」(図55) 『書之美』第三十九号 昭和二十六年(一九五二)八月一日発行

河田一丘 「ピカソの言葉」よりの細線により表現された此の作は、清純無難なものを感じる。表装効果と相俟つて落着いてよい。此の表現のバックにある革命。それがどんなに素晴らしいものか、うらやましくも思う。／「如来神力品」眼がチラする。作者のねらいだろう。渋い表現であるが更にしつくりさが欲しい。／浅野五牛 (漢代木簡の臨)ネラウところは自から高い。それだけしみじみと味ひたいが、さて雑音になやまされる。意あまつて過ぎたるか、いささかコリすぎたかと思える。／関谷大年 (鐘のなる丘)すつきりとして澄んでいる。上品ではあるが小じんまりしすぎて大きさが少々乏しく感じた。

※資料二 「七点批評 応募出品者の相互批評―全作品中より七点を拾つて」(図55) 『書之美』第三十九号 昭和二十六年(一九五二)八月一日発行

有田光甫 「運筆のリズム感を基調とした」如来神力品にみられる傾向は、線質を時間的なものにおいて追求してゆこうとする点、井上有一氏と対蹠的な立場にある。情趣的な雰囲気において成功する代りに、知的な造形性の追求が足りなく、情的な甘さに墮する危険がある。「鐘の鳴る丘」は、氏がこの造形性に対して、新しく開拓してゆく熱情は汲みとられるが、成功作とは言えない。構成に新鮮さがみられるよりも、ゲテものに墮す危険性が感じられるのは、私独りであろうか。／柴垣九江 この作品をみていと子供の笑顔が浮ぶ。その笑顔がいたずら気の大きな眼が動く様だ。パウ・クレーの様な気分の作品である。彼は子供の世界と音楽と詩を解する人だ。余白の処理もよくきいて外部への響もおだやかだ。クレーを書で行くとこゝろ、書の新しい彼の世界が開拓されると信ずる。近時画壇の児童的な生命の純化の表現、アバンギャルト展にみるかかる新しい動向に、この展覧会に彼のこの作品を見るのが出来たのは大きなよこびであり収穫である。／安藤机賛 「鐘の鳴る丘」この作品をみていと、遠くから子供達の歌声が聞えてくるようだ。緑の丘に赤屋根の家が建っている。風景が思い出される構図はあまりにも説明的になつたからにはあるが、夢がある。この作品から次々と種々なことが空想される。非常に楽しい作品である。／村上翠亭 (ピカソの言葉)七寸四方位の雅仙紙に、恐らくペンで墨書されたのでしょう。無造作に書かれたようで、その実あれだけ大きく空を切り、字をバラ撒き、全体を明るく統一された力柄には敬意を表します。併しどうしても即興的すぎるという憾が残りました。

※資料三 上田桑鳩 「第三回毎日書展評」(図60) 『書之美』第四十一号 昭和二十六年

年(一九五二)十月一日発行

(前略)第三部に最も興味を持っていたし、又第三部に陳列してあつた中村木子、山本潮鶴両君の作品を米人が買約をして来たなどを見ても、少なくともセンスを持つ作品は認められるということとは証明されると思う。(中略)中村木子(第三部)六曲屏風の方は、淋しさを持つ線の感覚とはげしい運筆の勢からくる動きとのマッチを狙つたもので、淋しさの中に持つ強いロマンを感じるが、動きが少し強くて、融合しきらなかつたともいえよう。それよりも小品の堅幅の方が、少々キンキンした融けきらぬものを残しているが、清遠な美しさがあつて、この方がいただきたい。煙の立登るような感じで、楽しい夢を持つている。

※資料四 井上有一 「毎日展より―書的美会員作品雑感―」(図60) 『書之美』第四十一号 昭和二十六年(一九五二)十月一日発行

今まで、木子という男は、色の白いシャレた美男子だとばかり想像していました。ところが今度始めて会つて、ビックリしました。とんでもないあけつ放しの現実的な、私に負けぬ男でした。そこで、私も、氏の作品を考えなおさざるを得なくなりました。六曲、良寛詩。少々達者さが目につきますが然し、明るく、暖かく、澄んだ気分は、中々いいものでした。字々躍動して左へ左へと動いてゆく、而もその動きに対する抵抗も、自然さの中に考えられている。ただ、その抵抗が、終りの方で、破綻を生じたと思います。線質、少々味に溺れては、いないでしょうか。横額、蛙の歌。楽しく、明るく、親しみの深い佳作でした。私は、この方が好きです。(君の作と、僕の作とがなかつたら、第三部は成り立たなかつたと思うのは、己惚れだろうか。呵々)

※資料五 中村木子 十一月二十一日付け書簡 『墨人』五月号(改題第二号) 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行

上洛中は色々御世話になりました。／井上有一との三人話し合いの結果要略一報す。／一、奎星展には日展落選作品と銘打つて出品出来る様な実態なれば出品するも(これは不可能)他は出品もせず審査にも参加しない。門人としての人間的感情、任務(責任)協力等はなす。日展毎日展は無論不出品。／二、無言の中に不出品し、これによつて間接にしかも強力な抗議とし、機会を見て野党展を開く。／上田先生にお会いした時のお言葉／○君等三人の主張は正しいし、充分に判るし、又これが純粹であることも判る。しかし今一、二年様子を見たい。しかしこのことは、或は君等より自分(先生自身)が不純であることも知れないし、又人間として出来ていないことかも知れない。／以上の様な次第です。日展落選作を奎星展に出品せよとの話なれど明示しない以上三人だけは出品しない覚悟です。

※資料六 井上有二／江口草玄／関谷大年／中村木子／森田子龍 「墨人会結成挨拶」
『墨人』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

今回、私共が墨人会を結成致しましたことについては、先に一部の方々には葉書を以て御挨拶申上げ、また「書之美」三月号誌上に発表致しましたが、その後私共の行動について、書道界の一部には多少の誤解もあるやに聞きますので、ここに重ねて私共の意のあるところを些か述べさせていただきます。／今日、現代書芸術の前には偉大な未来が開かれようとしており、欧米の前衛美術家や国内の進歩的な評論家、美術家は、しきりに書の門を叩きつつあります。過日、墨人会同人一同、長谷川三郎氏宅にて、イサム・ノグチ氏夫妻にお会いして終日歓談致しました節にも、このことを極めて切実に感じました。長い間封建的な殻の中で惰眠を貪っていた書道界は、外からのこの動きに漸く動揺を始めた、考えられるのであります。東洋の一隅に長い伝統を守りつづけてきた書芸術が、世界的視野に於て、真に現代の芸術として更生し得るのか、それとも、進歩的な芸術家達にその粹を吸収し去られて自滅してしまうか、今や正にその関頭に立つに至つたということを痛感するものであります。／この時この事を考えますと、誠に一日たりとも安閑たり得ないのであります。墨人会五人の者は何れも魯鈍な者ばかりではあります、偶々この点に於て考えを等しくしていることが分りましたので、一致協力して、ここに、今までの一切の係累を放擲して、蹶起するに至つた次第であります。私共今回の行動は、一にかかる時代認識の上に立つものでありまして、他に何等感情的なものや政治的なものは毛頭ないことを、はつきりと申上げたいのであります。／私共は、先ず書をあらゆる因襲から解放することが、書芸術の革新、現代書芸術確立の第一歩であると、確信致します。そのためには、各人が一個の裸の人間に立ちかえつて、伝統の根元を把握することが根本であると、考えるのであります。／その実際の探求に当たつては、五人が五人別のことを考えているかも知れません。私共は唯その根本の態度に於て結ばれただけであります。／すべてはこれからであります。今、私共はこの仕事を押し進めんがために、自分達の環境を、既成の因襲を打破して純粹なものに整理したのに過ぎないのであります。私共はこのために、奎星会をも含むあらゆる既成団体から独立致しました。ただ単に奎星会に謀反した様に考えていただきたくないであります。当然、日展をも無視します。真に前衛的であるならば、既成の組織に反逆することは当然のことでありまして、既成組織に妥協をしつつ前衛に徹することは不可能であります。叛逆、抵抗——それは荊棘の道であります。しかし、この荊棘の道以外に、書の革新を成し遂げる道はないのであります。それは、幾多の東西の歴史の示すところでもあります。非難、攻撃、嘲笑、もとより覚悟の前ではありますが、また一方には、志を同じくする人々の多いことを信じて疑いません。現に、多数の激励文を諸方よりいただいております。／私共のグループは、いつまでも純粹を守りつづけたいと念願しております。ということとは、何も孤高独善を意味するのではなく、何等

政治的な行動をとらずに、あくまで純粹芸術家として行動したいということであります。かかる意味に於て、私共五人の關係もすべて平等でありまして、また各人の芸術は何等互に干渉すべきものでなく、個人の自由であります。勿論、墨人会の書風といった様なものは考えられぬのでありまして、各自思い／＼の道に進つてもおります。ただ根本の真実さに於てのみ、互に繋がるものであります。同様の意味に於て、書道界は申すに及ばず、広く各界の人々と益々交り深くしたいと願っております。また、私共のグループに同志として参加したい方のある場合も、それが真実なものでありましたならば、喜んで平等の立場に於て結ばれたいということも考えております。／以上拙い文にて意を尽しませんが、今後毎月誌上に何かと私共の考えているところを発表して、江湖の御批判を仰ぎたく存じております。何卒今後は従来より一層の御支援御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。／なお激励のお便りをいただきました多数の方々に対して、ここに深く感謝の意を表します。有難うございました。

資料七 中村木子 模索の跡「習作感」(図79～83) 『墨人』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

上京中上田先生の処へ伺つた事や長谷川先生の話やイサム・ノグチに会つたこと等色々頭の中に一杯になつていてすこしも整理出来ていないので筆を持つのはどうも心の中が騒しくて困つたが何しろ日限がぎりぎりなのでどうともならないままに課題の「廣川王」から先に書いてみた、ところが六朝人の意欲的な力のバリパリした所がそうでなくとも強く響いてくるのに何しろ帰国したばかりの整理出来ない頭はずきんずきんと響いて来てどうしても沈まない、やはり心の落付いた時でない駄目だ。最後の一枚に「令永絶苦」(図82)をうんと主観的に原始人の人間的眞実にのみ自分の心をもふれたいとそれのみを求めて書いて見た。／そこでこんなことでは後で創作する時にもかなわないと思ふのでうんと懐の大きいねばつこい、そしてまた一度もろくに習つたこともない「瘞鶴銘」(図83)を掴んで以上の気持でかいた、何しろこの碑は長江の下流焦山の麓にあつたのが崖下の水中に落ちて康熙年間までそのまゝになつていたので漫漶が甚しく為に頭の中が整理出来ない時はこんなのを習いつつそれに没入した方がよいと思つたのでしばらくこれに専念して見た。(隨意習作はその時のもの)その中にだんだん心持が落着いてすべてのテクニクをはなれて一切を無技巧に人間そのまゝを表現したい気持で一杯になつてきたので机の上の法帖など机の隅の方へつみこんで「童心」(図80)と「真心」(図81)を製作した。この中のどれを雑誌にのせるか判らないが兎に角この二枚を今月の自分の作品の批評当番の森田さんに送ることにした。二三十枚の中から自分で掴んだものだが前述の意図でかいた為いづれも構成に欠点があつて何回となく送るのにためらつたが思い切つてそのまま送ることにした。／そこで今度はうんと構成に心をくばつて試作した。

「為政命宮斬大年」(図79)を古銅器の文字をデフォルメして組立て、所が構成丈ではどうしてもボリウムがとほしいので墨色と線質とリズムによりこの欠点を補うことにして色々と組立ててみたのがこの作だ。然しこうしてみるとやはり一方にうるさいものがあり又一方ではボヤケて強調されない所が目について仕方がないもつとも整理すべきだつたと思つています。筆をおいて自分を省ると又々始めの頭の中の昂奮が生そのまま渦巻いて来た。今度の上京の感激は誠に大きいものがあつたのだ。遅いからもう休まう。明日は国分寺へ国宝参観だ。明日から又大きい波が頭の中で逆巻くであろう。

資料八 関谷大年 模索の跡「木子への手紙 大年より」『墨人』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

——作品と共に——／木子兄／モダンスタイルを着たハイカラ書／書の古典の形式のイミテーションを排撃しながら、絵画の様式やテクニクのイミテーションに浮身をやつりしている絵画追隨書。／奇形をのみ、変つた形式を生み出すことを創造と心得て面白がつている奇形書。／等、等、等／このような疑似現代書患者が流行し出した様な気がしますが如何ですね。／どうも利巧でも、小利巧を目ざす人が多くて大利巧を目ざす人が少ないのが淋しいことですね。／老子いうところの／「大巧如拙」「大智如愚」／こうなりたいたいものですね。／逆もまた真なりということが、このことにも通用すれば「愚は大智のごとし」「拙は大巧のごとし」となつて、さしづめ僕など浮び上るんですがね。どうもこのことは、逆もまた真なりは通用しないのが残念ですねハハハ、／やつたり「愚は愚の如し」が本当のようですね。愚は愚なりの仕事をするのが真実で、愚が大智のまねをしようと、とんでもないことになりまますからね。／今月の僕の作品は、愚は愚なりな自己に徹する探求の所産です。佐渡の荒海にいどみかかる調子で、私の人間を、私の分身のこの作品を荒療治して下さいね。／作品一「墨」の古文を素材とした作品。／墨人会の名が龍安寺の石庭を眺めつつ生まれた時から「墨」の字が自己を表現する素材としてふさわしい様に感じられて、それ以来ずっと試作を続けています。またどうも自分とピッタリする作品が生まれませんが、まあこの作品があわれな、貧しい姿ではあるが二月二十五日の今日到りついた僕の姿であることも本当なのです。／作品二「養真」／うまさ、智慧、外聞、そんなものを全く排して、本当に凡人な人間になりえたらとつくづく思います。／この作品もハイカラでもないし、新しいスタイルでもないかもしれない。しかし僕の様な要領の悪い、ぼやつとした人間では、きどつたり、うまく見せかけたりなんという気の利いた利巧な業はとも出来そうにもないし、又したいとも思わないですがね。／外を見廻していたらきりがなしとてもやり切れないでしようからね。／お暇な時にうんとぼやつとした地蔵様を見つけておいて下さいね。前にもらった地蔵様大事に可愛がっていますが、一寸利巧すぎる様ですからね。た

のみますよ。

※資料九 中村木子 作品互評「大年への返事」『墨人』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

えらい劍幕の御手紙を見せていただいて、心から愉快々々、形式の上での書や画を否定して自己の本質的探求は賛成です。形式の上での仕事は遊芸ですよ。所が書にしる画にしる茶にしる社会の概念の上ではこの遊芸が道と名付けられて通用しているのですからね。／本来「無」であり「空」であるべきものが「型」として「様式」として情性のまま続られて来た所に創造が生れなかつた最大の原因があつたのではなからうか。／「己」が「大智」であるか「大愚」であるか／「私」は「己」自身が判らない、「私」とは何であるか／「私」は悩み煩悶する／「私」が知り度い、「私」をつかみ度い／「私」は「自己」を求めての行路だ。／老子は「無」なりと云い、釈迦は「空」なりと照見する。／しかしこれが感得出来たら大した物ですよ。／結局私達は「空」とか「無」とかを只管求めてさまような行路人でしかないのですよ、とするとやはり私達は少なくとも智者や賢者ではあり得ないですね。／そうですね。やはり兄の言われる通り愚ですよ。／大愚！大愚ですよ。鈍愚です。／作品「墨」先目有一の処で見せていたいたものよりはやはり光つていますね、よく整理もされているし神経もよく行きとどいていいる。だが力動的な線が餘りにも白に対しての役割が少なすぎませんか、これは線が生硬であることと速度が均一であることに原因しているせいではなからうか、しかしこう云う試みはぐんぐん打進むべきでせう。それは自己の心性を高める榮養剤ですからね。／作品「養真」／「愚は愚なり」のあなたの御言葉ですが、／「愚」が「愚」になり切れたら御言葉通り大智ですがね、／「愚」が「愚」になり切れない悩みですよ。この作も失礼ですが愚を自覚しながら愚になり切れない人間の姿ですね。孔子は「心に随つて矩をこえない」と言つていますが、「矩をこえない」こともむづかしいが「心に随つて矩をこえない」所が本当にむづかしいですね、矩を意識しないのですよ、ゲーテは詩の中に「星の運行は無意識の中に、そして自由に動いているが、それは一つの軌道よりは外れてない」と言う意味なことを述べていますが、やはりとらわれですよ、感覚ですよ、これ等の強敵に打勝つことが、大愚になり切ることであり己を見出すことですね。あなたの作品批評のつもりでかいたのが逆に自分自身にいい聞かせる反省の言葉となつてしまいましたよ、今荒海の真只中、「おけさ丸」の船中にてペンを執つています。後二十分で新潟に着くでせう。

※資料十 森田子龍 作品互評「木子の作品」(図79)『墨人』創刊号(改題第一号)

昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

○「為政命宮斬大年」(図79)／先日、長谷川先生のお宅で、イサム・ノグチ氏の前で広げられたこの傾向の作品が、まだ印象にあります。頭にあるこの作に比べる

と、この作流動するものに乏しく、少し散漫になつてボヤケた様に思える。線の響きはこの方が高い様だが、目立ちすぎる線があつて、白を生硬なものにしたようだ。何にしても、面白い方向への着眼である。この作者の特色の生かしやすい所だと思ふ。安易な横移しでもなく、頭で作つた新傾向でもなく、人そのものの中から生まれた創意を大変貴く思います。／○「童心」(図80)「真心」(図81)／以前、この作者の制作態度に満たされないものを持つていたのは正直なところだが、これは全く私のあやまりであつて、木子は木子であり、子龍は子龍に外ならぬということが自分にもはつきりとして来て、明るくうれしい氣持でいます。この作者のいよいよ快調に作品を押し進め、人と一枚の境に近づきつつある様に見受けられて美しい。この二枚共にほのほのとして、しこりを残さず、楽々とおさまつている。おさまるといふ言葉も仰山すぎるかも知れない。楽々とおさまつていふか、無為の境の中に放り出されてあるといつた方がよいかも知れない。よい境涯だと思ふ。／私に選択せれば、やはり「童心」をとりたい。私の好みかも知れない。沈殿するものが多い様に思える「真心」は明るいさが少し空虚な感を受ける。

※資料十一 中村木子 「習作批評」 『墨人』創刊号(改題第一号) 昭和二十七年(一九五二)四月一日発行

(五十名の批評省略)／後記／井上編輯長よりの厳命で選をした、一、二級の諸君より三級以下に良い物があつたし今度は全く級に關係なく選したため割合下級の人達の作品が多く写真にのる事になつてしまつた。始めは作品に対して感想をかくつもりなのをいつのまに作家その人に対する忠告やら希望になつてしまつて本当の仕事から逸脱してしまつた、そして自分で氣がついて出品の諸君に氣の毒な申訳ないことをしたとわびながら、『自分らしいことをしたわい』と一人でふき出してしまつた、そんなわけで出品の皆様は心から御詫びします。

※資料十二 中村木子 「昨夜のラジオから」 『墨人』五月号(改題第二号) 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行

私は浪曲はろくろく聞いたこともないし何も知らない。無論その歴史とか何かは関知していないが、昨晚NHKの第二放送の折広島の何とか言う劇場の楽屋に松平國十郎さんを尋ねた楽屋訪問の放送を耳にした。それにはこんな会話が取りかわされてゐた。／『松平さんの浪曲は雲調と言つて桃中軒雲右衛門師の節廻しが多分に取り入られてゐる様ですが、今の若い人々には理解されずあまりもてないでしやうね』と言う質問に應えて／『いやそんなことはないと思います。少しでも浪曲に興味を持つ人々になれば若い人だつていいものに対してはたしかに喜んできいていただけると信じています。雲右衛門師は浪曲を寄席から劇場へ進出させた芸豪でありあれを生み出すまでの苦勞も多かつただけに私なんかレコードを聞いていてさえ鳥肌

になる位の大きな力のある芸で私はこのよさを取り入れ度いと勉強していますが、とてもそばへも寄せません。が若い人達にもその中にもいいものはいとしてきつときいていただけるものと思つています。／私はこの会話を聞いていて松平さんもえらい人だなあと、感心しましたよ。何しろいづれの社会でもいかにして自分の人氣があたりちやよばやされるかと言ふことのみ心がけて俗世に阿諛して左顧右盼、己自身の人間性も芸術も省みず人氣取りに汲々としている時に、自分の真実一路に生き抜き、必ず判つてくれる時のあることを確信して然も楽屋に雲右衛門師のレコードを持込んで日夜勉強している松平さんの様子をラジオを通じてその片鱗を伺つて本当に感銘しました。／私達が作品する時も一番先に考えるのは、どうしてほめられる様にかけるか、どうして旨くかけるか、どうしたらちやよばやされる様に作れるか、と言ふ氣持ちが頭を上げてきて私は常にこんな不純な氣持から一日も早く解脱したい、世俗にかかわらない、自分自身の本當の作品を確信を以てかきすすめ度いと念じつつそれら修行に専心しているのですが、仲々言うことや考えることはやさしいが実行は困難なことです。／こう言う態度、この氣持がぬけないといふいろいろな審査員におべつかをつかつたり、又審査員になつて人氣を出し度いために、くだらぬ様な作家でもそれが世俗的にいい位置にあつたりする人々の所へ日参して御機嫌をとると言う様なことがおこつて、結局作品自体はそれらのくだらぬ人々の機嫌をそこねない様な、つまらぬものしか出来ないことになつてしまふのです。／それでもその機嫌取りの作品が審査員と言う様な位がついてしまふと、他の人々は今度はその人の筆まねをいかに上手にして氣に入られ様としてその作品の良し悪しを正しく判断する暇もなく、これが絶対至上のものだと頭からきめこんでしまつて一生懸命にまねようと努力し、本人もそれで得々としてゐるし、これを見る人々も、『これは立派だ』『上手だ』とそれこそ文字通りテンヤワンヤと騒ぎたててゐる仕末で、結果はどこにもいい作品は生まれてこないし芸術の進歩どころか書以外の芸術家の人々からしてんで問題にされなくて書を芸術として日展の仲間入りすることは御免だとか何とかいわれて行く行くは芸術としての書を自滅すること以外何物もないのです。よく日本人は猿まねが上手だ、と言われてゐるがこれ位はたで見たら滑稽なこととはなからう。／かの絶世の美人西施が、まだ其の郷里に居た頃、癪を起して眉を蹙めて居たら、一層美しく見えたので、其の村の醜婦どもがこれを真似して各々胸をかかえ、眉をひそめて西施きどりで歩いた所が、醜い上にも醜さを加えて二タ目と見られぬ有様であつたので、其の村の金持は門を閉じて出でず、貧人は妻子を引き連れて其の村を去つた。彼等、醜婦どもはただ西施の面上に於いて眉をひそめることの美しいのを知つて、其の美の由つて来る所を知つて居ないのだと言ふ話が、老子が孔子の遊説は些かの効果なく富人は門を閉じ、貧人は之を去つて走ることをかいた莊子の中に出てゐるが自分が褒められたいから、ちやよばされたいから、世間の人にももてたいからと無批判に、その美の由つてくる所がないので外部から冷靜に見る人には、

沈んでそこからこみ上げるものがあるかも知れないが、私には私の作品を見定める事の出来ない悪いくせがあるので此点も井上君の慧眼にお委せする。

※資料十六 中村木子 「フ란ツ・クラインの作品に寄せて」『墨人』五月号(改題第二号) 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行

私がクラインの作品に始めて接したのは墨美の創刊号です、そして長谷川先生の解説を通して彼を知ただけで、其後昨年十一月京都の森田さんの処で二回目に彼の作品を見せていただき、更に本年二月に入つて長谷川先生を辻堂に訪問して三度彼の作品に接することが出来ました。私は彼を知らないが、彼の作品に接する度に彼の作品に好感がもて、更に私に大きな感動と喜びを与えてくれます。／正直のところ私は書作家として今までの書に対して書の観念を根源的に反省し革新が行わなければならぬと考えていましたが、この私の心の片隅で起つたささやきに、決定的な行動の力を与えてくれたのは彼の作品でした、彼の作品、第一に彼はその作品に、「東洋の芸術」「日本の書」として観念の上で無条件に尊崇していた日本の書家達に、「東洋の書」の美を、書を知らない彼が、海の彼方から、送られた彼の作品に大胆にそして真実に表現されているからです。／長谷川先生は「書画一致」と墨美創刊号で一寸のべていられますが怠惰な保守退嬰的な日本の書の大家先生の中で、彼の作品の中に書的な美を見出ししてくれる人は本当に勘だらうと思ふと情なくなりします。／「白と黒」「直線と曲線」平面の上に並べられたこれらの素材の比例に表現される美しさ、それは書の古典に見られる美しさであり真実に生きる人の美しさであり、東洋にも西洋にもあらゆる世界の人々の上にもたらす美の福音です。／日本の書の先生が此の作品の美を否定して、六朝や平安の書の美を讃仰するならば、これらの人々は書の観念の情性の上にのみ物を見ようとする人々でありやがては日本の書も、東洋の書もその文字性以外の一切を亡す人々でありましょう。／若い世代の書作家は此のクライン氏の作品から新しい角度で書の美を見出すであらうし、更に書的な日本人、東洋人としての生活の上に新しい書の美を創造するであらう。兎もあれ私は彼の作品に心からなる讃辞と、一作毎に見られる整理され、単位化されて行く彼の作品に彼の人間的な成長を喜ぶと同時に次の彼の作品を大きな期待を持つ一人である。

※資料十七 井上有一 「作品批評」(図84、85) 『墨人』五月号(改題第二号) 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行

中村木子／木子は近頃一つの鉅脈を掘り当てた。表紙作品(図84)に見る傾向がそれだ。木子の人間性が、極めて自由に、表現され出した。解放されたと言った感がある。蓋し、これは今回の環境整理に因るものであらう。嬉しい。木子よ、掘れるだけ掘ってみろ。一図に掘ってみろ。見向きもせず掘ってみろ。この機会を逃してはならないのだ。／掘り進む中に、もつともつと厳しい造型性を把握すべきだ。いや、

きつと把握するだろう。把握するというよりも、発見するといった方がよいかも知れない。今のままでは、まだ甘さがとれ切っていない。追求が緩い。もつと厳しい追求に苦しめ。苦しめということは、決して苦しさを表わせというのではない。あく迄このままの凝滞のない楽天的な明るさのままで、心の奥で苦しめ、と言うことだ。木子なら、それが出来るのだ。／表紙の作品、僕には何が書いてあるか分らない。恐らくどんな古文の研究室にも分るまい。分らなくてもいいのである。これを見て、読めぬからと言つて軽蔑する人があつたら、その人こそ軽蔑すべきだ。読めぬ方がいいというのではない。読めぬものも立派な書となり得るのである。我々は、我々の表現範囲を自ら狭くする愚をとらないのだ。主義に把われたくないのだ。さて、このモジャモジャ正にモジャモジャだ。右下方四分の一が極めて面白い。構成も面白いし、線質も書の線としての類型化から脱却している。——我々は線質というものについても、何か類型的な見方を知らず知らずの中にしてはいないであらうか——。右上部左下部には、まだ溶けきらない形式的なものが、が残っている様に思える。／次に、「妙観察智」(図85)。残念乍ら僕には、この四字の意味はよく分らない。分らない乍ら、感じたことを言えは、これは中途半端なものだ。生ぬるいし、追究が足りぬ。不自然なところが眼につく。勿論、所謂新らしがりやの新傾向屋さん程の不自然はないが。豊かなふんわりした量感を出そうとしていることは分るが、それが見えすいている。／然し、じつと見てみると、矢張り木子ならではのせぬいところがある。

※資料十八 井上有一 「古典研究 宇多天皇宸翰周易抄 習作批評 中村木子」(図86) 『墨人』五月号(改題第二号) 昭和二十七年(一九五二)五月一日発行

線は柔かく、形も楽だ。茎の下の方の横画が、ちと気になるが、然し全体から、周易抄の気分をはつきり感じる。木子としては、素直に原本に従つて、写実的だ。試みに、原本を出して、同一箇所を比べて見る。比べられては堪らない。矢張り、違う。テンデ問題にならぬ。虎と猫程違う。猫が盛にニャーニャー言っているのに、虎は悠然としてゐる。……木子、如何。／周易抄を習うということは、宇多天皇の精神に触れ精神に学ぶことだと、僕は思っている。古典研究とは結局、そういうことではなからうか。

※資料十九 「作品批評座談会(木子部分)」(図88、89) 墨人会研究部員十三名 昭和二十六年五月四日 『墨人』六月号(改題第三号) 昭和二十七年(一九五二)六月一日発行

有田 次は中村木子の「天上大風」(図88)と「さくら」(図89)の歌の作品を。／千葉 一本の線を書くのに三、四本の細い線を使つたところ面白い。／大澤 創意と着想を買う。／福井 だけどね、前に一度上田先生の作品にこの様な線のものが出たと

思う。「半酔半醒」のあれですね。勿論あの線とも違うが、でもあれを想出したのです。／森田 そうしてくると之が非常に朗らかだと言うことが思えて来る。／福井 明るいですね。／米田 さわやかな、リズムというものを感ぜられると思うのですが、もう少し底に沈むものがあつたらいいと思う。／福井 それはね、最初見た時何やらもの足りない感じを持つたですがね。／森田 今言われた様なことか犠牲にしても朗らかさとか、軽さとかそういうものに徹し様とし、そして思切つてここ迄来たということは矢張り木子の身上だと思ふ。大の字の横画——風の第二、第三画あたり骨を抜いてラクラクとしているが、外に多少キンとした様な又単純な線が眼について白のふくらみの点で不満が出来てくる。／千葉 この作品ということでなしに木子という人を考えて見るのに、同じ様に書を追求しながらその考え方も態度も私など非常にへだたりがあるように思う。私自身率直にこういう一連の作品に対して不満も覚えるし現実に生活して人間としてあき足らない。もつと切実に生活と直結したものが生れ出るのが本当のものではないかと考えます。／井上 ああ、そうそう木子から作品についての原稿が来ていましたちよつと紹介しましょう。／一、さくら／春！さくら！聞くだけでも心が、浮き浮きして来ます。北国の春はまださくらは咲きませんが、あと一週間か十日でしよでしょう。だが、山の色も野も山も、海のうちねりにも春の色が濃くなつて来ました。／子供の唱う『さくら』の歌が、春をたのしんできこえます。今日は町の祭りで地方の鬼太鼓のはやしが遠くからきこえて若い人たちもいせいのいい大八車や波に千鳥の染抜ハッピを着て一ぱい気嫌のネズ鉢巻で若人の春をたたえている。春は人の世に活力を与え創造の力を生ましめる。私は春がすきです。それは生身の人間の生きる姿だ、そして夢の様な淡い甘い春の交響曲は又たくましい意欲的な人間の否宇宙の生命力の息吹だ、さくらの歌をテーマとして春の夢と春の力を表現したかつたのですが線をきかせすぎるといらいらしてくるしロマンを主体としてかくと甘さだけになつて来るし、兎に角こんな仕事は私の一番勉強せねばならぬ大事なことに思えるのもつともつとこんな仕事で追求して見たいと思つてゐます。／二、天上大風／見るからに素朴なそして気楽なものと云つて道德経中より半切十枚ばかりかかいて見たのですが、とても常識的な見えてくれ式なものしか出来ないの、『さくら』の二部作としてうんと構成も単純化して線の色彩に重点をおいて春の天空を良寛とはもつと異つた気持で書いて見たのです。速度が色彩に影響するのでそれで一気にやつてしまふと構成がバラバラになり、其方に気がとられると色彩が平坦になつてしまふし、それに春の天空に大きな口をあけて存分に腹の底から笑つて見たい様な気持がしたのでそれ等の気持も作品に表してユーモアな情緒もちよつぱりと加えて気楽な楽しみの多いものとか心がけたのですが本当にこんなのは所謂書の技術的な力がないとやはり駄目ですね、もつとその方も真剣に勉強しないと、とてもこんな作品はかけないと痛感しました。もう少し力があつたらもつと表現もよくやれたにと意足れど技足らずと言ふところでは。

※資料二十 中村木子 「古典研究 枯樹賦」(図90) 『墨人』六月号(改題第三号) 昭和二十七年(一九五二)六月一日発行

うら淋しい木がらし／かすかに透き漏る秋の日ざし／小面^{コツツ}ににくいまでに表情たっぷりだ／然も髪の毛をつくくほどのすきさえ与えない整理ぶり／美しい、実に美しい／そして繊細な神経が心憎いまで巧に表現されている／書の最もすぐれた時代に／法から出て新しい法を創造した一人／それは、彼は常に義之の精神を把握していたからだ、私は、どうももびつたりすきになり切れない。／以前の物の様に法以前の色々な古典の様に／しつかりと抱きしめていた様な、／気になれない、それは／あまりにも立派すぎるせいかしら？／あまりにも技巧的でありすぎるせいかしら？／然し、その技巧も鼻につく様な技巧でなく／本当に冲融されているのだが／何となく私は寄りつきにくい／こんなことを言うと言書家の人は／私を愚なやつと笑うだろう、私は／笑われても仕方がない、私が愚だからだ。私は／所謂仁義もきらいだ 法もきらいだ／むき出しの人間 赤ん坊の様な、そうだ／赤ん坊の心に帰りたい／法帖をみつめて、かいた かいた かきまくつた。／幾十 幾百 反古のはんらんの中で／やつと見出した もみくちやになつた一枚／これが 私のみた、いや私の夢の中でみた／私のすきな枯樹の習作です、赤ん坊になり切れない／あわれな、みすばらしい／愚かな おとなの習作です。

※資料二十一 中村木子 「模索の跡」(図92、93) 『墨人』七月号(改題第四号) 昭和二十七年(一九五二)七月一日発行

(作品二)(図92)古文に依る紙面処理の続きです。／七字、八字、どうしても整理しきれないので今日はうんと字数を少くしてみました。締切が廿日なのに十八日にかいたのですがどうしても余りにもミスボラしくて机の上で毎日ニラメッコして日を送っている中に今日有一より手紙が来て草玄の分は着いた、実にスバラシイとの報せで最早あきらめてこの文をかいているのです。／有一は鉞脈を掘りあてたと言つてくれたがいくら掘つても水も出ねば金も出ない鉞脈ですよ、／今日も知人の物持ちの処へ出かけて雪舟の山水と文晁のボタンを見せてもらつたが益々筆を持つのがいやになつてしまふ。どうして俺はこんなに俺を苦しめるものだらうか、掘つても掘つても掘りだされない鉞脈に自分の一生をかけてコツコツとシャベルを運ぶ鈍物木子の姿です。／(作品二)(図93)／文字からの縄目をのがれてうんと自由に思つて作品を追求してみたのです。殊に曲線へのリズム活動を主軸にしてみました。が御覧の通りの笑われ物です。／うまくかこうとするから出来ないのだ、／お前は馬鹿だ、焼きなおさねばならぬのだ、／なぜ馬鹿なりの馬鹿作品を出来ないか／自分が自分の耳元でささやいている。判っているのですよ。それ位のこと、私は答えている。／それが判つていながらその通りかけないのです。／本当の馬鹿ですね、いやその本当の馬鹿にもなり切れないのです、アワレな馬鹿の寝言です。

※資料二十二 中村木子「習後感」(図95)『墨人』七月号(改題第四号) 昭和二十七年(一九五二)七月一日発行

家廟碑『芸術的書道には生熟の二道がある。熟とは発達の意味で、生とは未熟のことであるが顔真卿の書はこの生書に属する大家である。王羲之の書にも姨母帖以外には生書に属するべきものが少い程であるから、其他の大家は推して知るべきである。顔真卿は此点が尤も尊いのである。』と天来翁は魯公の書について述べています。特に家廟碑は父廟の為書いたと言え七十二歳の世俗を超越した人間的な体臭が、ひしひしと肌にくらびてきます。嘗つての大忠臣、大猛将も最早やこれらの鋭鋒の一切をふみ越えて円融無碍の人間魯公が童心のそのままに清く、純な、素朴な、明るさと和を以つてこの碑を見入る人々を抱いてくれます。／私の習作、果敢に勇を鼓舞してこの人間性に肉迫したいと習つたのです。そして原本と見比べては貧弱な自分に愛ソがつきそうです。／彼の愚、彼の生が、如何に偉大な愚であり強靱な生であるかが習えば習う程ヒシヒシ骨身にこたえてくる前から枯淡な人間性の表現、然も枯樹の様な技巧的なものでなく良寛の様な枯淡さを色々とやつて見た私は今この碑を習つてズ太い荒けずりの豪胆さにふれると貧弱な自分等はふつとんてしまひそうです。／今月の墨人に有一ががいてる様に上田先生に心臓が強いと言われたが家廟碑にかつたら木子の心臓を持つてても歯が立たない。当分これを続けて習つてみたいと思つています。しかし人間の習練が続けられなければやはりこの碑には打ち勝てまいでしょう。／早く堂々と四つに組み合われる様名実共に心臓を強くしたいものです。

※資料二十三 江口草玄「作品互評 中村木子」(図92、93)『墨人』七月号(改題第四号) 昭和二十七年(一九五二)七月一日発行

とに角美しい。豊かなものを持つてゐる。でも今回の作、僕には何としても物足りない。先月の表紙作品ほどの本当の自由さとか、知的なものを含んでの奥にひそんでるたくましさや欠いている。——大きなことを言えない、僕の今月の作も又然りなんだから。でも一言だけ自分自身へも聞かせる言葉としても書く。——こんなことでどうするんだ。唯の軽い遊びじやないか。／部員の作品と比べて見ても実に影が薄い。でもまたそれだけに木子は苦しんでるとも言える。／そして苦しめば苦しむほどに表れるものはこの様な本当に楽天的なものになるのだとも言えまいだろうか。これが又木子の木子たる所以なりだ。木子や以て如何となすか。

※資料二十四 木子呆人「模索の跡」(図97、98)『墨人』八月号(改題第五号) 昭和二十七年(一九五二)八月一日発行

作品A(図97)／こんな制作態度であるのだろうか？／あれこれと思案し、試作し／もたえ苦しめ、その結果は／あれも駄目、これも駄目、結局／何にも残らない、スッ

カラカンです、／良寛詩をかいたら、良寛が目の先にちらついて、ぬぐつても、ぬぐつても、白昼夢の様に、／つきまとつてはなれない、／もがけばもごく程しかりと、／瞳にくつついて私の自由を奪う、／古典の偉大さと、自分のみすばらしさが／……ああ、ああ、いやになつてしまふ、／みにくい黒と、うつろな白のかたまりです、／作品B(図98)／α部作品と思つて作つたのですが／別の一作がどうしても出来ないで、こちらへまわしました、私の心の鬱憤のはけ口です、心のなかのやややをそのまま紙にたたきつけたまです、／どうしても作品出来ぬ私はこんなにしてうさばらしてもして見度くなるのですがいらない筆を使い過ぎる為にどうもそれすら出来ないのです／どうせ何も出来なくて四苦八苦しているのだから、正直な僕の苦惱(ミスボラシイ)でも見ていただき度いと勇気を出すことにしたのです。

※資料二十五 中村木子「作品互評 森田子龍」『墨人』八月号(改題第五号) 昭和二十七年(一九五二)八月一日発行

森田さんからの私信には握りつぶして発表しないでほしい様なことがかかれてあったので、どんな作品かと広げて見るとこれだ、彼余程自身が好まない作品のようだ。所が僕はこれは森田氏の為にどうしても発表しなくてはならない作品だと思ふ。私はこの作品に森田自身の大きな生長を見出して喜びに堪えないからだ、以前上京した時長谷川先生に子供と大人の作品について伺つたこともあつたし又上洛の際は森田さんと二人で井島先生に人間が先か技術が先かについて教を乞つた。テクニクだけで芸術は生れないが近頃の小巧巧な人達の中にはテクニクに見えないテクニクが生まれて来た様だ。そして彼等は口に芸術の原始復帰等盛んに口にしてゐるがこれらの意識され意識しながら製作することは原始へのイミテーションでしかあり得ない筈だ。白隠の作品にしても一見無技巧であり乍ら彼は意識して無技巧な作品を作つたのだろうか、白隠の作品がいかなる人種だろうが魅了すると言うことは彼が認識される一切の我がから超越して不識の世界の人であつたことと、見る人々のどこかに不識の世界がひそんでいることによつて交流され感受されるのであつて正覚の世界が、それらしく見せる世界であつたなら白隠の作は何もこんなに人の心を打たないし又一個の凡作でしかないのである。井島先生のお話の中に出た様に只この世界文では芸術は生れないが、識、不識の調和と調和し乍ら進むことが芸術であり芸術の進展ではないかと思ふ。この森田さんの作に今迄にない森田を見出して喜ぶのは僕一人だろうか。彼の今迄の作品は一切が智的であり合理化されたものの表現から脱却出来たものはなかつた様に見受けられ、その点又僕等が学んでいたのではあるがそれら人間の智性によつて神的な中にひそむ本質が覆われていた様にも感ぜられたものが今度の作品に一応それ等から脱した新しい世界が開かれたことは何と言つても大きな生長であり本当にうれしい限りです。そしてこの世界から又新しい森田の発展が望まれたものらしい限りです／○森田兄今度は模索の跡は書き送つ

てきません／今月はかかないと手紙にありました。

※資料二十六 関谷義道「作品互評 中村木子」(図97、98) 『墨人』八月号(改題第五号) 昭和二十七年(一九五二)八月一日発行

一つの方向をもつて、自己を見きわめんともだえている人間木子の姿が分る。この頃僕は生活環境の激変からかも知れないが、全く今までとは違つた自己を発見しては自分自身に驚いている。そして何かしら表現したい、書きたいと心ははやるのだがさて筆を取ると、今まで見たたり習つたりした古典が頭につき、今まで書き順れてしまつた手法に手がとられてしまつて作品は結局陳腐なものになつてしまふ。／遂にはえいままよと筆をなすりつたり、たたきつたり……。そうしてはこれでよいかなどと考え込むと今までの書の学習法は全く無意味な方法の様に思えてくる。もつともつと勉強すべき大きなことを取り忘れていた様な気がしてくる。／木子の作品を見てみると木子も同じ様な苦しみを味わつていたんだなと感じる。／良寛の書の亡霊にとりつかれて、それをふり切らんとえいままよとがむしやらに書をふり廻したり、何負けてたまるかと力んで見たり、さて書いてしまつてやあここは案外出来たなと独りほくそえんで見たり。そんな木子呆人と自称する呆人？さが感じられて面白い／書作品の方が手順れていることが幸もして止めるべきところとどまつて作品を成している。作品の方はその点筆の置きどころに疑問を持つ。結局書きすぎているんじゃないかな。これをもう一度いらなところから白く消せる方法でもあるとはつきりするんだがなと思ひながら、がむしやらに筆を引つぱり廻して、ほつと息をついで作品を見る木子の姿が浮んでくる。

※資料二十七 酒遊生「習作互評 中村木子」(図99) 『墨人』八月号(改題第五号) 昭和二十七年(一九五二)八月一日発行

何時か見た永寿年薨を思い出した。一見素朴な、そして穢ないらしく見えて居ながら、見ている内に段々と爽やかになつて来る。仄々と暖い感じが沸いて来る。用筆に捉われる事なく自由にのびのびと書かれている処は、流石に氏の非凡なるものが警見出来る。けれども無理に四行書にした氏の思惑が解し兼ねるがこれも氏の人間性の然らしむる所以であらう。／私はまだ不幸にして氏の顔も知らない。併しこの作品に接していると、全く氏と相対している如くである即ち自己に徹せよ、とささやかれている如くである。宜なる哉此処にもロゴスの使者が存する。にも拘らず何故か不満だ。何故だろう……超俗的な宗教家的句がする……そこに不満が感じられるのではなからうか／遠く離れた異郷の地に、生死の線上を徘徊する未復員、今だ帰らざる夫を頼つて唯一の愛児を抱え日本海の岸壁に佇み、舞鶴港の遙な彼岸を凝視する悲劇の親子。又世界の一角に於て大砲の咆哮する雄叫等々、この息吹が私には欲しい。と感ずるのも思想の裏付の浮薄な故にか。妄許多謝。

※資料二十八 「良寛の遺蹟巡りを終えて」座談会(木子発言より抜粋) 『墨人』九月号(改題第六号) 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行

社会の生活から本当に隠遁してしまつたのかあるいは法悦を得て、子供と遊びたわむれることを心から喜ぶ良寛であるか、これはむずかしいが興味のある問題だと思います。脱俗し、隠遁しようとする良寛と、そういう気持ちにあつて法悦を求めようとする良寛、この二つの矛盾の中に苦悩しながら道を求めて行つた良寛というふうには私に考えておるのです。／(中略)／いろいろな作品を見てきたわけですが、中には有り合せの筆でなぐり書きしたといえるものもありましよう。しかし、そういう逸話があまりに多く伝わり過ぎて、良寛の古典に対する真剣な追求というのが、ともすると見失われているのではないかと思うのです。少くともそれほど無雑作に書くわけではないと思うのです。特に晩年の歌集の選にしても、自分の吟味して使いたなれた筆があつたように感じられますし、またそういうふうには真剣に作品をつくらうとする良寛が、筆を全然意識していなかつたなどとは考えられないのです。ただ飄々とした人間良寛が、ときにそういうふうにして書いたかも知れません。あまりに無雑作に書いたということがむしろ面白話として伝わり過ぎていてのではないかと思うのです。出雲崎の作品、国上寺の作品を見たときにあくまでも真剣に古典を追求した書家であり、同時に求道し、法悦を求める人間良寛であつたと思います。／(中略)／今の書家は良寛さんの作品をいいと言いますところが本当にその良さがわかつているのかということ。良寛の作品がいいところを科学的に分析して、それだけで良寛の良さが立証されるかどうかということです。僕は問題はそのだけではないと思うのです。あの中にある良寛の肉息吹というものの考えなければならぬと思うのです。技術と求道する心が相俟つてああいう作品ができたと思うのです。いかにしてこれを自分の血となし肉とするか、そこまで行かなければならない。良寛の遺蹟を見るときにただでなく、自分の作品の糧にしなければいけないと思うのです。／(中略)／自分の書というものを極めて素直に表現しなければならぬと思うのです。ところが自分が書いていることについて自分が何であるかわからない。自分を探究しておるのです。書くということの修業と、自分を見極めるといふことの修業と二つあると思うのです。／(中略)／良寛は他力本願であつたといふことを先ほど言われましたが、僕は良寛は徹底的に自力本願でやつて来たのではないかと思うのです。晩年になつてあなたにおまかせしますという気持ちになつても、やはり我執は強かつたと思うのです。意識的に自力でやつた人間良寛だと思ふのです。

※資料二十九 中村木子「模索の跡」(図103、104) 『墨人』九月号(改題第六号) 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行

(1)心無累(図103) 白い空間に於ける黒の持つ仕事のテストです。そのため線等も書の線からは一寸逸脱したかも知れませんが、心の第二画が一寸太長すぎて説明が多過ぎたと思つて何回も試みはしたがどうも線の調子が悪く結局これを出すことにしました。特にこれは読める最少限とも心がけていましたため成可くデフォルメしない様にしてみました。／(2)これ(図104)は一寸生意気な気持ちで試みたのです、即ち功利的な社会に於ける真実さ、美しさ、とでも言う様な物を表現してみたくての試みです。始めは古文を色々組合せたりほぐしたりしている中にどうしても生ぬるいことでは気がすまなくなつて無茶苦茶にやり出したのです。もう少し黒を加えようかとも考えたのですがそこまでの勇気がなくなつてこれで止めた次第です。出来てから墨美のα部に出そうかとも考えては見ましたがどうせ上旬に森田さんが来られるからそれまでにその分は作らねば、と考へて(今一点の作品はどうせ仲々出来ないし又有一に遅いとオコラれるから)有一に送ることにする。

※資料三十 森田子龍 「作品互評 中村木子」(図103、104) 『墨人』九月号(改題第六号) 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行

(1)「心無累」(図103)良寛を見て来たばかりである。やはり頭に浮んで来て自然比較して考えることになる。良寛には地上の人とも思えない天上高く飛揚した一面があると共に、又地下深くに沈んで、しみじみにじみ出て来るものがある。人間の苦しみ、人間世界の汚なさを誰よりも深く知り、深く感じた量感を思う。木子のこの場合、高く揚がるものがある。地下に沈む他の一面に欠けるのではないか。良寛程に苦しめない自分をつくづくあわれにも淋しくも思つている最近の私である。この点、木子も甘いという外ない。／(2)(図104)「功利的社会に於ける真実と美しさ」を表現したかったという。意図はよくうなづける。しかし、それはアイデアの上でのことで、私の肉体で受けとれたのではない。この社会で真実や美しさを求めれば求める程、汚たなさが目について来るし、他人の汚なさを見せつけられるにつけても、その何倍も自分の汚なさ、不純さを反省させられる昨今の私である。前々月の拙作「滄溟」で何とかここから一皮脱皮したいと願いつつも苦しみを増すばかりで、少しのゆとりも残さず、全身を打つ突けて投げ出されてしまったし、前月の「汚心穢身」では初めから何のゆとりもない自分であつた。この様な今の自分であるだけに、木子の着目したところには同情が持てるのである。しかし、ここには「功利的な社会の中の真実や美しさ」を客観したというより想像したのに止まるものではないか。苦悩や汚穢の中から澄み上つたものとしては、許えるものが表面的ではあるまいか。汚穢の中に苦しむ(美はまだまだ甘い)私の偏見だろうか。良寛にしても、全身をさいなみ投げ打つて苦しみ抜いた時期があつた筈である。しかしこの作品、美しい。この点敬意を払う。ただ美しい以上のもの、これを求めたいままに迷いごとをいつてしまった。

※資料三十一 「習作互評 灌頂記習作 中村木子」(図105) 『墨人』九月号(改題第六号) 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行

灌頂記習作／○灌頂記として、新しい世界を求めようとして、ここを求められた様に思えます。少し味な世界に墮する恐れがないでしょうか。(光甫)／○矢張りままりがある、もつと泥臭さがほしい。せめて河字位に。(草玄)／○技術的なものを一つも感じない。こんな気持ちになれたらと思う。(翠波)／○いつも紙上で見ますが細い線なれどさわやかなあの木子どくどくなちようしが目に移つて来ます。(静村)／○どれだけ苦しんだか知らぬが、表は楽に自分のものにしてしまっている。小字の方は見方が足らぬか。(有一)／○河内二字の淡々としてしかも堅実な存在は頂くが、丸はややかたく、小字は小さくまとまつた。(子龍)／美しい世界だと思ひます。明るい、そして空間に厳しいものを持つている点、深い郷愁を感じさせます。(翠浦)

※資料三十二 「習作互評 随意習作 中村木子」(図106) 『墨人』九月号(改題第六号) 昭和二十七年(一九五二)九月一日発行

随意習作／○旋律的なイメージ、美しい大きい動きを感じます。しかし、一寸溺れているんじゃないだろうか。最後の字の部分にそれを救つているものがある様な気がします。(翠浦)／○最後の一字が質的に違つているところに、この一枚を何かとけきらぬものにした原因があるか。(子龍)／○新鮮なものを感じさせられほしくなりました。柔にして豪といった熟しきつた作。(翠波)／○特異な美しいもの、木簡の近代化か。(草玄)／○アイデアは奇抜で面白いと思ひます。けれども、余りにも作為が感ぜられすぎます。いつもの世界から、脱皮されることを切に望みます。(光甫)／○氏一連の作。常に底に流れるものが一貫する処は中村大人と言ひたい処。これを井上氏とつきませたら。(洒遊)

※資料三十三 「墨人のあり方」 『墨人』十月号(改題第七号) 昭和二十七年(一九五二)十月一日発行

(前略)鈴木 良寛のまねをしたがつても今の時代ではいけないので、良寛と欧米の影響を一緒にしたもののがこれから生れようとして、苦悶しているのです。／中村いろいろのものに接触して吸収しようとするそこに苦しみがあるのですよ。結局これらの矛盾を分析して行こうということになるのではないですか。／鈴木 良寛を否定しようとする気持は必要ですよ。／森田 肯定の上立つての否定ということですね。／中村 矛盾を感じながら否定する。否定しながら肯定する。肯定しながら一方において否定する。これが順次に高まつて行くのです。／鈴木 良寛を肯定した上の否定、なかなか森田さんはいいいことを言ひますね。そうすれば新しいものが生れるのですよ。ところが今の書家は肯定したままで進んでしまふのです。／中村 今の書家は否定しながら肯定したらしく見せるんですよ。それだけです。一

様に否定していながら、肯定しないとパスに乗り遅れるというので、肯定したらしく見せて先を急ぐのですよ。(後略)

※資料三十四 中村木子「模索の跡」(図107)『墨人』十月号(改題第七号) 昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行

今度の良寛真蹟を訪ね廻つたことにはみんなやられたらしい、墨人も研究部員の人達も……/良寛病かそれとも書の恐怖病かな、第一に木子は今の処相当重症患者になつてしまつた。/白い紙に黒い一点をおくことが恐ろしいですよ、ところがその反面なあに良寛は良寛、木子は木子さ、といった反逆……それとも一つは何というか……淡々として自分は自分の道を行くこと、そして一切のそれ等にこだわらないことが本当だという考えが、自分を力づけ勇気づけてどうにか一枚出来上つたのです。/何しろ始めの意図が意図だからこんなフテブテしいものが出来てしまつたので……何か人間的な体臭を底からぐつと感じられたらと思うのですがとても駄目ですモジャ／＼は今まで追求の一連ですが只今度はすこし淡墨を加味してみました。(安易ですがね)文は老子の第六章の前句でして私のすきな句です『谷神不死是謂玄牝』です、これが本当につかめたら大したものです。ね、長谷川先生の言われる「正直なこと」になりきること心の造型を追求することがやはり今の自分の目標ですが反対の方におし流される方がより大きいカラクリ人形のされわざです。

※資料三十五 井上有一「作品互評 中村木子」(図107)『墨人』十月号(改題第七号) 昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行

これを見ると国際展のポロックの作品を思い出す。しかしこれにはポロックの様な大地から奔騰するが如き力強い動きはない。また鉄斎の絵も思出させられる。しかしこれは鉄斎の様な計画的、組織的に鍛え上げられた底力のある黒ではない。これはやはり木子の動きであり木子の黒である。木子の木子たる所以を何としても押し立てなければならぬのだ。そうして木子の木子たる所以を押し立てるには、一度この木子の木子たる所以を否定してみなければならぬまい。いや現在のこの木子は前の木子の否定であるのであろう。その現在の木子もまた今度は否定されなければならぬのだ。我々の勉強というものは、そういう様にある期間の追究の後に否定に否定を続けて行けばよいのだろうか？そこで問題は自己が自己を否定する識見の深さであろうと思う。/この作は多分に偶然的である。ところがその偶然性の裏附となるべき厳しい造型鍛錬が不足しているから何かしら浮ついたものに感じるのだろう。だから木子の現状の否定とは、つまり厳しい造型鍛錬に反転することであろうと思うが如何。/しかし老子の中でも殊に古いこの文句にこの着想はぜひもつと突込んで本格的な作品にしてもらいたいと切に希望する。

※資料三十六 中村木子「イサム・ノグチ展より」『墨人』十一月号(改題第八号) 昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行

原始の美、しかも私達の祖父さんの又祖父さんの遠い遠い祖先の作つた美を、こんなにも率直にそして大胆にみとめてくれた作品、そして又私達の子供の頃の淡い心よい夢を見ている様な作品、現代に生きる原始の姿と、原始につらなるモダンスタル。/言葉すらロクロク通ずることの出来ない異郷に育つた人、イサム・ノグチの人間的な心の奥底にひそむもの、至善なるもの、温かくも厳しいもの等々、それらにちに接する様に感じられる作品の数々、偉大なる原始であり、無碍なる童夢である。/私の最も尊敬する作家の一人であるイサム・ノグチが私の祖先と、私の童心に貫くものと、そして私の祖国と私達の東洋とをこよなく愛し求めていられることは本当にうれしいことである。/廿世紀後半に於ける書芸術の探求を続けている私にとつて今度の個展こそ私に偉大な示唆を与えそして種々の障害や困難に對し勇氣を与えてくれるものであつた。/皿類/全部手作りの平べつたもので荒い素朴な土目の上に太古の様におほらかに流麗に匳か何かで紋様が画かれたものと氏独自の凹凸をつけたものがある。粘土や釉薬は備前、信楽、瀬戸等各種の土に色々の釉薬がほどこされて一つ一つに陶物の世界に於ける説明が(作品の名称で無く窯の名前)ついている。この種の中で私の好きなものは備前の灰被釉と火樺釉だ。素朴なフォルムとやけただれた様な赤土、石のはじけた亀裂、灰やわからから滲む自然の色彩、どれともなしに心の引かれる思いだ。特に水を含ませると何とも言えない美しい彩が心にくいまでに胸を打つ。/壺、備前の男、女の夢、素朴で健康で太古から抜き出して来た様な整理されたフォルムと海老茶色の素焼の色はよくマッチして大きく空間を占めている。/三足花生は四種それぞれ釉薬の異つたもので、釉薬の特長がよく生かされ、オリジナルなフォルムは荒い土目を明るく近代にかがやかせている。寂しい塔もこの前に立つて東洋的な寂しさがひしひしと感ぜられるうれしい作品の一つだ。/彫刻の中では大百足に先ず驚かされた。形の異つたものの幾十かの累積美は長谷川三郎氏の交響楽晴雨やアルコブレの(Bridge)を連想する作品で、各々のものの持つデフォルメされて美しさと個々の有機的に関連されたものの美しさはさすがにイサム氏の作家的充実性を示すものとして讃辞を惜しまない。/ヨシ子さん、偉い奴、大きな子、ちつちやな子、独身者、蓑、餓鬼大将、美人、燕村、蛙、家等は「幼い頃の記憶が蘇つた」と素直に告白されているイサム氏のそれであろう。正直な子供の心が見ている中に私達を幼い頃の夢路に誘いこむ様だ。然も表現が原始の土偶や埴輪以上に無技巧であるのに、尚よく特徴が生ざれて思はず微笑ましくなるのはデッサンの正確さがうかがえて感歎に堪えない。ちつちやな子に自分の幼時を思い、独身者に嘗つての頃を思い浮べて独笑し、又僕と題名された作品の前では自分の頭に手をあげて義道と二人で大笑した。/虎、踊り、覗き、戦争、魚、歩き出す大箱、アメリカ、ラ・ムール、黒い運命、象等の一連の作品は所

謂抽象作品として見られるものであるが「日本の土は別の新しい地平線を見つけた」と言うイサム氏の言葉そのままに従来の作品に比し東洋的と言うより、むしろ純日本的に幽玄の感を加え鄙の臭さえ嗅ぐのは、彼として日本の生活を通じて得た大きなプラスであろう。アメリカ文化の真只中に生き抜いたイサム氏が簡素美と、日本の土と、葺ぶきと、自在鍵を愛し生活し製作していることは、彼の将来の未知数の世界に興味を与えると同時に若い我々に反省と示唆と勇気を与える。イサム氏の個展、今年の私のうれしいことと、うれしい収穫の一つである。

※資料三十七 中村木子「組上一点 森田子竜作品」『墨人』十一月号(改題第八号)

昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行

今月のアンケートで同人同士ではめるな等と言われていたし、今まででも故意にほめたりけなしたりしなかつたつもりなのだが他の人々からはやはり八百長位に見えたらしい。然し、今月この組上作品又何と言われてもほめたいし、又この作品が同誌の中でなされたことに心から祝福したい。／第一にオリヂナルなもので子龍なるが故にの作品である。近頃の墨人研究部のは表現の幅をのみもとめて深く追求することがない。そのためにハッタリ的な場当主義が横行する様である。これは子龍の独創であり微塵もケレン味がない、実に心にいくまで己の我執を取り去つて温い子龍の真実がヒタヒタと感じられる。スペースもよく右下の空白や左下の黒など誠によくきいていてうれしい、グウツと目を心を一点に集中させてはなせない。墨人の今年の大きな収穫の一つだと同時に子龍の長年の鉅脈から出た宝石だ。

※資料三十八 江口草玄「作品互評 中村木子」(図110、111)『墨人』十一月号(改題第八号) 昭和二十七年(一九五二)十一月一日発行

⑦中村木子 黄色い紙の情的な線による構成作品(図110)。面白い。たのしく遊んでるさまも見られる。こまやかな線情、自由さ。ある程度たのしめる作品と言えよう、だが、そして何か作品はものがたろうとはしてるのだが手ぶり身ぶりで心が地の底につながつて居らない様だ。線が案外紙から遊離してる。／空間も何かたよりない空虚さを感じます。／このことは、たまたま子龍の第一回セイ作品と一緒に見くらべたせいもあつて子龍のものがない今改めて見つめてみると左程でもない様にもみられます。がそれにしても最後の下部の左から右に流した横線を紙中深くこもる様にしたなら空間もより深いものを充実したものにならないだろうかと考えます。／こんな様なことは木子自身にすれば、さして意にかいしようとも又目標としてもしては居らないのかも知れない。こまやかな詩情、その線性、構成、そして自己の独創性を打ち出そうとしたのだろうが。／⑧拓本作品の方(図111)はこれに比して何かを底の態度に於て物語つてゐる。しかし人形さんを入れたところなぞ正に有一調と言われてもどうしようもあるまい。

※資料三十九 中村木子「組上一点 関谷義道作品」『墨人』十二月号(改題第九号) 昭和二十七年(一九五二)十二月一日発行

手なれたものであるし又最近の習作創作を通じて追求している一連の作だ、それ丈に危気もなくけれども安心して見られる作品だ。先月の子龍の評に、『稚拙即現代とは言えず、これによつてかなの近代化がなされたとは必しも言えない、逃れるのでなく積極的に現代の創造の方向への努力がほしい気がする』と言つてゐるが正にその通り、特にこの作の構成にも菱形ののの仕事でもつとオリヂナルなものが欲しいのは木子の欲だけだろうか。只従来の甘い、こちこちした線が見られず更に深くなつて来たことと全体に義道の体臭がこくなつたことはうれしい限りです。

※資料四十 中村木子「組上一点 井上有一作品」『墨人』一月号(改題第十号) 昭和二十八年(一九五三)一月一日発行

二、三ヵ月前からの追求して来た集大成、淡々と素朴の線に見えて細く神経を使つてゐる作品だ。だが率直に言うて甘くはないかね、もつとも纏めると言うことになると第一それに心をとられていかに自分をもやしてもダイナミックなもの生れてこない、纏めること纏め様とすること自体がすでに観念の囿になつてゐることにもなるからね、やはり一連の前の作の方が僕には残念ながら好感がもてる、上部の黒点の横へのつながりは全体を平板からすくつてボリウムと空間への広りを感じしめるが中部の黒と白とのバランスは実に平板だ。実際今までの有一らしくもない様な気がした。紙が小さいともつともつとすくわれたとも思うがオヤオヤ悪口ばかりかいてしまつたね……／兎に角今の場合この作品を作品らしくすることよりもつと作品でない様にぶちこわすことが本当の作品することになりはしまいか。妄言多謝

※資料四十一 小川一翠、森田子龍「作品互評 中村木子」(図117)『墨人』一月号(改題第十号) 昭和二十八年(一九五三)一月一日発行

たしかに一つの方向をみつめて、もだえ苦しんでいる木子兄の姿がうかぶ、私の苦しみなどそばえもよれない。何度筆をたたくついてもこの貴重な一と月に一枚の作品も遂に出来得なかつた自分と。兄のおすきな老子の一節 九月号 の作品の発展だろと思う。はい上つてくる野生的な黒は、後ろの静かな白によつて和らげられてゐる。真実の美しさはほのかにいつまでも見ていてもつきない。先月号の甘いものよりずつと素敵です。素朴の中に生きる楽しさがにじみ出ている。大いなる抵抗。(小川一翠)／○(谷神……)木子の長い追求の線、軟毫の長鋒に濃墨。この作品は楷書を扱つて内容的にも技術的にも進展が見られる。柔らかく暖くはあるが、ぐーつと底から押し上げて来る圧力を感じる。人間的には腹の据わりであり、技術的に

は骨格の確立である。第三行にその感が特に強い。第一行はやや融け切らぬものが残り、第二行は中程が穴になった。第四行は上半はゴツゴツしてバラバラになった。第三行の佳調が重荷になり、やや固くなつたか。何れにしても第三行を中心にして柔らかなのし上げて来た人間木子に瞠目するのである。ところでその第三行と、穴になつた二行目「門是謂」その他とを比較して考えて見たい。第三行「綿綿若存」は木子の内に確立するものがあつて、筆に煩はされて見ない。筆を外に置かず、肉体の一部であるかのような無遠慮さがある。「門」以下は軟、長、濃の条件の故に、しなつて必ずしも手の動きのままには動かない筆鋒をいたわりつつ進んでいる。手と共に動かない筆のしなりを寛容する鷹揚さもよいし、筆をいたわることも悪いことではないが、そのこと自体木子の内のもので重大につながらなければならないのだと思う。筆をいたわらんがために内のものを忘れたり、線の味の故に、しなりつつとびつ進む筆に興味を持つというのでは、人が従で、筆が主になり、又精神よりも感覚が先になることになり、作品は人そのものから離れて行く。今木子はこの様な危さから抜け出ようとしているのである。／又第三行には、きびしさ、重厚さという木子にとつては率として比較的少かつた要素が、むしろ最も表面に出て来たのも注目すべきことである。(森田子龍)

※資料四十二 森田子龍「習作批評 仮名習作 中村木子」(図118) 『墨人』一月号(改題第十号) 昭和二十八年(一九五三)一月一日発行

さらつとした中に肉も骨も柔軟にほぐす——という方向で見ると、最後の一字で最も成功している。「あ」はやや激しく、「わ」は長いタテ画に無理があり、「に」はキンと突き刺すものがあつて、周囲の白を白々しいものにしてこの一枚を破つていいる。何にしても軽さ淡さへの志向に人間的な背景もあつて浮薄なものにしていけないのがよい。原書貫之の自家集切にはもつと粘厚な量感があつたかと思う。それを逸せずそこを土台として見直すことにより一段の発展があるのではなからうか。

※資料四十三 「誌上展作品批評座談会 中村木子」(図119、121) 『墨人』三月号(改題第十一号) 昭和二十八年(一九五三)三月一日発行

大沢 α 作品(20)(図120)の地の赤い紙が少し合つてない様に思う。青かなんかの方が……。品がわるい様に感ずる。／森田 合つてない感じがしますね。／大沢 赤を使う時は余程考えないと。／森田 20の場合僕の近頃の好みとして、こういう様に細かく調子を整えることが何だかアカデミックな感じを伴つてグツと来るものがない。細かい調子を外してもつと大きなもんを掴みたい。何か細工がこまかい／辻 佐渡という土地に住んでいる木子という人間と近代との調和、その処が中々面白いと思う。／江口 ギリギリらしく見えるが、ところがそうでない、ちよつと軽い意味の遊びの方が多い。／所 技術的には非常に細工で工夫されている。／

水本 楽しみながら書いているという感じをうけた／江口 楽しい時間がたつと段々影が薄くなる。／森田 楽しみの中からその人の全人間が出たらしいと思う。浅い楽しみだと人間が出るまでにはならない楽しみということが深く考えられやすい。所謂楽しいことだけが楽しいのではない。その反対の場合でも楽しめる筈だ。／江口 書く場合に深酷であらうと楽な気持ちであらうと同じだ。ギリギリであればいいと思う。／辻 ギリギリの楽しさ。／佐藤 真中の細長いのが赤に合う様な気がする。ちよつと見るとアルコブレーの様に見える。むしろ真中の様な調子で全体をまとめた方がよいのではないか。／江口 21の方(図121)、左三分の一をとつたらしいと思う。／大沢 しかし左に何か意図があるのではないかと考えているのだが。／江口 左の方は筆だけが動いたという感じだ。／森田 もり上るとか高い響は今まで木子に比較的少なかった。／味に惹かされることが少く裸になつたといつたところだろう。／江口 白が輝いている。(19)(図119)の方、別人みだいですね／辻 スタイトルが大沢さん系の作品に似ている。

※資料四十四 現代美術懇談会二月例会「書とモダンアート」(図122) 『墨人』四月号(改題第十二号) 昭和二十八年(一九五三)四月一日発行

(前略)津高 外に意見はありませんか、山崎さんゲテ趣味と云われた黄色いあれに行きたいと思ひます。／失名 黄色い紙の色を選定されたのに何かお考えがあるのですか。／中村 正月に風邪にやられて正月らしくない陰惨な生活を送つたと云うことから、どうも白では喰いたらん。色の紙に面白いものがないか探したら送つて来た包紙があつた。／島本 しわを寄せてやられたのが面白い。あれがモダンだと思ひます。あのしわの寄つておる上に字を書いて、ああ云う味の出るところが良ひと思ひます。ところが、そのしわをもつと意識的にやつたらもつと面白いものが出来ると思ひますよ。／中村 去年はしわを寄せてやつたり、水をたらしてやつて見たのです。／須田 書の人白と黒を絶対のものだとしておるが、もう少し色紙を使つて見たりと良い。／津高 僕はしわが面白いと云う以上に、しわの偶然性を必然化するそう云つたことが大事だと思う。／須田 実存じやないが、そのままあると云うことに／津高 現実に結びついたことから、面白いと思つて面白いのと、いろんな何がありますけれども、それをだんだん突いたら面白いものが出てくるのではないか。／須田 今、山崎君が云つたような意味で、字そのものに古臭さを感じるのです。あの字はどこかにあつたような、ゲテ趣味なんと言ひませんが、何かあの形は余り僕は感激しない。／津高 僕は文字というものの造形的な一つの面、書というもののフォルムという方を、もつと追求して行つた方が書家としてよいのじやないかと思ひます。／須田 和服ではいかぬ、洋服が出来て来なければいかな。／田中 一つの絵画と同じ意味が成り立つのですな。／津高 一つ伝習的の文字というものがちゃんとあります。その中での話です。クリエートして行く、トレーニ

ングして行く、デッサンとかいう意味と、僕の意見では、分化したら統合する面を、アルファ作品とこれとをどこか一致点で統合する限界を、厳密に言えはほしいのですよ。もつとこれについての何か限界のようなものがほしいと思うのですが。／田中 ああいうものを離れて、もつと絵でなくてもよい、造形的な絵画とかそういうものともつと突っ込んで行ったら、文字が下手趣味だという、いわば何か面白いという意味のものだけしかないかと思う。一つこういう空間を何とかさせたいという意味でやつたら一つの形自身にしても、いわゆる形としてあるフォルムに、情意化されたものに凝縮するのではないか。子供の絵にはそれがないので、そういう意味に解したらそういう意味のメソッドというのがあつてふるいものをやつておるそれであれば下手物……（後略）

※資料四十五 森田子龍 「作品互評」(図124、125) 『墨人』五月号(改題第十三号) 昭和二十八年(一九五三)五月一日発行

「乱舞」(図125)これははつきり文字の正確の上での作品。乱は的確、緊密、そして明るく清い。よく周囲の白を動かし得ている。舞は低紙背の力に一貫したものを欠くというが、焦点を持ち得なかつたというか、危つかしいものがある。尚その長いタテはやややり過ぎ、骨ばつて目障りになつた。この線にこの逆の性格を持たすことによりこの作を大きく救い得るのではなからうか。／とまれ、木子従来に見ない大きな仕事を、なお高い気格を失わなかつたのは流石である。しかし、それが一方に於て、穴を残すことになつている。それにこだわらないで高く求めることの出来るのが、やはり木子の身上であるのではなからうか。／「嗣君弁冕擢中天」(図124)何ともむずかしい字だが、作品の上では更に何とも分らない。補助線もあるらしい。文字を機縁として作品にとりかかつたが、それを存分に己れの満足の行く形にするために、削ずることも、足すことも辞しないのである。読まれることを求めず見られる美しいものを求めているのである。この態度この作品、何だか愉快である。楽しい。共鳴したい気持で、自分のからだごと軽く柔らかく動かされている様な気がしている。黒の濃淡、調子への配慮はよくなされているが、とこか白の充実感にチグハグな落着かないものがある。そのため全紙面の力が一つにならぬので、作品を薄手なものにしている。この方向での作品に期待したい。

※資料四十六 中村木子 「模索の跡」(図128、129) 『墨人』六月号(改題第十四号) 昭和二十八年(一九五三)六月一日発行

(一)古典の観察と言ふこと／諸井三郎氏の音楽論ノートに音楽の鑑賞に関して大體次の様な要旨が述べられている。即ち音楽の鑑賞活動は第一にそれを聞いて楽しむこと、第二に音楽を理解すること、第三に価値を評価すること、そして音楽の鑑賞と言うことを始めた当時はこの三段階が別々であるが観賞の修練を積むと三段階が

同時に行われるのである云々と。又井島博士の『芸術とは』の小冊子の中には、見ると言うことは「見ることに於ける美の創造」と言う様なことが書かれていますが、我々が書の古典を習う場合にも誠に教えられる処が多い様です。私はよく墨人、奎星会、その他所謂前衛派と言われる以外の書の方の人々から『君達は古典に忠実でない』とか、古典を無視しているとか言われますが私はそれ等の人々の古典を重視する態度が疑わしいのです。／科学的に実在する古典を、眼のレンズを通して科学的にその実在をたしかめることが、書の古典の観賞でもなければ、古典に対して真面目に習う態度ではない筈です。個々の視覚を通じてそのものの美しさを見出す、換言すればそこに自分の美しさを創造することなのです。先月のゲンビで須田剋太氏は漢字そのものの文字性の組立自体が美しいと言つていられましたが、私達が案外気にとめていない事が外部の人から発見されて恥かしく思つたのですが本当にもつと素直に古典の美を見出し創造しなければと思います。／更にもう一つ古典の見方として、古典はそれを書いた人、石に刻んだ人等の人達の手を得て出来ていますがこれを書く可く意識する前の心、即ち意志が働く前の我が書く場合も刻む際にも有るわけですがそれと見る立場から見ても、只見ているだけでそれを意識し理解する以前の自分の心の奥にひそんでいる純我とのふれ合い、その様な何と言うか靈感とでも言うのかその様な働きによつて古典を作つた人々の心にあふれ合う事も又古典を学ぶ面に於ける重要なことではなからうか、二つの事によつて我々が古典を通じて古代の人々に人間としての心のつながりを持つこと、現代の社会の中の我々が近代人の叡智に於いて古典の中に自由に美を見出し創造することが古典を観賞すると言うことより古典を学ぶと言う態度ではなからうか、今度の劉懷民墓誌銘(図128)はかねて自分の好きな古典の一つ、三三三枚かいては見たがどうも意に満てないものばかり、中でもいくらか増ししものを出品した。／(2)他の一点(図129)は良寛の詩集から書いたもの、出来上がつて見たらどうも平板だ、始めの意図は全体の構成に於いてもつと黒の力が強くダイナミックなものをねらつたのだがほんとうの駄作になつてしまつた。以上

※資料四十七 中村木子 「自己紹介の頁 呆人木子の巻」(図版16) 『墨人』六月号(改題第十四号) 昭和二十八年(一九五三)六月一日発行

馬鹿づらのぞき／『六月号より自己紹介の頁を入れることにした。そして一番槍が木子だ』との有一からの命令、恐らく有一も総選挙前の物々しい候補者の鳴物入りの自己紹介でも聞いてからのヒントか何か知らんが一番槍とは恐れ入つてしまつた。然し誰が一番槍をやられてもその当人はみんな自分と同じ浮目に会ふのだからそれを思うとまさか人におしつけるわけにも行かないし返上するわけにもいかんから悪い風邪の吹き廻しと思つて書かねばなるまい。／自己紹介となると先ず第一に書くことは生国であらう、誰の自叙伝を見ても大体相場がきまつている。私の生国、大分

の人が知っている通り佐渡、前が両津湾（これは年中海から太陽が上る）後が加茂湖、嘗つて上田桑鳩師が拙宅で両山抱水の自然児が、今でも大した変化なくそのまま生き抜き自分の魂の奥深く入りこんでいることが自分の長所でもあり短所でもあり又同時にプラスの事も有りマイナスのことも多い様だ。曾祖父に命名されたのが佐魂、文意からすると曾祖父はこの自然児に余程囑望するものがあつたのかも知れない。我ままで強情で短気さは小学校でも有名だつたらしく今まで自分の先輩の奉職している学校へ遊びに行つたりして、小学生当時には時々子供の頃の事を話出されて頭をかくことは一再でない。／習字の方は余り成績がよくなく六十点から七十点位然し自分で清書を出す時は余程自信を持つてはいた様に記憶しているが先生からいただく点は前記の通り。或は先生は自分の清書のよしあしが判らないのかもしれないと当時も思つたことがあつたし、今でもその様に考えないこともない、これは自分は常に祖父から手習を受けていた関係であつて、往年の佐渡は島民全部の文化水準はたしかに高くなかつたであらうけれども一部には相当な文化的人材がいた様だつた。即ち島と本州との交流は古くは奈良、京都より能登を経由して佐渡へ流れ鎌倉、江戸時代には信州を経由して、能登又は寺泊よりの佐渡への直流であつて、神代より逐次、空海、日蓮の仏教文化、順徳帝、世阿弥等流人のもたらした京都公家の文化、相川鉦山と江戸との直結する江戸武家の文化、幕末に至りて亀田鵬斎、吉田松蔭、宮部鼎蔵等、尊王国学の文化等々、本拠との直結するそれらの洗礼を受けた人々の中には我町の大儒丸山溟北先生の如き、換言すれば純粹な荒土の文化を持つ人々が多く島の民を指導し自分の祖父なんかもそれらの人々の末の末の一人だつたらしくその為筆は相当に立つ人だつたらしく自分の子供の頃正月の十一日の藏開の朝等大福帳の表紙を書く為町内から相当数の帳面が持ち寄せられたことを知つていたしこの様の人から教えられ自分の字は小学校の先生の添削等一かうに習おうとしなかつたから点の悪いのは無理もなかつたかもしれない。／十六歳の頃、無理の勉強で一寸体を悪くしてぶらぶらしてゐた頃自分の従兄弟の一人の若死した北海道の後藤竹涯に進められて書鑑を手にしたのが書道誌を出して見たためであり、その頃長野で横田祖岳と言う人が精肅と言う小書道誌を出していたのでそれや高崎の友松龍洞氏の龍集、等を読んだり競書に出品したりしていたが何しろ祖父から陽陽詢風な字を習つた自分はそれらの鳴鶴一辺倒のものは心からしつくりはしなかつた。その中に翠軒全盛の時代となり、翠軒老の（当時はまだ若かつたが）佐渡講習の際故原田翠屋先生に師事、所謂翠軒流を懸命に習つた。そして名古屋の復朴誌を通じて今井矢江、伊藤翠峯氏等知り「香山」「翠江」「翠々庵」等の雅号にて「風信」「復朴」「筆勢」等盛んに競書出品した。その間長く師事していたのが米倉大謙と言う人で当時たしかに高崎の師範かどこかに奉職されていた様だ。／その頃ボツボツ、技術と、技術の情性で字をかくことが書芸術かと言う様な疑問を持ち始め一度書道芸術の添削券で上田先生に添削を願つたり支那事変が大きくなるといつともなしに書道誌もとらず、

筆も持たず一切の書とのつながりを断つて十年、終戦の翌年八月まだゲートルはきのまま千歳船橋布穀庵に上田先生を尋ねて入門した。この筆を持たない十年、幾人かの友を戦場に送り、殺しもした十年、一度は事業に失敗してスッテンテンに家まで差おさへせられ、当時の金で数十万の借金で家にいられず幾日となく逃避行したこともあつた十年、あばれん坊の自然児は強引にあばれてあばれて暴れ廻つた。／上田先生との交渉は日尚浅いとは言ふものの書の生活としては一番特筆すべきものであらう。中央展への出品、奎星会の強力化と毎日展、芸術院展への不参加等無シツケな進言。新潟県内に於ける弦巻松蔭氏を中心とする金鈴会の結成と推進等に十年の空白から改めて再び活動を始めたがやはり野放図な自然児には純粹在野より他に生きる道はなく遂に同志五名と共に上田先生とも涙の袂別、茲に墨人の誕生、墨人こそ自分の活動の場であり修練の道場であらう。最後に前記、横田、故原田、増山、米倉、今井、上田の諸先生に対し自分の今日あらしめたことについて心からの感謝すると共に益々御多幸を祈ると共に私の永久にかわらぬ師は、佐渡の山であり海であり湖であり、多くの過去の無名の先人と幾多の島民の心の奥にひそむ真実とであり、自然児木子は両山抱水の自然の中に自然と共に生きそこそこ人間の間と、本当の自分自身を見出し度いと念願して止まない次第です。

※資料四十八 中村木子「相上二点 江口草玄作品」『墨人』六月号（改題第十四号）昭和二十八年（一九五三）六月一日発行

白を白のままでおけなかつた君が、今度の作品をそのまま白く、純粹に白と黒までに煮つめ得た事は大きな進歩である、君の今までの作品が黒が主体で白が従属的であつたものが多かつたのに比して、今度の作品が黒が従属的で白の美が輝いている、特に右上色の上部の横三角形や心の上部の逆三角形、三字目上部の空間等実に美しい。煮つめきつた姿でありとことんまで整理された造型である、唯何の為かこの作品からうける冷たさはどうしたものだろう。智性は事物を客観化し対象化することであつて間接的な心の働きであるが、情意は我々の心に直接的であつて、意識の本質は情意であると思う。純粹意志の絶対的自己肯定として芸術があり自己否定が科学であり智性である。故に直接的に直知されるものが何であるかが作品を観ることに於いて価値づける第一の要諦であり、作家の内在的な本質であり理念であり所謂人からとして普通に言われることであると思う。もし作品の技術においてこれが異なる感覚を人に与える様な作品であるとするそれは偽りの芸術として排撃されなければならない。／この様に考える場合この作品の持つ一種のひやかさが私にはどうしても気になつてならないのである。

※資料四十九 岩佐麗堂、関谷義道「作品互評」（図128、129）『墨人』六月号（改題第十四号）昭和二十八年（一九五三）六月一日発行

⑤⑥中村木子 劉府君墓誌銘(図128)は実に書きなれた筆意は自然と人にせまるものがある。／⑥(図129)画紙に淡墨を少し染めて濃墨をもつてはちきれるほど書きこなししたのは面白い。作品を見ていると粘厚のあるのはたくましい。(岩佐麗堂)／(図129)淡々として明るい。横への流動的なリズムが感じられて楽しい。構成も後半特に美しい。この作品を見ていると昨夏旅した佐渡の海が想い浮かべられる様な気がする。静かな海、きらめく白波のうごきが連想されてくる。佐渡の住人木子として、その環境からうなづかれる様に思える。／墓誌の臨(図128)、例によつて木子調の作品であるが、前半三行迄が好きだ。だがあまり形に工夫しすぎて反つて素朴な大きさが少くなつた様に思う。後半は、字々同じスタイルになつて重苦しい。(よしみち)

※資料五十 大沢華空 「ゲンビを読んで」 『墨人』六月号(改題第十四号) 昭和二十八年(一九五三)六月一日発行

(前略)私は、そこに書のジャンルを認める井島先生の芸術のジャンルで知悉しているように、文字を媒体とするのが書である、と考えているから、中村木子氏が言つてゐる如く、書の今までの歴史というものを無視して論ずることは出来ない、と云ふことになり、文学性と造形性の一致、が重要な問題となつて来ると思う。書のジャンルを考えれば、文字を媒質とするのであるから、何故その文字を選んだか、その選択と人間とのつながり、そして同時にその表現とは一つの必然的な連りの上に於かれることは、当然であり、ウエイトの差こそあれ、何れも書の重要な要素であると思う。(後略)

※資料五十一 中村木子 「創作批評」 『墨人』七月号(改題第十五号) 昭和二十八年(一九五三)七月一日発行

五月十八日日本経済新聞に『日本の洋画』と題した福島繁太郎氏の一文が書かれてゐる、内容を要約すると日本の洋画が海外で不評であるのは、基礎的訓練のであることと更に抽象画に言及して形象を単純化して無形象に到達した所謂抽象画はデッサンの厳しさを最も要求するのだがデッサンの出来ぬ人がでたらめに画いたものも一寸区別がつかない、朝夕熟視すれば判るがそれでないと会場等では簡単に区別が出来ない為、いかものが横行している云々、としんらつかいてゐるがこれは吾々も反省せねばならないことだと思ふし特に今月の作品にはこのことが特に強調したい様な作品が多い、只ユガメたり、引つたり思ひつきとしかうけとれない作品や、線質とか線性をしつかり基礎訓練してもらい度い様な作品が実に多い、もし我々の作品が書のアブストラクションであるならこれは書的生活体験の中からみ生まれる物で、書の基礎的生活と遊離しての作品はあり得ないことをしらねばならない。

※資料五十二 「畑上一点 中村木子作品」(図131) 『墨人』七月号(改題第十五号) 昭和二十八年(一九五三)七月一日発行

和二十八年(一九五三)七月一日発行

関谷義道 たんてきに言おう。表現過剰だな、欲ばりすぎた。これが第一の感想だ。今迄のいろいろの習作の集大成かもしれないが、一応の解決点というか、帰着点は見出されない様な気がする。／しかし我々にとつて解決点とか帰着点などいつになつて発見出来るかしれぬし、小さな解決点を得たとしても何にもなりはしない。それより、一層大きな未完成を希つて猛進することこそ必要なのであらう。／木子の遮二無二に書の本質をつきとめんとして行く意欲はすさまじい程にこの作品を通して感じられる。／その意味で木子の人間として受けとる。整理してよいものも出てゐるように思うし、更に深くほりさげたい面も感ずる。左部中央の淡墨の線は不要に思うし、拓本様の黒の点々の部分や、下部のかすれた線は多すぎる様に感ずる。上部の太い線の墨は更に深く透徹したいものの様に思う。／しかし今までに見ない新しい木子の生れ出てくる希望によるこびを感じさせる作品である。／井上有一 多種多様の要素から出来ており、複雑な紙面を形成している。夢幻的であるとも言えよう。木子としては新しい方向を示すものだ。／だがしかし木子自身としては、「ちよつと面白いのが出来たな」という程度じやないのかい。どうもそうではないかと僕は思う。／第一、何だか大きな作品の一部をきりとつてきたという感じがする。実際に大きなものの一部を切りとつて立派にタブローとなる場合もあるだろうが、この場合は唯きりとつたというだけの様に感ぜられる。／とにかく、いくら見ていても、木子が何を表現しようとしたかが、はつきりわからない。どこに焦点があるのか、わからない。これは僕の見識の低いためかも知れないが。／中央下部から走り出ている数本のかすれた線は、どうもうるさい。いらぬのじやないか。上部の黒い横線や左の斜線も、どうも浮ついていないか。唯、右端の部及び左下部は面白いと思う。／今後こんな仕事で面白いものを沢山見せてくれ。期待しているぜ。／森田子龍

反古かと思われる小紙片、しかも裏にも作品らしいものがあつて、どちらを提示されたか分らないなあと、一寸ト惑つて一応しまつて置こうと、山積する通信物の中に置いたのがいけなかつた。忙しい毎日の時間と郵便物の山の底に埋没してそのまま日を過してしまつたのである。発見した時は既に編集の時も過ぎてゐる。再見するいとまも、批評を書く間もなくそのまま大急ぎで有一に送る。今は印刷所に行つてゐるので見られないままにこの文を綴る。この様なことになつたのは、一つにはこの作品が、改まつて人に訴えようとするものでなく、ふだん着のままそれとなくいる姿であつたのによるのではなからうか。が初め見た時は何やら雑然としたもののようにあつたが、記憶と時間とのすれ合いを経た今思い出されるものは、ほんのりとしたやわらかさ、暖たかさである。／大体この作品は推敲の上になつたものであるのか、又はそれとなく汚され、捨てられた反古の中から広い出されたものであるのか。われわれの或瞬間の間の姿をそのまま写しとる機械でもあつたら、どんな影響がそこに現われるか、随分面白いものだろうと思うのだが、内側を形にするそのこと

が造型芸術なのだから、その様な機械の役目を担うものこそ、われわれのこの仕事である訳だ。瞬時もとどまることなく変転推移する内側を或瞬間に於て定着したのがこの作品であるなら、随分面白いだが木子的な着眼だと思ふ。推敲、整理純化以前の、作りごとにしやすいそれを経ない前のありのままの姿の定着はたしかにもつと試みられてよいことに思われる。変則な批評の仕方になったが、有りのままの、多分自然な成り行きでもある。／江口草玄 裏の方にも何か字が書いてあつて印が押してある。まつたくどちらの方から見たらよいのか参つてしまつた。その瞬間肩すかしを喰つた様な、人を喰つた様な作品だなあと思つてみたりもして見たが、その後、五月下旬に新潟市での新潟県美術館設立準備資金獲得の美術展に出されてあつたのがこれと同様のものであつて小さな額縁、小豆色の周囲の中にある之が断然書の部でズバ抜けて輝いて居つた。／従来、何か今一歩物足りない伸びきつた、媚態みた様な、底の淡い感を持つて居つたのから、ビシッと充実して木子のあるがままを統一出来、すばらしく成巧している。海の中の孤島、佐渡ヶ島特有のほのぼのとした明るい温かい落着いた空の下で、ぼつかり生れ出たものと言へ様。／この一見うすよくれた様な紙面から浸々と尽きることなくにじみ出て来る木子の人間像、然もそれが観る方の側に何の抵抗を感じることなく入つて来る。木子の本領を、あるがままのその時の姿を充分發揮し得たものと言へ様がこれは又反面から言へば、木子の何時かの言葉にあつた「近代の理智と人間的情感」の名の下に、それが淡い概念化されたものになりやしないだろうかとも考えさせられる。(然しまた木子のことだ、うまく軽く身をかわすことであらうけれ共)

※資料五十三 「作品批評会」(図135、136) 『墨人』九月号(改題第十七号) 昭和二十八年(一九五三)九月一日発行

江口草玄 表紙及⑦(ゲンビ展出品作)／木子 昨日も子龍が、文字の持つ形の美しさというものについて言つていたが、西洋の絵画の人達がリアリズムの絵から発展し、色々と整理への方角をとつて来て書の美しさというものに注目して来た。ところが吾々書人は絵画的なりアリズムの世界の体験を経ないので。吾々にはただ文字というものの美しさに対して自分の生活体験を通してのみそれを表現して来た。吾々としては、もう少し根本的な、形のもつ美しさということに対する追求をしなければならぬ。／現在の社会機構に於ては、書の生活を通してやり、そういうことをやり乍ら書の生活と交流する、というような、なまぬい研究態度だがそれ以上にやれないという吾々の現実をみた場合、根元的な書の形の持つ美しさというものを見極めることと、形の持つ美しさを見きわめ乍ら書に於けるところのリアリズムという面への製作を続けて行くことが好むと好まざるにかかわらず今の吾々に担わされて来ていると思う。そういつた意味から、こういつたことをやると同時に今迄の文字性を基盤にしたところを追求して行く草玄の態度を全面的に肯定しな

ればならぬと思う。／有一「乱響」「色心不二」。それから今度の作品とその三つを考えると、はつきりした目標に向つて一歩一歩ときびしい追求が続けていることが、ここに益々はつきりして来た。／木子 しかし「乱響」「色心不二」。今度の作品を通して、白と黒という、純粹の意味に於ける白と黒という面から考えると「乱響」はまだ其処迄至り得なかつたところが次の「色心不二」に於て非常に整理しきつて、最も単純な両極端に於て作品がなされていた。ところが今度の場合、止むに止まらないところの色彩であるのかも知れないが純粹に白と黒との整理という意味から言つて「色心不二」の様なところ迄行つていない。中間色を使つたものの追求から更に整理されたところの両極端を見出す、白と黒に純粹に整理された色彩迄行く、こういう追求への途上としての現在の作品として否定はしないが。(以降、木子の発言ないため省略)／中村木子①②(図135、136)／子龍 ここ一、二カ月調子が変わつて来ているが、それについて作者の心境、意図如何。／中村 われわれが純粹に芸術する建前から在野でなければならぬ。在野ということは、単に官展に対して抵抗するということに止まらず、現実の自己に対しての抵抗であり反省でなければならぬ。その意味からも作品を作つて雑誌に発表するということは、自分の集積されたものを発表することと同時に、今まで自分がなつてない面への一つのデッサンとしてのものを出すことも止むを得ないことだと思う。自己にない面の追求への人間の内面的な苦悩がこういう表われになったのです。／関谷 今の木子の言うそのことは非常によいことだと思ふが、作品はおとなし過ぎるのではないか。というのは作品にくるしみがそれ程ない様に思う。／森田 打開とか拡大とかいうことは、しばらく実験的な試みの形で出て来ることは止むを得ないと思う。だからこの作品そのものの上というより、作者の意図する方向の推進ということで、次の結実を待ちたい。／草玄 木子がね、先程自分にはない面の追求、それへの打開ということを言われたけれども、そして実験的な試みではあろうけれ共、その実験的な試みをなそうとする自己の底に持っている動かないものというか、何か苦悩の度合いが左程深く重くはないと思う。／自己が探し求めようとする道への一つの実験的な試みであるこれ、と見た場合、木子が何をやろうとし、どの様に歩こうとしているのか、わからないのです。とに角地につかない。所謂地につかない。／森田子龍⑥／(前略)／中村「二、三年前の養心云々の二曲屏風から流れて来ている子龍独特の追求態度であつて、最近先月あたりまでの、意慾的で底のものが強く、統御し切れぬものが表面に出て、観者を圧迫する迫力のみなぎつたものであつたが、今度のこれは内ものものがよく統御され人間的な暖味が、表面にのし上つて来た。次に来るものが何か、どう変わるかに興味を持つて眺めて行きたい。煮つめ統御して人間的なものにまで澄み上らせたのに感銘している。先月の「清貧」は形も未整理だつたし、甘いものも残つていた。これは深く高く、集大成の原点に立つている。(以降、木子の発言ないため省略)／辻太④／(前略)／中村 構成等ちがうけれど「非常の夜」の作と一連のものだね。／

井上 「花なき薔薇」という言葉にはどんな意味があるのだろう。／中村 文学的な意図が作品に強く打ち出されているのか、単なる文字としてとり上げたのか。／森田 僕はこの言葉に作者の位置をみたい。そこに位置した作者の「なげき」を考えて行きたい。／中村 だれにでもよませる目的でかいているのか。／辻 この言葉だけを読むのに意味があるのでなく、又何の意味もない文字を書くのでもない。自分の表現したい世界と言葉とが出来るだけ一致した姿でありたいと思っているのです。／井上 書は昔から書かれた文句そのものに尊さがあつたのだ。ここに所謂非形象絵画よりもとうとさがあるのではないか。東洋的な高さというか……。／森田 自分から出発した言葉を選ぶ苦勞をしなければならぬ。／中村 自分のフォルムと言葉とが一致するというのがねらいになるわけだ。／井上 だからここにある額の様に「能拙」という言葉を書くのだつたら能拙なる人でないと思いがたい。だから、この場合辻という人間がびたりとした言葉を選んで来る所に意味がある。／中村 自分の意志を育てもり上げて行く知性が作者自身の心の中にそだてられているのだな。その意味で、この作品の将来に期待したい。／井上 技術的にはどの線をとりに出してみても下手で、びたりとしていない。しかし、それを逆の立場からいえばそういう事がそのままに出されている、不自然な技巧でむりにまとめ上げて行くとした態度のない所に大きいのびて行く態度が見られるのではないか。／森田 そういった純粹さが尊いと共に、技術がもつとあれば「なげき」がもつと強くはつきりと出て来るのではないか。技術のおとさを考えるべきだ。／中村 技術から生まれるというのではなく、真実に技術が一致しないと真の意味の表現にならない。

※資料五十四 中村木子「旭上一点 辻太作品」『墨人』八月号(改題第十六号) 昭和二十八年(一九五三)八月一日発行

今までの君にない、粗剛な仕事、然もそれが決して粗剛でないこの作品の前に立つて、柔和な君の面影を思い浮かべている。夜、情、非、と堅画の多い文字を然も文字として誰にでも読ませる立場に於いての作品では、たしかに構成が難しいし、又当然無理もあることは充分に判るし、若し僕が、課題としてこれを書くとしても仲々一寸手におえないとは思っているが、やはり自分はこの構成が気になつて仕様がな。／真中の情を思い切つて大きくしたことにも苦心がうかがわれるが、情の卜扁の堅線の最後と、青字の月の渴筆で、この構成も生きては来たもののそれでない、これすら成功か失敗か判らない位むずかしい処だろう只、私がこの作品を前にして心から太の為に喜びにたえないことは、全紙一杯によく充実させた技量の偉大さと、新しい太を見出したこと、更にここから太の将来の飛躍が約束される、太にとつては新しい鉅脈の発見であることだ。

※資料五十五 井上有一「作品互評 中村木子」(図132)『墨人』八月号(改題第十六

号) 昭和二十八年(一九五三)八月一日発行

一見して、構成の面からは上田桑鳩の去年の日展作を、線からは草玄の近頃の傾向を連想した木子が計画的にそれらをとり入れたのか、或は何となくでしまつたのか分らないが、そういう連想は誰でも正直するであろう。それがよいかわるいかと言えど勿論わるいにきまつている。木子如何なりや。／しかし考えようによつては、真似であろうが何であろうが自分のやりたいことは気軽にどしどしやつてしまふところに、木子のいいところがあるとも言える。はたで氣を病むほど本人は氣にはしていない。溺れてしまふ心配はなからう。／構成を見ると、これは起承転結で見られると思う。右の字から一字づつ起、承、転、結。一字一字が左への動勢をはつきり示して、承と転の間に広々とした空間を作っている。面白いが、しかしこの線のために、折角のその構成が生きてこなかつたのではないか。／この線はもろもろしていて賛成出来ない。筆を何回も重ねた様に見えるが、どうもちよつと手際もわるいし、第一なぜそうせざるを得なかつたかその辺の理由が薄弱ではないのか。／木子は元來情味豊かな傾向なのだが、今回は珍しく知的に変つて、いい勉強になつたのではないか。

※資料五十六 中村木子「目のない人間からの」両津小学校「PTAだより」 昭和二十八年(一九五三)九月十五日発行

『あな達は子供と言ふ者を少しも理解してはゐない、そして本当に子供等を愛してはゐない』なんてことを誰かに言はれたとしたら世の親達はほとんどないと言ふ様な顔をして憤られることでありませう。然しそれでは『子供と言ふものを知つてゐるか』と言はれたら誰しもがボカンとして本当に納得のいく様な返事をしてくれる人はまれでせう。「吾々は子供と言ふものを知らないのである」とルソオは言つてゐるが、子供を教育するためには先づ子供を知らなければならぬ、子供と大人とは全く異つてゐるのだから本当に子供の立場に立つて子供の世界、子供の實態と言ふものが理解され『子供を知る』と言ふ根本の立場から出発しなければ一切の教育論理も概念の上でのものであり砂上の楼閣と言つたものであらう。吾々は大人の学ぶべきことばかり考へてゐる子供が学ぶことの実態を知らない、子供の為にと思ひ、考へ、心配してゐる事が常に子供の中に大人を求めていて大人になる前の子供がどんなものであつたかを考へない為に、それ等の事が子供自身に取つては非常に迷惑であつたり過重なる負担であつたり、して返つて芽生えた若木を摘んでしまつたり枯らしてしまふことすらあるのである。／そこで先づ吾々は子供を知ると言ふことから思索の糸を手繰つて見よう。／「造物主の手を出る時は凡ての物が善であるが 人間の手に移されると凡ての物が悪くなつてしまふ」／これはエミールの冒頭に言つてゐる余りにも有名な言葉ではあるが、全く自然に發生するそのもの真であり善であり美である。吾は南瓜のツルや、露の若芽に自然の作るシンメトリーな美しさやダイ

ナミツクな律動美を感じ、卵や河原の自然に丸められた石塊に充実した健康美と空間への大らかな響を感じアートとしてのモダンスタイルすら感ずるのであるかくして善であり美である自然界の一生物としての子供は厳しい自然の戒律で中での活動が始められるのである。それは原始人として、自然児として自然の戒律に入れられない不善なるもの、美でなくて醜であるもの、真でなくて偽なるものはいつか滅びて行つたのである。即ち彼等の中で不善なるものは集団社会からの圧力でその一切の攻撃に亡び、醜なるものは異性を求めることの至難によりその種は断へ、偽れるものは自己内部からの不自然な方法の因果関係に於いて潰れ去つて行つた。吾々は時間的に人類の歴史として吾々の祖先の発展過程にこのことを見出し得るのである。然も彼等は自然児原始人としての中に、人間としての智慧を一人で具えて来たのである。これこそ何者からも与えられず、何物からも拘束されない神として智慧、仏家の言ふ般若の智慧としてである。そして幾千万年、智慧の累積に於て文明は開かれたと言へども吾々の智慧は一步だに進歩しては居らずむしろ複雑な社会圧力により己利的智慧の発達にともない純粹な原始の智慧は充分曇つて来たことさえ感ぜられるのである。即ち近代に於いて尚我々が原始への郷愁にかられ、宗教に心の寄り所を求めるのである。／吾々は特に芸術に於いてその事を強く知ることが出来よう。萩原朔太郎は「虚妄の正義」の中で次の様に書いてゐる。「人類の歴史に於て芸術は長い時代を経過して来た。吾人は古代ギリシヤの芸術から中世の基督教芸術を経、そして今日の近代芸術に移つて来た。我々芸術家は、上古から今日に至るまで、既に長い間生活して、歴史上に年を重ねた。そしてまたこの間我々には絶えず努力し勉強して来た。然乍らどこに我々の芸術に進歩があつたか？そも／＼古代ギリシヤの美術品と、今日の新しい美術品と、今日の新様式の建築物と、或は中世期の寺院建築と、今日の新様式の建築物とを、どうして誰が比較し、価値の優劣を決定できるか？歴史の各々の時代の芸術品はそれ／＼のユニツクな特色を持ち他によつて比較されない、独自の対等の価値で並立してゐる」と即ち彼等原始の人々は近代の吾々と並立して比較される可き、或はそれ以上のチエを人類の発生と共に有してゐたのである。全くルソオの言葉通り真であり善であり美であり、そして叡智に光輝いてゐたのである。然して人類の集団が複雑化すると共に彼等は自然に抵抗して醜なるものを善たらしめ、不善なるものを善として理論づけ、識ることに於いてそしてこの累積に於て生きることの合理性を求めたのである。この様に近代と原始とを考へて来て人間と子供とについて更に考へを進めて見たい。人間が先づ初に子供でなかつたら人間は滅亡する。子供が生れ乍らにして強大であつたらどうであらう。彼はその強大さの使ひ方、役に立たせ方が判る前に死んでしまふであらう。使ひ方の判らない強大さは彼にとつて無益であり有害でさえあり、人は彼を助け様とせず、彼は独り放任せられ、彼が欲しい物が判らない前に滅んでしまふのである。生れ乍らにして真であり善であり美である彼は一面大変弱い。そして力が必要なのだ。丸裸で生まれる彼

には又助けが必要であり無智な彼には判断が必要だ。生れ出た時何も持たない彼が生長につれて必要な一切のものを与えることが教育である。彼等の機能や器官の内部的発育は自然の教育である。この発育の如何に用ふべきかを教へるのが人間の教育である。そして刺戟する一切の事物について往驗、実験を行はしめることは事物の教育である。この三種の教師によつて与えられ各々異つた要素が互に矛盾した場合彼は悪くなり、バランスした場合彼は円満に善良に生活することが出来るのである。吾々は彼等を好隸や不具者や畸形にすることを欲しないのに、吾々が無反省に観念的にいぢくりまはしてゐる中に庭木か盆栽の様に畸形なオバケの様子供を無意識の中に作り上げてゐることが実に多いのである。／今日はスペースの関係で一応ペンをおくとして以下順次この問題について追求して見よう。(未完)

※資料五十七 吉原治良「ゲンビ展の感想」『墨人』十月号(改題第十八号) 昭和二十八年(一九五三)十月一日発行

(前略)造形性の追求から文字性の限界を超越してしまつてさへ、なお書の枠の中で革新を叫んでいるより、書から出発した平面造型として今日の非形象絵画と等しい場に立つべきことは私などもしばしば云つていたことだが、墨人の森田子龍、井上有一、江口草玄、中村木子、関谷義道の諸氏及びその他の人が敢然と壁面を共にしたことは極めて有意義なことであつた。このうちでは森田、井上、中村、関谷の四氏が文字であり、江口氏だけが文字に非ざる作品を提供していたが、共に他の非形象作品と並んで決して異質の感じは受けなかつた。しかし同時に、普通の書道展などでは相当風変わりに見えるであろうこれらの作品が、では至極平穩無事な作品に受けとれたことである。寧ろ何か脱皮し得ない書道の匂いが氣になつた。須田剋太や津高和一の作品は書道的な線を駆馳しているが、書の畑の人々より線は荒削りなところはあつてもはるかに自由な感じがあとに残る東貞英、島本昭三の作品は書道的であるがどうかはしらないが、線質に対する優れた、或は非常な関心が書の諸君より作品の上にはつきり定着されているように思うのだ。何か書の人々には如何に自由であつても書の味合いからはづれまいとする執心が強いのではないか。私はこれが逆になつた方がより大きな期待がもてると思うのだが。即ち如何に書道的な方法に立つてもよいから現れるところは広大な自由さであること。勿論書から出発して全然書らしいものでなくても立派な造型が出来ればそれでもよいことは云うまでもない。

※資料五十八 森田子龍「作品互評 中村木子」(図139、140)『墨人』十月号(改題第十八号) 昭和二十八年(一九五三)十月一日発行

⑦⑧中村木子 古文?(図139)木子の追求線上での仕事。いつもと違うのは線の簡潔さと緊張度。そのピンと張りを持った線に、書く前に所々紙を濡らしておいて書

いたらしいニジミを配している。左下隅を除いては線の数も適度だし、形も木子ならではの面白さを持つているが、所々のニジミにも拘らず、線がキーンと外に響いて内への沈みが足りない様に思える。たしかに前進した面もありながら、反省の足りなかつた部面もあるのではないか。／「山色新」(図140)草玄が半年余に亘つて追求して来て、非常な効果を挙げて来ているバックを施す手法に、ポツポツ追隨者が現われ、今年の毎日展でも散見したが、ここに木子もこの手法を採用している。やはり木子らしく甘味のある清さを持たせて、かなりの成功を示している。書の秀れた古典では、中間調を用いることなく、対立する白と黒の中に圧縮して端的に強力に効果を挙げているわけだが、この中間調のバックの採用は、余白をより具体的に認識することでもあつて、大いに試みられてよいことだと思ふ。実際余白の美しさに気付かなかつたりそれを発見する力を持たない人にも、極めて都合のよい踏台を用意したことにもなつて、草玄のこの試みの貢献するところは案外大きなものがあると思う。余白美の強力さに於て不満が出来たり、中間調の煩しさが気になり出した時に、これに乗越して、対立する白黒に帰すればよいのだと思う。次にやはり木子としては新しい試みであつたこ、二三ヶ月の直線の黒が、やはり澄んだ余白にうまく乗つている。殊に色上の部の周辺の白は美しい。新はや、平板冗長な感がある。

※資料五十九 中村木子「習作十五番歌合 選評」『墨人』十一月号(改題第十九号)

昭和二十八年(一九五三)十一月一日発行

この十五番歌合せは私自身勉強不足のこととて、その為選をするに當つて非常に苦んだ、致し方なく編集に間に合はないのを承知し乍ら、一度自分で習ひ直して見てから、あらためて選をしたようなわけです。／諸君等も習つて見て十分に御判りの様に草書とかなの合の子の様であつて、強過ぎるとギラついてくるし、かなの概念の様なものが頭にコビリついていたら、ダラリとしてとんでもないものになつてしまふ代物だ、それ等の点でAの作品(有一)にはまいつた。そこへ行くとBの作(翠波)に線も浅いし表面的なギラギラしたものがチラついて根底がグラついていて。C(華空)は線質が安易でボカーとして空間への響きも広りも稀薄だ、然しこの三点は今月の習作中の特選級はゆるがない。／この三点に肉迫するものとしてD(青麦)があげられる。空間への響の高いことと、余白の美しいことではC以上だが少々小味で神経質でこれでは見ている方がつかれてしまふ。E(泰山)はC系の作品で線もあまいし、動きも小さい様だ、或はF(中隠)の方が大きい仕事をしているかも知れないがいづれにしても小甘くたるい。G(草玄)は岐阜の河野女史か?、気まま一ぱいに作つて好感が持てる。勿論これをこのまま習作としていただく訳にはいかなしい追求も足りないが、ここからは又別な世界が生み出されるであらう。創造の息吹が感じられる。／H(義之)も長鋒羊毛を駆使して今後の活躍が期待されるし、――又大変意欲的でたのもししい、これからがいよいよ本当の仕事が出来そうだ。／先にものべた

通り兎に角今日の課題は難問で仲々やりにくく、こなすに相当骨の折れる仕事だ。それ丈に、そして平素あまりやらないものだけに、皆やり甲斐があり、手ごたえがあつたことと思はれる。只全作品を通して仲々安易に漫然と書かれている人々が少くないのは、折角の編集子の苦心の課題が、無価値になつてしまつて惜しい次第です。私自身なまけていて特にその様なことを強く感じたせいかも知れないが、やはり与えられた、一つ一の古典に対して、謙虚に、好ききらいなく勉強すると言うことはやはり大切なことです。

※資料六十 中村木子「展覧会雑見」両津小学校「PTAだより」昭和二十八年(一九五三)十一月二十日発行

絵画であれ、彫刻であれ、書、工芸であれ我々の視覚に訴える種々な作品が、仮令美であらうと醜であらうと、それは別として制作すること自体に於いて作品の価値がある訳はなく視られることに於てのみ、作品として生まれるのである。これは単に作品のみに限らず、一切の自然界の現象に於いても、その美醜の判断と言ふことになる、その实在の認識と言ふこと、美醜の感得と言ふことが同一ではあり得ないのである。ともあれ、作品が制作したことにおいて生まれると言ふことによつてのみ作品として価値づけられるのであつて、その作品を視る機会としての仕事の場として展覧会の存在価値を第一に認めなければならない。／第二には作家の社会と作家以外の社会との、／或いはこの作家と、一般市民社会との交流と場としての展覧会の意義も亦大きいのである。／このことに於いて社会の美意識は高揚され、美術文化の向上がもたらせられるのである。／そして作家の側から言へば、この機会に於て、口にも筆にも言ひ、そして書き表せない内面的な、色々の事が、カンパスを通して、ブロンズを通して一幅の額縁を通して他の社会の人々と語り合へるのであり、その会話の両方からの通訳として一方美術評論家の必要性が生じて来るのである。／ところで、これ等は、展覧会の一般論であつて、小中学校での展覧会と言ふことになる、この他に種々の条件が加味されて来ることになる。／即ち学校での展覧会に於いては作家の立場である生徒、児童が一つの学習過程にあることであつて、その作品そのもののズバリで、作品の価値判断することは早計とせねば、その教育過程である所属学校での展覧会としての意味を成さないことであり、その為には、各々の先生方が会場にゐて必要な説明を行ふことが望ましい。／又、立場をかえて視る方でも、一般市民と言ふことよりも、父兄の立場に於いて、見ると言ふことであつて、それはその画かれた、作られた、書かれた作品を通して子供の、かけ引のない現実を知り、先生の説明によつて、どの様な学習過程か、又他の子供との比較に於いて学年、学級を通じての子供の位置を把握せなければならぬ。(作品の見方その他については誤つた今までの概念から脱皮せねばならないがこの様に学校に於ける在校児童の展覧会と言ふことは、他の展覧会以上に厳密であり真でなければ

ならないのであつて、運動會、その他行事の併催と言ふことは私として最も許すべからざることであつて、その様な行事は全く別の機会に持つべきものであり、これは運営如何と言ふ様なことでなく、本質的な問題として学校自体でも、もつと真剣に考える可きだと思ふ。扱學校に於ける展覽會の意が学習過程の一環としてあることと故個々の作品について批評を行ふことは控えなければならぬので、ごく大ざっぱな各科目別の批評を試みることにする。／（一） 絵画、子供の作品で、本当に子供を知る為には、絵画と、粘土細工が一番おもしろい。／我々の生感の中で常に分科と統合が繰り返されてゐるが、特に未分科の状態での統合の姿にある低学年児童、幼児、精神薄弱児の作品は、数の次の分科の結果の統合の状態にある作品との関連性が見出され、尊くも楽しいものが多い。一、二年生の作品、特に一年の作品に佳品が大分見出されたのはこの結果である。しかし素材の与へ方に相当無理のあるものも尠くなかつた。之は教師側で充分反省すべきではなからうか。三四年は分科活動への第一歩をふみ出した時代であり相当リアルな考も入つてゐるがそれだけに相当な力作もあり、特に四年生の作品の展示に新しい試みの行はれたことは誠に喜ばしい限りだ。この様な試みは何回でも、繰返して試む可きであり、たとへそれに失敗があつたとしても、我々は寛大である可きだと考へてゐるし、各自が好意ある助言が成さる可きだと思ふ。只こゝで素材の選び方に一考を要するものが見受けられた。／五、六年の絵は少年期の分科活動の一番はげしい時だけに、作品として統合することは仲々むづかしいらしい。特に四年間の不透明絵具から透明絵具に移つたことも、絵画教育の上から大体無茶と言わなければならぬ。然も前記の様に未統合な分科の状態においては尚のことだ。油彩を用ひるか、或はバステル、とかテンペラ絵具を使はせ度いものだし、どうしても出来なければ墨汁での非形象絵画を行ひ、造型の原理への体験を成さしむべきだ（これは要具の面のみでない）五、六年を通して一番気にかゝることはデッサンの事である。いゝ加減な師範学校や美術学校でデッサンの必要をたゞきこまれた先生には、とんでもないデッサンを強行する。／それは始めにも述べた通り、自然を、或ひは静物を見ると言ふことの根本の態度からの問題であつて、実在せる物を科学的に眼の網膜に写し、神経により大脳においてその実在を認識すると言ふことは芸術教育のジャンルでないことを知らねばならない。画かれたリングと実在するリングが同一でないことは判りきつたこと乍ら、それが同一である可く価値判断するの愚を反省すべきである。／私の子供の頃麦せん（マ）の画いた酒の切身の画が一幅三千円もして実存する鮭が一片五銭か三銭で、然も後者の喰べられるのに対し、麦饅の画いた鮭は喰べられないと言ふ笑話があつたが、この考へ方が今でも、然も文化人と言はれる様な人々の頭からもまだ解決出来ないまゝ、であることは全く嘆かましい。実存を認識することは智性であり、美を創造するには感情であることの根本の態度が失はれてゐるからだ。／リングをデッサンさせたとしても、認識されたものを画かせようとするから、その平面に画かれたものは天然

色写真より正確には出来ないし、その味は実在するものに比較出来ず触感に平板でしかあり得ないのであつて、やゝもするとその様な矛盾が行はれる所に現在尚絵画教育の時代遅れが存在するのであらう。リングをデッサンすると言ふことは第一は我々の視覚を通して、型なり色彩なりの美醜を我々の感覚の中で創造し、第二にそこに創造されたもののそのものをより効果的に表現しなければならぬのだ。子供の眼からは或ひは四角なりリング紫色のリングを彼等の美感覚は創造するかもしれない。／それは誰もが否定出来ない。そしてしていけないことなのだ。それを認識された智のみで教育するところに絵画教育の隘路があるのだ。／（二） 書、所謂毛筆による書は高学年にしかなく低学年では硬筆だけによつてゐるが、もともと書教育の場合小学校においてはどの様に手をつけてよいか判らない実情であらう。／これは文部省で国語科の中に含められて然も正しく美しく、と言ふあいまいな言葉で規律され恐らくこの様なことをきめた文部省の役人自体どうしてよいか判らないことだらう。／私は小学校の書き方は硬筆により、正しく早く、読み易くと言ふ風に改められる可きと思ふ。その為には、毛筆で書いた文字や、これより発展した硬筆の手本は全く前記の目的から外れてしまつてゐると思ふ。／一定の枠の中で一ぱいに各自子供の筋肉の発音状態により、直線を主体にしたものや、曲線を主体にした物と言ふ風に分け、然も各自単位の書写にあたつてはその時間も記録せしむべきであり、そうしたら学校で習字は甲だが手紙の字は全く駄目だと言ふ様な卒業生は生まれないだらう。それなら毛筆はどうするかと言ふとこれは造形科、又は芸能科の中で文字を素材としたものとして低学年よりこれを施行すべきであらう。／今度の児童の書作品は子供の夢が低級な手本の制約を受け全くグロッキーになつてしまつてゐるし、子供の夢を表現する適当な技法上の指導が全くなく、これ以上悪いものはない様な手本の目にみえない制約の上で子供も教師も手も足も出ないと言つた処だらう。／（三） 工芸、他の面は略すこと、して粘土細工の面が余りにも少な過ぎる様だし、素材のあて方が丁度三月のお釈迦様のシンコとしかうけとれない。全く笑えないナンセンスだ。／この方も低学年からずつと続けて作らす方がよく、素材としてはリアルなものでは動くもの（むしろ表情の多いもの）を選び度い。／粘土細工の中で壺は一応成功してゐる様だ。あの様なものもよいが人の顔、父、母、先生の顔、立像、坐像等子供の夢には色々あらう。すべて大胆に自由に取材させて、然も小さな自分の考へや、大人の尺度で計ることなく、みづから彼等の世界に飛びこんで、彼等と一緒に暮らしてやる事だ。子供から学ぶと言ふ態度を失つて、子供を教へると言ふことの不可能なことを先生自らがよく知る可きだ。

※資料六十一 中村木子「書作品選評」『墨人』十二月号（改題第二十号） 昭和二十八年（一九五三）十二月一日発行

今月の数多い作品を拝見して、割合に腹ごたへのある作品の尠なかつたことは、何

をおいても先づ淋しいことです。「新しい書芸術の課題」と題した、有田光甫の論説に、「従来の技法や書の伝統的な空間構成に対する反逆云々」と書かれているが、伝統的なもの、或いは一切の社会的な既成事実に対する反逆、一切の自己否定の上に打ち立てられねばならず、我々の仲間では一番いまはしいとされている、類型化と言うことも、只単なる模倣とか、横すべりとかと言うことは、当然排除されるべき事ではあるが、自己否定への具体的な段階としての方法である場合には、止むを得ないものとも考えられる。この自己の内面的なものへの反逆と言う、純粹な自己革命の進行過程前での、外部的などんな在野的、革新的表現が成され様と、それは所謂在野的、革新的、前衛的アカデミーと称する外に致し方あるまい。／今月の中では、関谷義道の「飛翔」の一作に、モタモタした従来の義道が近頃一作毎に、或いは燃え、或いは澄み、日毎に純化して行く人間義道の生成発展に、賛意と喜びを送り度い。特に今月の飛翔は高く清く澄んで、空間も静かな広さと、深い智性の輝きを持つている。只線に喰入る抵抗が足りないのがこの作を案外軽いものにして一因ではなからうか、これと似た系列のものでは若林白楊のがある。一見線質から抵抗感はこの方にある様な気がするが、これは淡墨のニジミから来る抵抗で、線質そのものではなく、やはりスカッとしてしまつてゐるし、白の清澄の度合も義道のそれに比して響いて来ない、義道の現代詩の方の作品は何かしらチグハグなものの様だ、こゝでは近代感はその個々の素朴なフォルムによるものであるが、それは所謂近代そのものの原始への郷愁に外ならない、然し義道のこの作から受けるものは原始の仮面をかぶつた近代であるところ、この作のチグハグさがあるのではあるまいか。／これとは方向の異つたもので好感のもてるもので佐藤中隠のがある。ホワイトを使つてうるおいを持たせること、下に流れる構成は、何か生暖いものをほのかに感じさせる。最後の点は大きい方がよくきているが小点に整理が足りないし印に至つては全く無神経だ。山藤耕子の紫外線は上部の此部と糸の堅線に無理がある。中央部右へふくらんでゆるやかに流れるカーヴは美しい、出色の出来である。感覚の正反対のものに今井満里の「福」がある。福と読むらしいが無論読めはしない。洋紙の上に淡墨で書いて上からおさえつけたものだが、オートマチックな濃淡をねらつたものらしい、全体の構成が厳しくないと線自体が甘いものだからグラケてしまう、もう一工夫あつてほしい様な気がする。／浅野宝造の緋模様の歌もテーマとしては面白い。特に字を白抜きにした所の方が、しかも量と拓本が半分位ハッキリ出ている方がよい、この様な作品は白地と黒地の量の比例と分割のコントラクションが問題になつてくる、追求を重ねた知性による分割と肉体の内部から臭つてくる人間的な野生のマッチが大切だと思ふ、此処からは新しい泉が湧出ることだろう。／笠井静夫は完全に紙そのものに負けてしまつた、第一字目の終りは筆をもてあまし、左方の字は観念の中の仕事に終つたことはおしい、紙を余り身近に近寄せないことも一つの方法ではあるまいか。／藤城小年の古文による構成は先月に引續いての追求の様だが、線がモロク、甘く、

そして枯渇している。／線にもつと潤があつてほしい、構成も直線と曲線とがチグハグし有機的な関連性がない、曲直二線がどの様に交り、紙面処理するかが今後にのこされる課題であらう。淡墨による悠々天壤は山田義之の作、柔い線につ、まれて白がふんわりと暖くも美しい、下の壤が一番よく整理されている。始めの悠は少しモタついた。／斎藤藤光の歌を半切にものにした松梅繁生は、線もよくきいてしまとまりも悪くない、然しこれから何が出るか期待がもてない、坂部桃丘も数点の中からこの一枚を択んだがこれもやはり惰性の中で仕事としか受けとれない。むしろ技法上は未熟であつても、矢橋幸一のいろは歌を高くいたゞき度い只これにも何かとけきらない不完全燃焼のまゝで残つてゐる様な気がしてならない、三国晴康は私の県の大先輩でもあり、この年齢層でこの仕事を勇敢にされることには敬服の至りであるが、私はこの人に書的なもの以外から何か造型の美と言うものを汲取つてもらい度い、この作はこの人としてはいい、出来のものだが他のものは皆ピンと外れている様だ。上部のじみの方にボリウムが感ぜられるが下部はコチコチでたまらない、上の余白の白がこの半分位に切り捨てたらまだよかつたかも知れない、これ位の選にして後は個人に送ることにするが冒頭に述べた通り自己の内面に向けての反逆と否定がより強くなされなければ前述の様に革新的アカデミー、在野のアカデミーの発生と言うようなことが気がかりでならない。盲評多謝。

※資料六十二 中村木子「随意部選評」『墨人』四月号(改題第二十四号) 昭和二十九年(一九五四)四月一日発行

多忙にかこつけて、しばらく習作を拝見していなかつたが今月の習作を見せていただいて失礼な申分かも知れないが、一寸がつかりさせられた。／第一に無気力といつて、位、制作する、習作すると言う根本の態度に多くの疑問があり、不満がある。何のために、何を目的にと言ふことが確立していないこと、換言すれば芸術すると言ふそのこと自体に何かチグハグな、割切れない態度であつて、その為に腰がフラフラしている。芸術することの真実が理解され、実践されなければならない。／第二に、前述の芸術への根本態度が明確に把握されない面からして内にあるものの、精神的面における整理が充分に行き届いていない。こゝでも人間性が強調されず、すこぶるアイマイである。作品を通して作品の内なるものから、人間を通して人間の奥底にあるものへの交流が稀薄だ。その為に第三として技巧の統一がなく、見てくれ式であつたり、昔からの手習式であつたり、イミテーションであり、類型化されたものであり、個々の絶対の自由と、真実の場としての墨人の習作としては誠に無気力の言につきる様だ。／廿八年度の日展第五科で某芸術院会員が、審査員や依頼作家の処に使をやつて、自分の好みの作品に作り直すことを申し入れ、申込まれた方でも諾々として書き直したと言ふことだが、どちらもよい笑ひ者と言ふ外はないと思つてゐる。亡くなつた大沢さんだけがはつきり断つて不出品したそうだ。で世間

では大沢さんの態度は立派と言つてほめている様だがこれもおかしい話で、そうするのが当然のこと、ことさらにほめると言うことには、それだけその人、その社会が墮落したことだ。大沢さん冥府で苦笑されていることと思う。墨人の今月の習作も一寸ひど過ぎる比喩かも知れないが、日展作品を芸術院会員の御思召通りに書き直すことの根本態度と同じでないとしても遠くないことが感ぜられることは何としても淋しく、無気力さには腹立たしくなつて来る。原理を把握すること、実践の為の人間の内面的整理が大変むづかしい大切なことだ。思いつくまま書き続けて個々の評がとうとう出来なくなつてしまつて申し訳ない。／重ねて言うが、自分を知ると言うことと、客観的に自分の魂を見出すことのむづかしさを近頃つくづく感じている。

※資料六十三 中村木子 「基礎造形部 三つの三角形による構成・定規による 選評」『墨人』五月号(改題第二十五号) 昭和二十九年(一九五四)五月一日発行

基礎造形と言う一つの部門を通しての追求の場を会員に提供して、造形美の原理的なものを発見し、認識するこの部が、昨年の墨人誌の編輯組換を機会に発足し、既に半歳を経過して所謂旧来の書道概念から大きな飛躍を上げたわけであるが、然し又例月の此部の作品を見る時に、その部門で必ずしも活発な活動をしているとか、或は始めの計画以上の成果が見られたとか言う様なことは遺憾乍ら考へられない、然も中には此部の課題が○とか△とか矩形とかとして出された場合、何か今までの文字を指示された課題創作と一緒に考える向が大部分であるが、基礎造形の仕事が文字の代りに○とか△で作品するのではない、したがつて此方の仕事はあくまで科学的であり分析的であつて、○はコンパスで△は定規で、しかも場合によつてはその△の角度をも指示することもあるべきで、それは幾何学的に作られた○であり、△であらねばならない。／例へば先年日展で上田桑鳩の「品」と言う作品があつたが、これはあくまで品と言う作品であつて○や△を三ヶで作つた基礎造形の部門には入らない。○や△の基礎造形の上に立つて、それ等の基礎造形の追求の体験をおし進めることによつてあの様な作品が生まれる場合は有り得てもあれが即○△の基礎造形であると言う様なことはない。これらの認識がはつきりしないと折角この部門の持つ意義があいまいになりピンポイントが外れてしまうのである。今月の作品は応募点数三点と言うことは誠に淋しい限りである。恐らく定規による三角形三ヶと言う課題は実際むづかしい課題だが、むづかしいからこそ本当の勉強は出来るのである。むづかしいものは敬遠して、安易に作品すると言う態度や妥協と言う美しい言葉の陰にかくれて自分を掘り下げることが寛容であつてはならない。今月の課題も単に定規による三角形とだけあつて、定規を使つて各辺幾何学的直線だけを要求したものが四十五度角、三十度角、いづれでもよいのか、この点あいまいだったことは黒星だったが前者の任意の角度の直線的な追求をおし進めたものは草玄一人で他の二人

はい、加減な三角で構成してしまつた。／兎に角他誌に例を見ない此部の意義は誠に重要なもので、折角の此部を会人、同人共同の自己研鑽の場として大いに活躍してほしいものである。個々の作品の評も少し書き加へ度いがスペースがないから不本意乍らペンを置く。

※資料六十四 「モダンアートフェアを語る 座談会」『墨人』六・七月合併号(改題第二十六号) 昭和二十九年(一九五四)六月一日発行

(前略)津田 筆者註 津高の誤り) この辺で書道の方からどうぞ。／中村 今度の展覧会で十の部門に分けましたがね、僕も今度の展覧会を見てね、さつきもお話にあつた様に共通して居るといふ部面は所謂芸術しているという根本の立場が共通して居るんですね。従来の展覧会は所謂リアルな物の考え方から、文字の場合だつたら読ませる、読める人が居つても居らんでも読ませる。絵画の場合だつたらリングならリングを見せるんだということなんだ。今度の場合はそうではなくて、とことんまで自分自身を表わして出すんだということですね。こういった場合に書とか絵画とか、或は彫刻とかいふことをね、ジャンルを定めて表示する必要があるかどうか。僕はそういった必要はない様に思ふんです。／須田 ないね、それは。／中村 書の場合に於ける文字性なんということも、近代人に共通に読めるという普遍性があつた時初めて文字性があるんでね、読めないものに読ませる普遍性はないと思ふんです。／須田 だからその点では造型という部門で一緒ですね。／吉原 結局はそうなんつてもいい、んですよ。たゞね今いるんなジャンルが集まつているという形を見せた方がいい、からね、あつた方がいい、んでね。(笑声)／(中略)／中村 こういう展覧会をやるときにもね、わからないという質問がよくありますがね、さつきの別の会で須田さんが教養という言葉を使つて、中村さんから視覚的な教養と修正して話されたんです。この間ね岩田専太が挿絵で賞を貰つた時の談話にね、挿絵を描くのは牛太郎で、小説を書くのはお女郎さんだと、牛太郎はお客を引つ張つて来ればいいんだ、あとの手練手管は小説を書く人の腕にあるんだと、こういうことを言つていましたが、そういう立つた立場で現在にアツピールするということは、現在の庶民の最低のところを基準にするのでなく、近代に生きる又生きようとする努力する人々に対するアツピールであり、同時に作家の普遍性は我々が現代に生きて居る我々であるといふことの自覚に於てなされることこの普遍性であつて……。／津高 それは勿論そうですよ。／中村 決して衆愚に対してのアツピールではない。／須田 そうですよ、だから週間朝日の表紙で向井潤吉が一等になるでしょう。あれに推薦する人達の層はミリーチヤンハーリーチヤンですよ。本当に知る部分の人は投書してないですよ。あ、いふので計られては困りますね。／(中略)／植木 結局問題はね、バラの花の話をすればね、恐らく誰でもバラの花を見なくても、バラというの美しいと感じているわけなんだ。しかし造型する場合にはそのバラが何故

美しいかと、つまり「が」という言葉があるですね、その「が」というものをどういう風に取扱つて行くかということに問題が起きて来るんです。我々が街を歩いてこういう店からレコードが聞えて来る、ジャズなら分りますけど、古くても、メロディーに素直になつて心が躍つて行くわけですね。ですからその人が裸になれば必ず分る問題ではないかと思うんですけど。／中村 バラが本当に美しいということとは、自分の視覚を通して体験してくれたい、んです。バラは美しいものだ定義づけようとするところに無理がある。／須田 ところが表現の場合にはね、バラの美しさを自然のまゝを借りないでしよう。我々は抽象的なもので表現しますね、そこにね、内と外のつながりね……。／植木 だからそれはね、抽象的に表現するということをいうでしょう。我々だつたらそれで言葉が通じますがね、一般の人は何故抽象的にしなければならぬかというんだ。(中略)／森田 従来の書と違うというだけで、あの作品にはそのことが効果を挙げてより苦渋の感じをにじみ出させていますからね。その辺のお気持ちを伺つて見たかったです。／中村 あの場合、黒に接した白とその次に来る白との間に相当距離があるんです。白が黒を制約した感じはないですね。／植木 それは正直なところですか。もつと極端にこびどくやつて頂いて、んですよ。／中村 え、勿論。だけど黒と白の分割が妥当であるかどうかには一寸疑問を持っていますけどね。／植木 私はさつき森田さんの言われたことね、非常に興味深く聞いたんですけどね。／(中略)／津高 僕はそれは絵画以前の問題で、作画する時に理論なり苦悩なり各々持つている苦なんですね。作品に定着させた時にその人間なりに定着させているんですよ。植木さんがいう様に吉原さんの場合はそういうものがそのまゝ、密着していて、須田さんと僕が当り前にやつてることが直訳的に解されると危険が伴うんではないかと思うけどね。／中村 社会的に大きい抵抗を感じた場合にその作品がそういった作品であればよく、そうでない場合はそうでないことが本当ですね。／津高 僕等のいう社会というものは限られた現象面としての現在の二大陣営の中に挟まれている人間という現実的な社会とは違うんですよ。僕のような無償行為は今生きている現状を現象的に見て人から見れば遊びかも知れらん。(中略)／須田 それは墨人会は他の書家に比べたら全然違いますよ。／植木 日本人共通だと思いますがね、私もそうなんです、私去年近代美術館で近代彫刻展があつたんです。その時出品して行つた時に、向うの作家の彫刻が並んでいるのを見て、我々のものが、自分としては味を殺しているつもりなんです、向う作家と並べて見ると如何に味を大事にしているか。これはやはり日本人の宿命だと思うんです。非常に勉強になつたわけです。／津高 そのまゝ、でいいんじゃないですか。／植木 けどね、一般に味に溺れてしまつているんだ。／津高 味というのは取つてつけたものでしょう。出て来たものは味ではないですよ。／植木 それは日本人の宿命かも知れないけどね、しかしそれをむしろ。／吉原 味というのは拘泥されたものだけ。／津高 味はあるのが当然であつてね。／植木

だから日本人の生まれつきのものでしょう。しかしそういうものを知つて、生かそうとする行為、それをいかんと思うんですよ。／津高 それはいかん。／森田 それに頼るかどうかということですね。／植木 そうなんです。／津高 クリマの問題ですよ。／中村 東洋的な一つの味ね、所謂持味ですね。ところが従来の書の世界にはね、持味の外につけ味があるんです。つけ味をなくすることですね、持味は持味なんだ。／植木 そうそう。／中村 だから持味のあるのは当然なんだ。従来の書の行き方はつけ味に頼り過ぎたということですね。／植木 それなんです、問題はね。／津高 我々がいくらヨーロッパ的になろうとしたつてね、なれないですよ。／(中略)／吉原 非常に自由な新しい書が、絵画という世界に入り込んで来て非常に何か不自由な殻を持つて様な気がするんだけどね。／中村 書のつけ味が邪魔になつて、こういう風に払いのけられるかということがね、僕は思うんです。／津高 それにいゝ、たいのは新しい空間の受け取り方によつて出て来ると思うんですね。／吉原 あらゆる自由を示していかなばならんんじゃないかなあ。自由な精神が示されるということが最も大切なことだと思うけどね。それより先に型とか、自由なるものを抑制しているものを感じるんですよ。我々でも余り口はばつたいことは言えないけどね。／中村 時間性ですね。それをもつと振り切ることですね。吉原さんの作品のザラザラした感じも、時間性への抵抗ですね。書の場合の莫山君の作品がサツと抜けてしまふということね、そういう時間性に溺れて来たということですね。もつと要約し、場合によつては振り切つてしまふことが大事ではないかと思ひますね。／津高 批評精神ですね、客観と言うことが。／吉原 書の持つ時間性の素晴らしさについては世界的に注目されているところだけだね。／中村 それを僕等が否定したところに初めて、本当のものが身につくんだと思うんです。／須田 それを否定したらどういう形に表われますか。／中村 そうすると従来の時間性に対する観念が、体験を通しての自覚になるんですね。／吉原 どういう形で表われるか、それは分らんけれどもね。それについて疑念を持つて考えるということによさがあると思うんでね。／中村 観念でもつて知つたものを、新しく発見するということね。／吉原 それを須田君の問に対する答がはつきり出なければ、芸術は無味乾燥かも知れないし。／有田 今書の方がそういう方向に歩みつゝあるというか、そういう方面を求めなければならぬ時だと思うんですけどね。／吉原 素晴らしさに頼り過ぎてるんだ。／有田 今の西洋の動きとは反対みたいになるんですけどね。／森田 過去を振り返つて所謂書的なものという線の上で書を作るんだなしに、書的でないもつと自由な広い場で書が出来ていゝと思うんです。／吉原 そう、線質なんかでも走る線だけに限つたものでないしね。あらゆる大海に泳ぎ出た様な喜びが書家から出発した人の作品に出て来いゝ、と思うんですけどね。／井上 そうするとこれから書を初める人のやり方ですね、我々の様な轍を履まない様に考えなければならぬと思いますね。／中村 そうでないと思うんだ。それを抵

抗して脱皮する時に初めてあれがあるんだよ。／須田 これからの人のことを心配せんでもね、彼等は又彼等の道を行きますよ。古典を通過しなければいかんとかそんな老婆心をする必要ないですよ。／森田 木子の脱皮するために古典を通過するみたいな言葉だけど、そんなことも考えなくてもい、んじゃないかね。／中村 通過するとかしないとかでなく、体験するものは充分体験しないといかんということです。／森田 今までの書的なものを体験せんといかんというの。／中村 いややそうでなく。／津高 絵画のデッサンの問題とよく似てますね。／須田 しないならしないでい、と思う。そういう風に生きてるだろうと思うね、もう。／(中略)／吉原 僕は永年こういうフエアの構想を持っていたんですよ。今度実現してね、その線が期待したところとそんなに変わっているとは思わんですよ。非常にみんなが集つて来た上に流れるものね、これは非常にうれしいんですよ。／須田 絵の方は神戸展の方がよかつたね。／吉原 個々にいえばそういえるかも知れないけどね。／須田 絵がよくなくなつたね。／森田 印象が弱いという感じはしましたね。／中村 あ、いう風な企てによつて自分の立場を見極めることが出来、見ることに聞くことを通して反省し交流して行くということ、これは収穫ですね。(後略)

※資料六十五 津高和一「中村木子小論」『墨人』十月号(改題第二十八号) 昭和二十九年(一九五四)十月一日発行

正直に云つて僕は中村木子を余り知らない、墨美、墨人、の誌上に散見する作品と、現美展、モダンアートフエアの座談会等の限られた機会である。／だがこゝで云えることは交流の時間の長短が批評の最大要素とも思へないので、思切つて僕は僕なりの中村木子論を書いてみることにした。／一言にして云えば彼は技巧のない生のまゝ、だということである。これは良かれ、悪しかれ、彼の風貌を伝えてくれるのである。トットツと聞かれる言葉にしても意余つて何かを發しようとする意図は解るのであるが、的確な成熟した言語となつて表現されないものが感じられるのである。／内に燃える火を蔵していることの強みを感じる、そんなものを伝心さして行くというのも素朴な人間から發散している彼だけの空氣の輪があるのである、この空氣の輪が彼に作品を書かせたり、シヤべらせたりしているのである、誰かの誠しやかな空氣圈内に入ろうとしても無駄というべきである。そこからは何も引き出せないだろう。彼と接しているとこんな風にラフな空氣で包まれる。／作品も人間とつながりを持つていて親近感を漂はせている、計量された近代のメカニズムの中にあつて彼のユニークな状態がエキゾチズムに流されるなど僕は云いたいのである。／中村木子は才人ではないのである、体をハツテつかみとる人だと思ふ、現にその痕跡をみせている、これは彼の身上である。／シヨセン芸術が万人共通なるものに頭初のメドを置かないと脱出して行く何等かのXへの可能への願望、書は個々の何等かの解答を得んとしている。／記号だけではない、人間の定着をめざしている書に、

どれだけ従来の書道と異つた、生ずいている人間像の反映が見られるかといふ前衛的な仕事に、記号的な制約を乗り越えて行くこうとしている彼等のグループこそ共感を呼ばないではおかないだろう、誰に書の限られたものから非形象絵画が対面している新しい空間にまで指向して来ている、従来の書の材質にコダワラなければ中村木子にしてももつと氣楽な仕事が出来たのではないかと思ふし、又反面この制約があるために面白いとも思えるこの課題を先づ意識として底辺に持たない限り趣味的な従来の書から脱する出ことは可能ではないし、書が自在に發展し、単なる書といふ位置ジャンルに止つてしまふ、書でもない、絵画でもないものが生じて来ても結構それで存在理由のあるものにはあるわけである。／なんだか中村木子論が書への一般論に変貌しましたが、中村木子あたりこれにぶつかつて行つてほしいと思うこと切である。

※資料六十六 「墨人展を語る」(図156～158) 『墨人』十一月号(改題第二十九号) 昭和二十九年(一九五四)十一月一日発行

(前略) 井島 吉原君の思いではきつと文字を否定してもかまわないじゃないかと。實際問題としてあれは読みたくなる、現代のかなと漢字ですね、つい読まされてしまふですがね、ある程度まで。で、むしろ僕は読めなくともあの美しさが打出せたらそれで僕は満足するだろうと思うんですがね。まあ文字である限りは読みますがね、大して気になるといふわけでないけど然し読みづらいことは事実ですね。それだけです。／中村 全然初めから文字を素材にしても、誰れが見ても文字であるかわからないという場合には詮索する気持ちになりませんが、見る方の立場から言つて。ところが読める可能性があるんじゃないかなあということになると、矢張りこの人間の習性として詮索して読んで行きたいというのが人情ですがね。／吉原 そうそう。それは確かに。その話をしているんですがね、今。／(中略)／井島 何ぞ高くない作品なかつたかな。木子君のものなんかどうや。／吉原 木子君のはね私敢えて真黒けの絵(図158)を期待したいね、あれの方向を取りたいですね。あれ一番失敗だと思ひますわ、一番失敗だと思ひますけどね、然し僕はあそこから何か生れて来そうなきがするんだ。あれは過剰で行き過ぎでもうつぶす一歩手前まで描き込んであるわけですけども。そして従来のものに似てませんわ。何か規準を設けてやつた仕事ではないですね、あれは。そこに僕は期待を置きたいですね。で他の作品の面白いけど、文字が入つてから毛嫌いするのは決してありませんですけどもね(笑)／井島 然し何となくこれチグハグだと思ふんですね。これやつぱり文字入れなければならなかつたかな。／吉原 びつたりいつてませんな。／井島 びつたりいつてないんですよ、ものの形と文字がね。／吉原 私はどちらかと言えば横にこう(木の拓本の方)(図156)した方が好きですわ。この方はまだ板と

文字とがや、渾然と結ばれていると思うけど、石の拓本の方(図157)は一寸賛成しにくいですね。／井島 あれ、木子君、やつぱりあの大作に傾倒したわけなの、／中村 とに角仕事は黒いやつでとことんまでやつてみたいと思つたんです。／吉原 ただ会場で井島さんが白い紙の上にベタベタ黒を塗つただけみたいだなあと言はれたけども、確かにそれは多少皮肉なのかも知れないけども、やつぱりそういう感じはありますなあ。／中村 白と黒がばらばらです。／吉原 つまりどこまで行つても白だという、白が一寸汚れてあるという感じね、黒と白の構成じやなしに。だから弱いですね、見ていて。あれだけ強そうであり乍ら何がすかすかしたものが感じられて来る、というような点。写真でいうハイキー、ローキーという、ローキーの方……全体が黒いから余計そんな感じがするんですね。／井島 永い間書の人達は白は生地でその生地の上に黒で字を書くというような無意識の心構えが育つて来たのと違うだろうか。それがだんだん黒、白の問題なんかが目されて来て、それはまあ、α部なんかが非常にその功績をになつたわけだけれども、そこ迄来たんだつたら、書くのは黒で書くんだけれども黒で書くことによつて白が書かれているというね、そういうふうな面がもつと強くなつてもいいんじゃないかなあ。それであの真中の作品が僕はまあ平板だと言つたのはそういうふうな意味で言つたんだし、この二つは板の方がいいと言うのは私も同感だけれども、もう一つこう何かこの単に拓本をねらつたところが装飾的な効果を上げるような、然し又見方によると、それは造形的なねらいであつたんで字の方が装飾的な効果を上げているにすぎないのか、何かそんなふうな一寸こう妥協的なあいまいなものを感じるんだ。僕は偶然これを見て居つて、あしでを考えたんだけどね、あのあしでというやつは絵の処と書の処とあんなもの何の別にも必然的なつながりもないと僕は思うね。一寸それに似たような小細工みたいな気がせんではなかつたのだから。／中村 本当はね、黒いやつ(図158)、あれでとことん迄打ち込みたかつたんです。こういういろいろ条件が變つてみると違つて来るんでね。／吉原 あれはまあどちらかと言えは失敗ですね。／中村 ええ、／吉原 失敗の作品だと思ひますけど、私は失敗とか手ぎわよく出来ているとか、そういう問題ではなしに、どれほど打込んでそして何か発見しようとか、少しでもそれがあれば私はとりたいたいと思ひますよ。何か少しあいまいさを感じますね、文字の入つてる方はね。／井島 そうでしょう。／吉原 どういうふうに見てよいのか少しとまどいするようなところがありますね。／井島 一寸何というのかな、曖昧と言ふかなあ。／趣味に流れちやいかなと思ふな、もつと命がけでやつてほしいと思ふな。そういう意味から言へば黒い作品はそういう意気込みは感じらるけどなあ。これ君何やら長谷川君のうわ前を行つたみたいだな、僕は長谷川君なんかの二、三倍の仕事をしてはしかつたんだけどなあ。／(中略)／吉原 僕は、辻さんの詩の書かれたものね、これは書だと思ひます。僕は文字性と造形性とを含んだ書というものはそういうもんだと思ひますわ。でこういう作品に

なつて来たならね、僕はさつき典型と教えられたから読めたけど典型と読めなかつた。こういうものになつてくればこれは書から出発して絵画ですね、矢張り僕はそう思う。でもう一つの詩の作品はあれは書ですね。僕に言はせれば。文字性を含んだもの、文字性が非常に重要な位置を占めたもの。でこの典型の場合は文字から出発して居けれども、それが最後に文字に読めなくとも僕はこの作品を鑑賞し得るものになつてますわね、これが僕は一番最初言つたように書道から出発した絵画という見方をせざるを得ないと思ひます。その違いじゃないかしらと思ひますね。これ典型でなくつても結構ですよ。私。典型と読めなければもたないようなこれは書としてもつまらなと思ひけれども、まあ書ですね、論じられる分野は。／井島 大して重要な意味を持つていないのか。／吉原 持つてないらしいですね。むしろ形でしよう、典型という。／中村 発想の動機はね、文字の一つのフォルムだけを――／吉原 ウン僕はその方にうなずけるな、典型という――／井島 文字のフォルムだけを問題にするというんだつたら君、この詩の方は何を問題にしたらいんだ。典型のフォルムとどんな関係があるんだ。／中村 いや、発想の動機が、典型という文字的な意図によつてなされたのではなくて、作家が自分の表現をしようとするところの造型的な意欲が典型という一つの文字性に於けるところのフォルムによつてそれが表現せられる動機になつたと言ふことではないですか。／井島 それなら、僕は典型なんてのを扱つかうのは愚なことだと思ふな。全く抽象絵画にすればいいんだ。／吉原 僕は扱つてもいいと思ひますよ。発想としては、文字から出発するということとはかまわなと思ひます。それが文字の意味でなくとも区割であつても或は意味が作用してもいいと思ひますけど、ね、「飛ぶ」の場合のように形自体がとんでいゝるみたいな恰好になつてね、そういう意味あいでもかまわなと思ひますけども。どういう意味合いでもかまわなと思ひますよ、その取上げ方は。／(後略)

※資料六十七 中村木子「書作品について」『墨人』十一月号(改題第二十九号) 昭和二十九年(一九五四)十一月一日発行

久しく作品の選を本部の方に委ねて、サボツていた処、今度の墨人展に上京、上洛の折色々仰せつかつて、ヘキエキしている次第、特に九月二十三日から不馴れな長旅で頭も混頓としている始末で、どうもペンを執る手もつかれて動かない。／総評して見て今月の作品は低調であり、あまり好きになれない。大別して一方に大変きたならしい一群があり、他方に上つ滑りしてスーと通り抜けてしまふ作品がある。前者のものとしては鳥集恵策君の観音経であり、後者の代表は西久保翠丘君である。然しきたない方の作品には、きたない乍らも人間的な体臭が、かすかに感じられるが、後者の方は小手先の細工丈に終つて前衛する人間と言ふことが薄れてしまつて、前衛と言ふ言葉そのものに寄り掛かつてゐるひ弱さが感じられて賛成致し兼ねる。／話は一寸飛ぶが、昨晩京都の法雲寺で、京大の井島博士、二科の吉原画伯との座談会

の中で二十世紀の特徴は各々の場に於いて、各々のジャンルを互にのり越えて行くことだ、と言ふ風な話が出たが、中河興一は非合理の美学で量子力学の究極は不定確云々と、自然科学の哲学の領域への接近を書いてゐるし、哲学は自然科学へ、華道はおブジェと見ることに於て他の立体芸術と一つになり、絵画は非形象に於いて写真性を離れて書に迎ひ様に感ぜられるが、然しこれはスタイルとして結果づけられたもののそのものが特徴だと言ふのではなく、のり越える運動そのものと、各々のジャンルをのり越え様として、そのジャンルにそれ自体に対する抵抗そのものに二十世紀後半の特徴があるのだと、自分自身に反省し考へを致したわけなのだが、現在の書道界の中での所謂前衛と言ふことや、前衛書家と称される一部の人々が、前衛的な人間、書のジャンルや、書道界の封建性や、因習や、それ等のものの自体に対する人間的な抵抗も、抵抗の運動も、又抵抗への情熱をも持ち合はせない人々が、具象されたスタイルに丈を追ひまして、自ら前衛書家グループと自称してゐることは、片腹痛いことであり、笑へぬナンセンスだと思ふ。／大分横道へ話がそれたが、この様な自分の立場から、不器用でもよいが抵抗し、堀り下げる人間的体臭を感じる様な作品に私は敬意を払いたい。／（以下個人評略）

※資料六十八 木村重信 「第一回墨人公募展表」(図161) 『墨人』七月号(改題第三十六号) 昭和三十年(一九五五)七月一日発行

(前略)一般的に言つて、対象の強い触発性と自己との対決を契機として生まれたフォルムではなく、作者の主観的な心情が優先している作品が多かつた。言葉をかえていえば、発想と表現との間にギャップがみられ、発想が定着していないものが多い。かく発想の根源に追求が及んでいないが故に、適度の造形性、適度の抒情性に終始することとなる。かゝるに、ぶい作品の中にあつて、井上有二「作品三」辻太「作品A・B」中村木子「作品A」森田子龍の諸作品(レリーフ的なもの及「5567」を除く)等は、墨の芸術独特の強い迫力がみられる。勿論個々にいえば、生命的なパトスを画面に叩きつけて成功した井上のもや中村「作品A」と、発想と表現との間に介入して来る筈の様々な雑物をあまりに削りとつたがために、却つて作品を少し軽くしている森田のものとは、むしろ逆な作風をもいえるが、何れも筆触の圧力を生かした力動感がある。(後略)

※資料六十九 ポール・カゾ 「日本の書 墨人展(ブラッセル・アポロ画廊)評」(図版22) 『墨人』八月号(改題第三十七号) 昭和三十年(一九五五)八月一日発行

(前略)現在、アポロ画廊(ステギユデュル広場・24)では、これら書家たちの諸作品が一堂に展観されている。マチエールの抽象的な豊かさ、図形的文字の活気にあふれている様子、絹の如き且繊細な調和の局面等は、明らかに民族遺産を示している。／数々のピロードのような黒の部分(影絵と同じようなもの)——そこに人々は欲する

ものを見出す)よりも、我々は辻太の諸々の記号や、中村木子の神秘的で測り知れない大きなコンポジションをむしろ高く評価している。(後者はたしかに全ての中で最も印象的である。)(後略)

※資料七十 「週刊サンケイ八月十四日号」『墨人』十月号(改題第三十八号) 昭和三十年(一九五五)十月一日発行

京都を中心とした前衛書家のグループ墨人会が、ブリヂストン美術館で、同人展をひらいて話題となつた。(廿九日まで)文字の制約からはなれて、オートマチック(自動的)な心象表現をこころみたり、スーラージュ、シュナイダーらの抽象絵画に近い空間構成をねらつたり、これはもう墨を材料とする独特な非具象芸術だといえる。墨にまぜてエナメルを使つたものもあれば、ロウをぬつて淡い墨をふきつけたものもあるが、さすが墨の色、量感、筆勢、筆触については伝統的な研究をふまえているから、海外で人気をよんだのも当然だろう。中村木子の不安な神経にみちた抒情、金森尚のチミツな面の構成、関谷義道の文字性をいかした抽象的な線と動き。内観的で、衝動的な芸術だけに、東洋の精神主義をどう克服するか、平面としての緊張の弱さをどうのりこえるかが問題だろう。

※資料七十一 中村木子 「現代日本書国内展を見て」『墨人』十月号(改題第三十八号) 昭和三十年(一九五五)十月一日発行

現代日本の書と題された今度の展覧会の意味は、書が現代日本の中の仕事として意識されての上でなされていかどうかと言うことと、現代日本の芸術の一つとしての場に書の確立がなされているかと言う事、更に日本のか東洋のと言う空間的な限定、即ち伝統と言うそのものが、どの様な形で現代と言う中の生命を造型されていたかと言う様な、作家としての立場に於ける反省の機であると同時に欧米各国に於ける現代の芸術として其感性を得ているか否かと言う様な、書が芸術として国際的普遍の中に有るかどうかの位置付けとも言う重大な意味を持つ展覧会として、誠に有意義であり、これを主催された方々の労苦に心から深謝し乍ら各作品を組上にのせて見たい。／先づ大別されることは三つある。即ち一は書を純粹造型として追求を続けている一連の作家群がその一つだ。この中には近代スタイルとしてそれ丈を追つている様な、即ち人間との断層が感じられる様な人々の作品もないではなかつたが、一応皆が真剣に取組んでそれぞれの仕事をしている見ごたえある作品が出されている。墨人、草人、平原を中心に一部書道芸術院関係の人々、奎星の人々である。／これと逆な場のグループがある。所謂普通旧派と言はれる多くの既成作家の一群である。悪い意味の写実を持つて伝統と盲信して、墮性的觀念の中で、筋肉の墮力度で筆の技法丈で制作している様な多くの作家群である。／更に他の一群は前の派の人々の中で欧米展と言うので急にアチャラカ的に衣替をして書かれている

人々の群だ。莊子の中で西施と言う美人が路上で腹痛になり顔をしかめて歩いたら一層凄絶で美しかった、これを見た多くの醜女達がこれをまねて顔をしかめて歩いたので多くの家々では表戸をしめたと言う故事があるし、最近では故渋沢栄一翁が始めてパリに洋行する時、横浜中を探して一番美しい洋服を着て洋行したらパリのホテルでどこでも変な顔をして入れてくれないのでよく聞いたらそれは料理人の着る正服であつたそうだが、何かこれ等の群の作品はどうもそのような滑稽さが先に感じられる様だ。／扱一階から順次個々の作品に愚痴をのべよう。(敬称略)／南谷 キャンバスに油を使つて白の部分に茶色の色彩を使つて空間のバランスを計っているが、少し説明になり過ぎた様だ。／祐豪 この人のこの仕事は板についてない。線性もろく、黒がアイマイだ。／竹胎 かなは美しいがこれだけでは画面がさ、え切れないのではないか。／大抱 天地有情は朱印に意味がないと言うより邪魔だ。後半がリズムカルで美しい。／信山 いつもの調子のものだが自分でこの味におぼれてはいまいか。／晴嵐 強勉は白の意味を持たない作品だ。／翠邦 小品乍ら心手共に高く澄んで美しい、羨ましい心境だ。／江川碧潭 ナイーヴなデザインの中に人間性を強調され様としたらしいが、こゝでは徹し切れず成功してない様だ。／鷗亭 黒がなまぬるく、抵抗が弱い。／節堂 古文を書くことによつて、古代を強調しようとするのか、新しがりやとするのか、こゝでは原始の姿も近代も感じられない。昔こう言う書体があつたと言う見本ならよい。／西川寧 なれない仕事をして危かしいものだ、墮性乍ら落款の方がまだよい。／史邑 手なれたもの丈で安易であり弱い。／如流 デッサンが確立されず墮性の書。／芳翠 仕事が小さく、大体小味です。／泰雲 こゝでも一夜づけの様な作品に出くわした。ごまかしのない、真実な人間の定着がなさるべきだ。／鶴仙 技術的に達者なものの乍らそれだけの時に自分自身が陶醉してはいまいか。／杉雨 デッサンが不確故危かしい。／右卿 や、甘い乍ら構成がしつかりしている、但し日展向の作品と両刀使いの器用さがある丈にこゝからは体臭が感ぜられない。感覚派の達者な作品。／藤岡保子 特異な線質とタツチが空間に響をたゞよわせていながらや、冗漫過ぎてうるさい。／高塚竹堂 僕としては紙煙草の朝日の包装紙位にしか受けとれない。／龍堂、竹逕 あの細字かな、そしてあれ丈の歌を書き綴らねばならぬ必然さがどこにあるかが疑問也。／翠軒 短冊二枚、君が行くの方や、小味乍ら牙を見せている。雁鳴之の方規模大乍らや、散漫、但し平素の翁の作品に比し何か物足らぬものがないでもない。／森田竹華 よく整理されて簡美、澄んで美しい、他の上代かなの写実一辺倒と比すべきでない。副島蒼海が連想され作品以前の人間性の高い心に打たる、思い。／心象 構成への心やりが粗暴だ、根底のない子供のなぐり書きだ、然しそれを反省意識することにより他への飛躍が感ぜられないこともない。／龍岱、翠岱 いづれも線がもろく散漫乍ら翠岱料紙の持味を生かして淡いロマンな意図はつかめる。／春敬 左の画面の空間が遊んでいる。／泰南 墨人発刊当時、吾々が試作した頃の

イミテーションか。／木暮青風 翠軒風の墮性の中での仕事。／村上三島 現代のと言う言葉とは程遠い、この人の時代感覚が疑わしい。／摂南 細い線がイラついて空間がさ、えられない。／炭山南木、川村驥山、赤羽雲庭、小坂奇石、近藤秋皇、いづれも墮性の中での作品。／浅野五牛 思い切つてやりたかつたらしいもだが心を打つが、どうも氣のきかぬものになつてしまつた。これは本人自身が自覚されていること、思う。／徳野大空 この人としてはこの方法以上は望めぬ様だ。正直な作。／宇山、博明 黒も白も黙して話しかけてくれない。それ丈に途太い。／岸本太郎 騒音だけしか聞えない。印は何の役目をするものぞ不明。／関谷義道 墨人公募一連の作で大きい進展を見せて成功している。特に道がすきだ。／幽峯 この室にならべられたことがこの人には氣の毒だ。／桑鳩 戦の後の静けさか。戦争か平和か、一切の未来を蔵する戦の前の静けさではない。／林子翠 曲線、直線の構成大変面白い。僕は好きだ。只、利巧すぎ理屈すぎ、人間的な臭さがほしい。／邑水 もつともつと泥臭さに徹してもらいたい、何かまだ一押と言つたもどかしさを感じる。／武士桑風 この人も自分の味におぼれてはいまいか。／宇野雪村 相当額等金をかけて凝つてはいるが、こゝでは、それら一切を含めてのマチエールが生かされていない、何かばらばらだ。／小林龍峯 かめ、墨人展の出品作の様な理屈さが、より人間的なものにおゝわれてダイナミズムな美しさだ。／神谷葵水 は甘く春蘭の構成又もろい。／鶴飼寒鏡 さ、やきが弱い。／和井田要 この作家の系列の中ではムーヴンがある、浜田は仕事が小さい。／池田水城 墨人展の道に比し白の中が充実して好ましい作だ。／岡部蒼風 兄の作としては更に整理出来て美しい、然しこの作からは何か風景と言つた様な写実的なものが暗示されてどうもそれが邪魔つた。／野牛、瓦木 奎星臭でモダンなスタイル乍ら腹ごたえがない。その点西久保翠丘はデカにぶつかつていて好ましい。／笹野舟橋 は持てあましている様だ。／西野 光線の関係からかボリュームがない。／森田子龍 今迄のどの作よりも進展して、大きな仕事をのこしている。然し黒が、本当にギリギリの黒で僕自身どうして、か判らぬがこの黒が白に対してと言う様な相対的な意味でなく黒が黒丈の世界の中での仕事がこの人自身としても物足らぬのではなからうか、兎に角傑作の一つだろう。／篠田桃紅 焦点がにぶい。これは自分の墨人展作がそうであつた丈に尚一層氣にかゝる。／今井満里 円運動の繰返しがにぶい為か、何かモタツク様だ。／辻太 今迄の作品中一番途太くそして安定している。病中の思索が幸したか。／中隠 白のフォルムが一応成功している。／冬珉 黒が生ぬるい、この前にも一度そう感じた事もあつたが、今度もその感じだ。黒が黒として今一段研えてもらえたらとも思う。／井上有一 構成の確かさ、場中第一也。／江口草玄 今度の仕事、一寸神経質になり過ぎて小味だ、然し画面への心やりよく行きとゞいている。

※資料七十二 『「フレッセル墨人展評」』1955年6月14日付ラ・ランテル又紙

『墨人』六月号(改題第四十五号) 昭和三十一年(一九五六)六月一日発行

(前略)即ち、問題の日本の書道作家は書道の伝統的作法からきつぱり別れて、幾年も続けた努力の末、真に芸術であり、新しい、再考された芸術であるところの書道をつくり出すにいたつた。この仕事に献身した人々には、江口草玄、井上有一、森田子龍、中村木子、関谷義道、辻太などがある。／展示されている彼等の白と黒による作品は、私もその一人であるが、ある人々にとつては高い芸術性をもっているし、他の人々にとつては、明暗、黒白のみによつてつくられた作品を鑑賞することの出来る人々の注意を惹かずにおかない性格をもっている。

※資料七十三 井上有一「身辺雑記」『墨人』六月号(改題第四十五号) 昭和三十一年(一九五六)六月一日発行

森田と江口と今岡が京都、関谷と辻が岐阜、大沢が豊橋、中村が佐渡、僕が神奈川、というわけだから、草人社みたいに毎月集まるなんてことは到底出来ない。墨人会を結成した時に、毎年なるべく頻繁に集まるうではないか、それが何より大切だと話し合つたのだが、今までのところ毎年三、四回以上は集まらない。それ以上は第一汽車賃がかさんでやりきれない。／年三、四回の集まりにしてからが、全員揃うということが容易ではない。全員の都合つく日をきめるということが中々むずかしい。特に木子なんかは、商売の關係で全国をとびまわっていることが多いから、連絡が中々つかない。今度の集まりにも、木子との連絡には草玄が十分苦心した。(後略)

※資料七十四 中村木子「作品選評 自由習作」『墨人』十月号(改題第四十九号) 昭和三十一年(一九五六)十月一日発行

我々墨人の第一の目標は従来の書の様相の中で最も大切なこと乍ら一番忘れられなおざりにせられ、然もそれが書の練磨であるかの如く觀念化されている、即ち個の確立と言うことであつた。師の手法を習い、作品すら師風を追う陳腐な世界からの脱皮、個々が自由にそれそのままを定着せしめ様とする純粹な芸術への復帰、それ等の為への手段としてのことであつた。ところが最近所謂前衛と言う名への無条件のあこがれか、或は一時の流行か兎に角形式主義に流れ、スタイルを追つて新しがるうとする傾向が生じ来たつたことは困つたものだ。最も絵画の世界においても、非形象、非具象の若い人々の中にも似て非なるものへの追従に自ら反省と批判の光が生じつつあるが、書の方ではその歴史が非常に浅いだけにその反省する生まれてこない様だ。／先月夏の休中にも美校在学中の人々が帰省中の一日を拙宅で色々話し会つたが、彼等若い世代の諸君ですら、精神の所産である可きものがそれを忘れて形式を追つている人々に対して痛切な言葉を以つて批判していたが、墨人結成への精神もそこにあることも改めて強調したい。石川達三は中共視察後の自由主義論議で

世論を騒がしているが、火野葦平との対談ではやはり作家が作品内容の自由を権力でおさえられることはつらいが、然しその様な犠牲もよりよい社会を構成する為には止むを得ないとしている。しかしこれでは全くやり切れないと思う。国家権力でなく神の批判とか、社会生活の良識とかに浄化され得た自由と福田恒存は言っているが、社会人としてのこの自由は我々に一番大切なものと思う。そしてこの自由は追従とか、屈従とか、形式主義とかでなく自分なりの真実の定着であることを忘れてはならない。随分無駄口をたたいたが今月の作品を通して特にその感が強い。井上、森田、関谷三同人の個性的な作品、三氏は三様にそれぞれの場における諸々のことを、それぞれのフォルムとリズムで統一しているが他の人々の作品にはその様な香りが無い。／大橋君、伊勢田君の作品は言葉を通しての言葉と作家精神との共感が作品に体臭をただよわせているし、井沢華舟君のロー引の作品と大木幹式君の墨象Aが未完成乍ら希望が見出されるのではあるまいか。要は作品への必然性と言うか近代人間性の統一と言うか、どうも自分でも言葉で表現出来ない。表現し得ないこと乍ら何か足りなさ、もどかしさ、作品のチグハグさがこらえ切れない。作品と言う具象化の前のものの整理、統一と言つたもののひたむきな謙虚さを望みたい。

※資料七十五 井上有一「墨人史」『墨人』四月号(改題第六十六号) 昭和三十三年(一九五八)四月一日発行

昭和二十七年一月四日の昼下り、京都龍安寺の縁側に四人の男がうずくまつて、何か考えこんでいた。やがてその中の一人、小柄で鼻の頭に汗をかいた男が、／「ボクジン……」とつぶやいた。すると他の三人の男、一人は髪の毛を長くしてやせこけた男、一人は細縁の眼鏡をかけて顔色のあまりよくない男、いま一人は煎菜頭で無精ひげをはやした薄汚い男、の三人が、／「うん、それがいい」と相づちをうつた。／その時は来なかつたが、いま一人佐渡の魚とりを入れて五人、上田門下をとび出し、素裸になつて墨人会を結成したのである。／(中略)／我々は結成当初、種々の困難の生ずるであろうことをむしろ期待したにもかかわらず、実際はきわめて楽しかつた。あの時ほどの楽しさは一生に二度とはあるまいとおもうほどである。当時の墨人会をみて、このことはどの頁からも感じないわけにはいかない。それは古いきづなをたち切つて、自由に書き、自由にしゃべることの出来る喜びであるとともに、我々墨人につながる者たちの間の一切平等の上に立つた相互の人間の信頼によるものである。特に同人五人の間には少しも腹のさぐりあいの必要はなかつた。それは今でもないが。子供のよう純真に接し得ることは何よりも楽しいことであつた。その意味もあつて、しばらく続いた作品互評は、墨人の一つの魅力であつた。越後に良寛の遺蹟をたずねた旅の如きも、懐しい思い出の一つである。／(中略)／グループを結成して二年半、二十九年九月、十月第一回同人展を東京と京都の丸善画廊で開いた。多種多様のものが並んだが、中でも江口の一連の作品は、この時

代の風潮の中での傑作であつたとおもう。この時の主な作品は海を渡つて、パリ及びブリュッセルにおける墨人会展となつたのである。／この海外展や、その後のサロン・ド・オクトーブルに森田が招待出品したことや、パリ及びミラノの国際展に森田、中村、井上が招待出品したこと、あるいは欧州巡回書道展の実現したこと等々は、欧米各国におけるBOKUJINの反響により実現されたものである。／（後略）

※資料七十六 井上有一 「最後の大収穫」 『墨人』九月号（改題第八十二号） 昭和三十四年（一九五九）九月一日発行

東京駅の八重洲口で、森田がロッカーに荷物を預けているのを、辻と二人でぼんやり待っていると、突然辻がおれの肩をいやというほど叩く。痛いナとおもつてふとふりかえると、こはいかに……十米ばかり先に、中村木子の禿頭がみえるではないか。偶然というにはあまりにも不思議なことだ。グループ結成以来の盟友彼が、一昨年の春からばったり音信不通になつて、誌上からも姿を消してしまつたからというもの、我々の頭にはいつも彼のことがあつた。集まることに彼のいないことが淋しいことだつた。「木子よ、どうして書をやめてしまつたんだ。早くもどつてこい」と、佐渡へ向かつて叫びたいような気持を皆が抱いたことだつた。その木子が全く突然、3人揃つている前にあらわれたのだ。北海道旅行の最後の仕上げに、この邂逅の機会を天が作ってくれたとでもいおうか。／池袋三越で開かれてゐる草人展をみて後、卓を囲んで木子と心ゆくまで話し会ふ。彼は相かわらず健在だつた。仕事に忙しいのでこしはらくはだめだが、来年はきつと書の道にたちもどれると、彼ははつきり言つた。そして最近の墨人誌をみての卒直な意見をまくしたてた。頭は少し薄くなつたが、木子はやはり昔の木子だつた。／もうすっかり夜になつた街角で4人は別れた。（34・38・31 井上有一記）

※資料七十七 江口草玄 「中村木子の冥福を祈りながら」 『墨人』四・五月合併号（No.225） 昭和四十九年（一九七四）九月三十日発行

中村木子が死んだ。昨年の5月、汐の匂いがゆらぐ富山湾滑川の、あの町で、中村木子は死んだ。息子さんの嫁さんがやつてゐるという中村パーマ店の、左側のせまい黒ずんだ板廊下をふみしめながらの奥の部屋、柏崎行の汽車時間までのほんの3時間ほど一緒にごろ寝したあのうす暗い部屋で、木子は死んだのであろう。自分で石を運び、木を植え、池を掘つたりして作つたという、しかしもう池には魚が泳ぎ、石も木にも苔が生え、地に根をおろしているその小さな庭を見ながら、木子はどんな感懷をいだきながら死んだのであろうか。／あの時、一升ビンを二人のまん中に立てて未明まで茶碗酒をあおりながら木子は、熱っぽく写経のことを話していた。昭和47年8月20日のことであつた。聞きながら、わが身になつてゐる苦をそれこそ苦もなく破顔一笑するふだんの木子と写経とは一見、似つかわしくなく思いなが

らも、その似つかわしくなく木子のそのもう一つ向こうにあるものにふれた思いであつた。今もはつきりと、その時の茶碗の中の酒がゆれていたことや、ハムの切れはしのほかに唯一の酒の肴であつた鯖の甘煮の、木子の食べちらかしの具合をも含めて、浮かび出る。／その時の1年ほど前、不慮の交通事故にあひ20数才で亡くなれたという、ただ1人のお嬢さんの遺影がかざられてゐるお仏壇に拝礼して下げてきたその写経を私に見せ、彼は写経を語る。胸かきむしられる思いであるう、写真で見ても手塩にかけて成長された、ほんとに美しい、今は亡いお嬢さんのことには深くふれず、書のこと、人間のこと、写経のことを彼は私に話す。笑福亭松鶴に似たその顔から飛び出す言葉は、真実の響きをもつ。／人間へのかなしみの言葉であり、かなしみは人間へのおそれに深化し、また一転して、すさまじい怒りのウズ巻きの中に身を置く。と同時にその奥では、ますます、かなしみがひろがる。写経は人間へのそのおそれで書く、と言う。近々にはじめての個展を開くのだとよるこぶ木子の、その成功を祈りながらも酒に酔いしれていたのは私であり、木子こそ酒にも人間にも、そして人生にも、醒めていたのかもしれない。／中村木子という1人の人間が、佐渡で生まれて、墨人会を作り、墨人会を離れ、そして滑川で死んだ、ひっそりと死んでいったその木子の、大名が大手を振つて歩くが如き天下堂々にふりかぶつて生きるというものでない、言うならば、それをこそまさに人間のまことな生きざまと言つてもいい、その生きざまを生きたその根に、さわやかで、いさぎよさのあることを私は今あらためて思うのである。／いま、中村木子を知る人が、このわが墨人に何人いるか。中村木子と談笑し合つた人を数えてどれほどの指を屈せられるか。嗚呼。／ただただ、中村木子の冥福を祈るのみ。

※資料七十八 井上有一 「木子のこと」 『墨人』四・五月合併号（No.225） 昭和四十九年（一九七四）九月三十日発行

たしか昭和23年の暮だつたか、当時ばかりはまだ書の展覧会というものを見たこともないままに、毎月世田谷の上田桑鳩先生のところへ臨書をみてもらひに通つてゐたが、その時ちょうど地方から先生のところへ作品が沢山送られてきてゐるのをチラとみた中に、山名村碑を臨書した全紙2枚つづき——おそらく二曲屏風になるのだろう作品があつて、それがえらくうまいのと、書いた人が中村木子という妙な名前なのと、その印がこすれて汚れていたのを今でも覚えてゐる。木子という名前前から女かなどともその時おもつた。木子にはじめて会つたのはその後2年ばかり後で、墨人結成の話のために草玄と2人でばくの家を訪ねてきた時であつた。草玄にもこの時はじめて会つた。会つてみると意外にも木子というのは女どころか佐渡の荒浪の中で育つたがつしりした体の持主で、さびのきいた声で人なつこく話すらしいく男だつた。／木子にはちよつと器用なところもあつて、それが災いしてすぐみえすいた人のまねをするところもあり、同人の間で叩かれたこともあつた。しかし自由

奔放の中にこまかい神経のおった彼の作風は中々魅力的であった。彼の手紙の筆跡などにはほれほれするような出来のものがある。去年だったか書家の手紙を沢山あつめている名古屋の久野麦銭が木子の字を激賞していた。また彼の闊達な人柄は温和しい人ばかりの墨人の中で、われわれにとつてなくてはならない人間でもあった。彼が酔うと歌った佐渡の本場のおけさや相川音頭、両津甚句など日本海の荒浪をほうふつさせて、今おもしろい出してもなつかしい限りである。／木子が墨人からいつのまにか姿を消したのは何年頃だったろうか。その後彼は生まれ故郷佐渡を出て滑川に住む身となった。2、3年前草玄が滑川に彼を訪ねた時、彼から電話がかかってきた。よっぱらってるれつのまわらぬ彼の声は子供のように純真でしきりになつかしかった。それがさいごの別れになった。／彼とぼくとは同じ大正5年の2月生まれでたしか彼が数日の先輩であつたようにおぼえている。彼は57才で死んだ。(49・5・21記)

※資料七十九 森田子龍 「中村木子を惜しむ」 『墨人』四・五月合併号(No.225) 昭和四十九年(一九七四)九月三十日発行

昭和26年ごろ、井島先生や長谷川三郎氏を囲んでお話を聞く機会が多くなっていた。そういうとき、木子もはるばる佐渡からかけつけた。会のあと、時間の経つのも忘れて熱っぽく語りあつて、2時、3時になるのが常であつた。木子はやや漢語が耳につく話しぶりが特徴で、一面ユーモアに富んでいて座の空気を飽きさせなかった。話しあいの中では、書家の生活、あり方への疑問が中心の位置を占めるようになり、あるべきあり方を論じあい、その具体化の道を求めて、旧いしがらみから自由な新しいグループを持つべきだという方向がおのずから出てきていた。それが27年1月4日の龍安寺石庭での「墨人会」の創立として実現したわけで、木子は墨人創立会員の一人なのである。／当時の誌上にもこのつてに、同人の互評などかなり頻繁にやつたが、木子はそのほかに個人的にも臨書や作品を送ってきて批評を求めた。それも何十枚もどさつと着くというのが常で、これも木子思ひ出草の1つである。作品はものにこだわらないひょうひょうとした気分のよいもので、何十枚あつても特にいやなものはない。と同時に、今は特にこの方向を追求したというような風は見えず、だから追求の成果として特に光る作品があるというわけでもない。それは木子の余人とはちがう美点であつて、よそゆきでない平常の自分のびやかに淡々と表出して動することなく、むしろ楽しんでいたのである。木子が今日まで書の道を続けていたという仮定が許されるなら、その作意のない自然さが深まりをもつて貴重な存在になつていたことと思う。傾向のちがう当時の私には、その美点を美点として認め羨ましく思ひながらも、やはり食い足りない側面を時に抑えかねて苦言を交して互評を交換したこともあつたように思う。／墨人はその後に加わつた仲間も含めて、学校の教師が多かつたが、木子は今でいう中小企業主

であつた。ということは、生活のあるレベルは保証されているというわけにはゆかず、うんといひこともありうるかわりに苦境におちいることもあるわけで、後には事業が思わしくなく書の勉強も中断することになるわけだが、墨人初期の彼には、そういう辛酸の前にさらされている生活のゆえか、作品とは逆にきびしく自分を処するといふ一面が潜んでいた。人間関係の機微、殊に経済的なものが介入するときのそれについては、内に信ずるところがあつたようだ。善意で交つておればよいという私などのんきさが危うくしかして見ていられないらしく、2人だけになるとよく注意してくれた。別種の人間経験から私のために語ってくれた好意に満ちたことばの数々を懐しく思い出されるこの頃である。／木子は、その人柄においても、生活からつかんできているものにおいても、われわれ墨人の仲間のなかではひとり異種であり独自のものではあつた。もし彼が中途の障害に妨げられることがなかつたら、墨人の現在はどうあるだろうか。大事なかけがえのない支柱を失つたのだということに気づいている私である。

※資料八十 久野麦銭 「木子追懐(癸丑・賀状によせて)」(図186) 『墨人』四・五月合併号(No.225) 昭和四十九年(一九七四)九月三十日発行

毎年元日にドサツと音をたてて投げ込まれる年賀状の束は正月では一番待遠しく又何よりも嬉しいもので、早速その束に飛びついて茶の間でストープを囲みながら、雅友知人等からの年賀状を見るのは何んとも言い様のない楽しいものの一つである。／それは去年のお正月、葉書を見ていると上手い字だが、さて誰からだろうか？ 知友のものは一見して解る筈なのにそれはどうしてもパツと来ないものであつた。さてと裏返すと、萬寿無疆 とやまけん東なめりかわ大町とあり美事な書、木子からのものである。長らく音信不通になつていただけに懐かしいやら嬉しいやらで、ほくほくしたものである。而もその書の味わいの深さに流石は流石はと感心したものである。早速正月7日より丁度県美術館で催した墨人サークル展に飾らせて貰つたものであるが、ニューフェースでは仲々あつた調子の高いしみじみした深い味わいは出せないのではないかと思う。彼に初めてお目にかかつたのは17、8年前で、業界の慰安会に京都へバスで出掛けした折横着な僕は博物館前でずらかり、そこで偶然にも長谷川等伯の松林図を観スゴイナスゴイナと何度も叫んだものである。その足で大宮大門に森田子龍氏宅を初めて尋ねたら、たまたまその日は研究会を開いておられた所で、席上森田さんの御紹介で井上有一や木子、草玄等にも初めて挨拶した様に思う。無口な一はしきりに出席者の似顔を筆で描いていたものである。／その折は一言も言葉を交さず、後年1、2回お手紙は頂いたこともあり、かの伊勢湾台風の折には安否を気遣つた葉書を頂いたかと思うが、その後1回半紙に近代詩と他に2、3書を送つて来たが、これはまだ上田先生の句の漂っているものであつた。今年には年賀状を僕も出し又彼のものを待っていたのに、なぜかとうとう彼からの

のは来なかった。／其後かなりして木子はぽっくり亡くなったと言う事を篠田さんより知らされ、暗然としたものである。／かくして彼とは一度もゆっくり話すこともなく永遠に別れて仕舞ったのである。が、今手許にある小さな石地蔵は多分彼が上田先生に贈り、先生より僕が頂いたものであるが、此の佐渡の石地蔵を撫ずるのも是又因縁と言うべきであろう。 合掌

※資料八十一 「還暦の思い出」(図172) 『銀嶺』No.118 昭和五十三年(一九七八)六月六日発行

(前略)さて、歌のおくり主、木子道人中村佐魂氏は、両津(サ食品工業(株)社長で、幼少より書(道)をよくし、上田桑鳩門下の逸材として、16歳で毎日賞、その後、日展、県展その他にしばしば入選、入賞、ロスアンゼルスで個展を開くなどめざましいものがあつたという。／この歌も、ありあわせの紙に興にまかせて、いかにも無難作にしたためながらも、片鱗をうかがわせるものがある。／なお、同氏の父佐次平は、永年会長とは格別昵懇であつたが、すでに半身の自由を失っていて、惜しいことに列席し得なかった。／もはやお二人とも、故人である。

※資料八十二 横山蒼鳳「越佐の埋み火」(25) 中村木子 新潟日報 平成七年六月二十八日

なかむら・ぼくし 1916年(大正5年)2月、両津市に生まれる。 本名、佐魂。父創業の蒲鉾製造業を継ぐ。書にも傾注、青年期の雅号は香山。旧来の師承、会派を離別、井上有一ら5人と墨人会結成、のち離脱。家業不振で両津を去り富山県滑川市へ移住。会社出張先の長野で心臓発作。(前掲註45 享年57歳。

もし、という仮説が許されるならこの人は日本を代表する書家か、蒲鉾(かまぼこ)屋になっていただろう。そんな思いがしてならない。そして取材をしてゆくと戦後の熱気を浴びる。／戦後五十年というがその熱気は昭和四十年ぐらいまででなかろうか。六〇年、七〇年の安保。多くの国民はいろんな立場で国の将来を案じた。それが投票率に顕著。国政選挙で昭和二六年は九一・五%、三十八年でも八四・五%。今と比べ隔世の感がある。／そういう中に書もあつた。墨人会は書における個性と革新を提唱した。森田子龍、井上有一、中村木子、関谷義道、江口章玄の五人。結成挨拶(あいさつ)文にせっぱつまつたような一文がある。／「東洋の一隅に長い伝統を守りつづけて来た書芸術が世界的視野において真に現代の芸術として更生し得るか、それとも進歩的な(外国の)芸術家達にその枠を吸収し去られて自滅してしまうか、今や正にその関頭に立つに至つた」。この問いかけはそのまま現代の書に生きて問いかけているものであるが、外国の芸術家たちに触発されたといえこの人たちが次々とアメリカなど外国で個展を行ったことが果たして書の進路を拓(ひら)いたことになるのか。同じ世代で蒲原平野を描きつづけた佐藤哲三を対比させたとき

かななものかと思う。木子も有一も草玄もやがて墨人を去る。労働者は団結すべきだが芸術家は群れを為(な)してはならないことを示しているといえよう。／佐魂とはよくぞつけた名前である。親の思い入れがあふれている、新潟では頑固者のことを「いちがいこき」と言うが佐渡では「もっこもん」。その発音を漢字に書いたのが木子だ、と子供たちに語っていた。安吾の自画賛のような色紙「あちらこちら命がけ」を地でゆく如(ごと)き熱血漢であつた。いとこの伊豆野壹郎(現両津市長)が社会党であるのに対し、北吟吉を擁しての政治運動。両津市内の小学校区再編成案に反対するハンスト。家業の蒲鉾製造を機械化する計画をすすめ特許、新潟寄居浜での製塩業、熱血漢は疾走した。／二男啓二には朝から夜まで墨を磨(す)らされたことや、魚の摺(すり)り身を実に巧みに板にのせて形にしてゆく手さばきが目にのこっている。「あれが字をうまく書く秘けつかな」と思っていた。ある日父はほうきにするシュロを買つて来て蒲鉾づくりの広いところで絵のようなことをやり出したという。このころ井上有一が「全身墨まみれ」になって前衛なるものをやり、マスコミが話題にしている。錯誤は試行なるがゆえに価値がある。このあとで何が生まれるのだろうか、との可能性をひびかせるところに人が立ち止まる。有一も木子も程なく「読める書」の次元に戻ってくる。／木子は書の教員・審査員を目指して書に取り組んだのではない。書につき動かされるものがあり、書かずにはいられない人としての行為である。滑川での晩年は地元紙に随筆を執筆(調査したが不明)。写経もやっていたという。

※資料八十三 伊豆野一郎「市長考え歩記」(二六) 生き方」『広報りょうつ』七月号 平成七年(一九九五)七月十四日発行

近ごろ書の上手な人が多くなった。街のギャラリーで見かける書も大したものだと感心することがたびたびある。／私は子供のころ、一日一回必ず硯に墨をすって机に正座したことを覚えている。記憶では、父が私の従兄・佐次平の佐魂兄に見習わせようと、筆を持たせたのだらう。佐魂流の書き方をしては、亡くなった同級生の北光男君に、「伊豆野は学校の先生より佐魂を先生としているがよい」と言われた。それ程書いたのに、ペン字は他人には読みづらいし、筆字も上手にならない。唯一いばれるのは、墨を左右均等に磨り減らすことだけだらう。／先日『N紙』に佐魂こと中村木子のことを、元県庁職員の横山博(蒼鳳)氏が書いた記事を読んだ。私のところに木子の書があることは横山さんに話したことはあつたが、拙宅に来られたとき出張中でお逢いできなかった。／従兄の政治活動の中心が、戦後新保守党の自由党の創造に参画した同じ湊出身の北吟吉氏にあったことは否定できない。前衛的な書といい、冷蔵庫づくりに奔走したり、イカの乾燥機に取り組んだり、現在なら何でもないことを昭和二十年代から三十年代初めに情熱を傾けたのだから、驚くべき先見性というべきだらう。／ただ財源の見込みのないまま突っ走ったから家売って

も借金は返せなかった。その木子は政治では保守党であった。だから私が市議会に立候補したとき、木子の父、私にとつての伯父が推せん人になっていたのに彼の反対にあつて、ポスターに小さな紙をはって伯父の名前を隠したこともある。／最近無党派が多くなったという、それがファッショ待望の現われだという説もある。戦前、ヒトラーの「わが闘争」を読んでいた従兄の書だけが残つて、いろいろに解釈される、これも人生だろう。

※資料八十四 松矢国憲 「研究室より 佐渡の鳥影―中村木子ノート―戦後の書・その一変相 江口草玄」補遺」(図160、167、168、183) 『雪椿通信』第九号 新潟県立近代美術館 平成九年(一九九七)十月発行

昨年開催した「戦後の書・その一変相 江口草玄」の為、一昨年草玄と共に佐渡出身のもう一人の書家中村木子を追った。しかし、意中の作品は発見できず、同展では3点の展示に止まった。これはその果たせなかった木子についての記録である。／佐渡の言葉で「頑固者」を「モッコ」と言い、木子という号はその当字である。戦後、1947年頃から使い出している。彼の記述から戦前より鶴鳴流や翠軒流を学び、香山、翠江、翠々庵と号していたことはわかるが、木子たるものは、戦後の書の革新運動の中での姿であろう。／墨人会の創立同人でありながら、その活動は短命だった。家業(水産物加工業)の経営の為、創立5年後の57年には断念せざるを得ず、64年以降は名簿上からも名が消えている。一時期復帰を試みているが続かず、亡くなる半年前(72年初冬)に富山県民会館での個展が最後となった。／木子は生前、長男絃一氏に「会社が本業で、書は趣味だ」と語っていたそうだが、真意は単なる趣味として割切れるものではなかったであろう。調査中拝見した数々の写真、書簡などの遺品はそれを物語っていた。僅か5年余りの時が、木子が疾走した時期と言えよう。／《作品》(図167)は発見できた作品の1つである。若干構図の違う作品が56年の墨人展に出品されている(図166)。剛毛の筆さばきの跡が非形象を織り成し、黒と白を共鳴させようとしている。出品作の方が布置等確かであるが、本作もこの時期の傾向を示すものである。翌年早々に墨人会を離脱しており、模索半ばでの最も方向づいた頃の作風と言えよう。当時井上有一もストロークによるエナメル作品を書いているが、木子の場合ストロークではなく、筆触、毛と紙との摩擦、抵抗感が作る緩模様であったと言えないだろうか。／佐渡時代交友の深かった神蔵翠甫氏に「ミロを意識し好んでいた」と伺った。事実木子のこの時期の作品は、形態的にミロ風な細い線によるユーモアのある形態の作品を図版等で確認できる。また神蔵氏は超長鋒の鋒先を焼いた筆を使い飛白のような線をよく引くところを(こうした飛白を用いていたのは桑鳩師事から墨人の早い時期であろうが)目撃しており、この点からも筆触、筆線の変化による作品を追求していたと見てよからう。発見できた《作品C》(図160)は、まだミロの影が表立つ作品であり、《作品》に至る早い頃の作と推定できる。／この2

作は当時唱われた国際的普遍性を求めた海外との交流を反映しており、海外画家の動向を注視した中から生まれている。けれども3点目の《救》(図168)は珍しい作品である。散見するところでは、水溶性ボンドを混入した墨の使用は60年頃からであり、こうした一字書による作品の紹介をこれまで見たことがなかった。離脱後の作であろうながら意志的筆意が満ち、情熱の火は消えていなかったことが窺われる作である。／「人間的な抵抗も、抵抗の運動も、又抵抗への情熱」を以て革新していくのが、前衛書家の立場であり、既に具象されたスタイルを盲従するのでは前衛の名折れであると放つた木子の情熱を注いだ姿がこれらの作品であった。／しかし、絶えずその前には本業の経営が立ちほだかり62年佐渡を離れる。そして転居後しばらくは筆を持たず、また73年4月(筆者註・五月の誤り)に亡くなるまで佐渡に渡ることとはなかったという。／72年頃の制作と思われるこの色紙(図183)は、木子の心中が投影されているように見える。佐渡への郷愁は、思い半ばにして断つこととなった全て(稼業であり、書であり、ここには書かなかつた政治活動等)に連なり、木子が戦後、駆け抜けた姿に重なるように見える。しかし、最後の個展の頃の作品には、50年代の熱のような面影は既に薄くなり、落ち着いた静寂が見えるようである。／モッコが見た夢の一端をここに止め、果たせなかった展覧会を補うものとした。

※資料八十五 松矢国憲 「私とこの一点 中村木子」(崔顥詩黃鶴樓) (図49) 『雪椿通信』第四十五号 新潟県立近代美術館 平成二十七年(二〇一五)九月一日発行

中村木子を追いつけて20年。その木子の作品を昨年度、塚本惣右衛門氏と順一郎氏から合わせて5点御寄贈いただき、展示できたこととなった喜び、この上ない。しかも、本作は調査の中で発見した戦後50年代の展覧会出品作であり、感慨も一入なのである。／木子を知る人は少ない。しかし、戦後の書の革新が図られた時、その先鋒となつた新潟県人が柏崎の江口草玄と佐渡の木子だった。草玄氏は現在も作品発表をされておられるが、木子は、昭和48年(1973)5月に亡くなり、その上、制作時期も31年(1956)末頃までが主な活動時期であり、既に60年経ち、作品の所在確認も容易ではない。本作の制作当時、木簡の運筆を取り入れた書が多く書かれるが、軽く打たれたミヤ鳥の四点などの軽妙さと、斑に掠れる筆線の妙味に、新しい書を模索した時代の息吹が窺われる。翌27年(1952)正月には、既成の書壇と訣別するため師の上田桑鳩とも袂を別ち、より先鋭的な制作を始める胎動期の作品と言えよう。新潟県の書人の記録を留めていく好作品だ。／なお掲載図版は、調査時点での写真のため影もあるが、表装を仕立て直して10月6日からコレクション展示室で初お披露目する。疾走した木子の50年代の息吹の一端ををご覧いただきたい。